

讚良郡条里遺跡、小路遺跡、  
打上遺跡、茄子作遺跡、  
藤阪大龜谷遺跡・長尾窯跡群、  
長尾東地区

一般国道1号バイパス（大阪北道路）建設に伴う埋蔵文化財確認調査報告書

2002年8月

財団法人 大阪府文化財センター

## 序 文

本報告書の対象となっている寝屋川市・交野市・枚方市域に存在する、交野台地および枚方丘陵は各時代の指標となる資料を伴う旧知の遺跡が点在することで知られています。それらの遺跡では旧石器ないし縄文時代というきわめて古い時代の遺物が出土する傾向がみられ、この地域が農耕社会の成立以前に良好な狩場にめぐまれた、生活条件の整った場所であったことをうかがわせます。時期がくだって古代には、秦氏を代表とする渡来系氏族が移り住み、漢字や朝鮮半島系の文物・生活様式など、当時としては最先端の技術が多くもちこまれたことでも知られます。

もう一方の調査対象範囲である寝屋川市から門真市にかけての平野部は、非常に平坦な場所だったとみられます。これらの地域では水が豊富なため、農耕技術が取り入れられた当初においては活発に農業開発が進められました。その結果、この時期の核となる大規模集落がいくつも形成されました。今回の調査でもその活発な生産活動の一端をうかがうことができます。

異なる立地のもとで発掘調査を行うことを通じ、自然環境が社会形成にどのような影響を与え、それが自然にいかにフィードバックしたかを考えることも重要なことがらです。確認調査の性格上、面的調査に比して個々の調査成果は小さいのですが、それらの成果を広く集約することによって、社会と自然との関わりの一端をとらえることもまた可能と考えます。

最後に、調査にあたってご助力、ご支援をいただいた関係諸機関、地元関係各位に深く謝意を表したいと思います。

2002年8月

財団法人 大阪府文化財センター

理事長 水野正好

## 例　　言

1. 本書は、一般国道1号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路建設予定地内の内、寝屋川市・四条畷市・交野市・枚方市域の遺跡群に重なる部分の確認調査の報告書である。
2. 調査は、国土交通省近畿地方整備局浪速国道工事事務所・日本道路公団枚方工事事務所の委託を受け、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもとに、財団法人大阪府文化財センターが実施した。
3. 調査は、平成12・13年度に財団法人大阪府文化財センター中部調査事務所調査第1係が実施した。現地調査および担当者は以下のとおりである。

### 平成12年度

寝屋川市域（讚良郡条里遺跡 確認その1）

寝屋川市高宮・	平成12年11月16日～平成13年3月23日		
四条畷市砂地先	中部調査事務所調査第1係	技　　師	本田 奈都子
同		専門調査員	清水 哲

寝屋川市域（小路遺跡（確認） 高宮・大尾遺跡）

寝屋川市高宮・	平成12年11月15日～平成13年3月21日		
小路・国守町他地先	中部調査事務所調査第1係	技　　師	田中 龍男
同		専門調査員	植村 哲

寝屋川市域（打上遺跡（確認） 太秦遺跡・太秦古墳群）

寝屋川市打上地先	平成12年11月16日～平成13年2月28日		
	中部調査事務所調査第1係	技　　師	服部 美都里

枚方市域（茄子作遺跡（確認） 上の山遺跡）

枚方市茄子作南町・	平成12年5月1日～平成12年9月25日		
交野市私部西地先	中部調査事務所調査第1係	係　　長	一瀬 和夫
同		主任技師	井藤 晴子

枚方市域（藤阪大龜谷遺跡・長尾窯跡群）

枚方市長尾台地先	平成12年6月～平成12年7月・平成12年10月～平成12年11月		
	中部調査事務所調査第1係	技　　師	田中 龍男

枚方市域（長尾東地区 確認その1）

枚方市長尾台地先	平成12年6月～平成12年7月		
	中部調査事務所調査第1係	技　　師	田中 龍男

### 平成13年度

寝屋川市域（讚良郡条里遺跡 確認その2）

寝屋川市高宮・	平成13年6月19日～平成13年11月30日		
四条畷市砂地先	中部調査事務所調査第1係	技　　師	本田 奈都子
同			合田 幸美
同		専門調査員	清水 哲

枚方市域（長尾東地区 確認その2）

枚方市長尾台地先	平成13年5月16日～平成14年3月31日
----------	-----------------------

4. 調査の実施にあたっては関係諸機関をはじめ、以下の方々から多大なご教示ならびに資料提供などを得た。記して感謝の意を表する。

塩山則之・浜田延充（寝屋川市教育委員会）、野島 稔・村上 始（四条畷市教育委員会）、奥野和夫・真鍋成史・小川暢子（交野市教育委員会）、大竹弘之（枚方市教育委員会）、櫻井敬夫・宇治田和生・三宅復隆・西田敏秀（財団法人 枚方市文化財研究調査会）、村田修三（大阪大学大学院文学研究科）、寒川 旭（産業技術総合研究所）、泉 拓良（奈良大学教授）、小島博子、松尾洋次郎、佐野 圓、文谷由紀江、村岡浩康、青山由美子、田口麻子

5. 本書で用いた現場写真は各調査担当者が撮影し、遺物の撮影は担当者以外に主査片山彰一が担当した。

6. 本書の執筆は文責を文末に記した。また各地域における歴史環境は井藤が担当した。編集は一瀬和夫・田中龍男・清水 哲・遠山美樹子・奥村弥恵が共同で担当した。

7. 確認調査で収集・作成した資料は、すべて当センターで保管している。

## 凡 例

1. 本書に掲載した地形図・遺構実測図、その他の図に付された方位は、全て座標北を示している。
2. 当センターが確認調査および本書で使用している座標は、国土座標第VI系を基準に設置したものである。また、レベル高は東京湾標準水位のT.P.+の数値を使用した。
3. 本書で使用した土壤色の記述は、小川正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖第15版』1995年版を使用した。

## 目 次

第1章 調査に至る経緯と調査方法	1
第2章 調査成果	3
第1節 讀良郡条里遺跡	3
第2節 小路遺跡	33
第3節 打上遺跡	63
第4節 茄子作遺跡	75
第5節 藤阪大亀谷遺跡・長尾窯跡群	99
第6節 長尾東地区	107
第3章 分析・検討	111
第1節 讀良郡条里について—寝屋川市域の讀良形条里の再確認—	111
第2節 茄子作（上の山）遺跡の歴史環境	123
第3節 讀良郡条里遺跡 自然化学分析	127
第4節 高宮・小路から讀良郡条里の沖積堆積状況	136

## 挿 図 索 引

第1図 調査遺跡分布図（西部）	1
第2図 調査遺跡分布図（東部）	2
第3図 讀良郡条里遺跡 遺跡・調査区位置図	4
第4図 讀良郡条里遺跡 00-①～③調査区断面図	17
第5図 讀良郡条里遺跡 00-④・⑤調査区断面図	18
第6図 讀良郡条里遺跡 00-⑥・⑦・⑧-1 調査区断面図	19
第7図 讀良郡条里遺跡 00-⑧・⑨調査区断面図	20
第8図 讀良郡条里遺跡 00-⑩調査区断面・①・②調査区平面図	21
第9図 讀良郡条里遺跡 00-③・④調査区平面図	22
第10図 讀良郡条里遺跡 00-⑤～⑧-1 調査区平面図	23
第11図 讀良郡条里遺跡 00-⑧・⑨調査区平面図	24
第12図 讀良郡条里遺跡 00-④調査区出土遺物実測図	25
第13図 讀良郡条里遺跡 00-⑥調査区出土遺物実測図	26
第14図 讀良郡条里遺跡 00-①～③・⑤・⑦～⑩調査区出土遺物実測図	27
第15図 讀良郡条里遺跡 01-④・⑤調査区断面図	28
第16図 讀良郡条里遺跡 01-⑥調査区断面・01-④調査区平面図	29
第17図 讀良郡条里遺跡 01-④～⑥調査区平面図	30
第18図 讀良郡条里遺跡 01-⑥調査区平面図・01-⑤調査区出土遺物実測図	31
第19図 小路遺跡 調査位置図	33

第20図	小路遺跡	トレンチ配置図	34
第21図	小路遺跡	2トレンチ遺構検出状況図	35
第22図	小路遺跡	4・5トレンチ遺構検出状況図	36
第23図	小路遺跡	6トレンチ遺構・土器検出状況図	37
第24図	小路遺跡	1・6・T1-1トレンチ出土遺物実測図	38
第25図	小路遺跡	10(10-1)トレンチ遺構検出状況図	39
第26図	小路遺跡	10(10-1)トレンチ出土遺物実測図	39
第27図	小路遺跡	15~17トレンチ遺構検出状況図	41・42
第28図	小路遺跡	15・16トレンチ出土遺物実測図	43
第29図	小路遺跡	17トレンチ出土遺物実測図(1)	44
第30図	小路遺跡	17トレンチ出土遺物実測図(2)	45
第31図	小路遺跡	20(20-2・20-3)トレンチ遺構検出状況図	46
第32図	小路遺跡	18・20(20-2・20-3)・21トレンチ出土遺物実測図	47
第33図	小路遺跡	1~5トレンチ断面図	49・50
第34図	小路遺跡	6~14トレンチ断面図	51・52
第35図	小路遺跡	15・16トレンチ断面図	53・54
第36図	小路遺跡	17・18トレンチ断面図	55・56
第37図	小路遺跡	19トレンチ断面図	57・58
第38図	小路遺跡	20トレンチ断面図	59・60
第39図	小路遺跡	21~25・T1-1~T3-2トレンチ断面図	61・62
第40図	打上遺跡	トレンチ位置図及び周辺遺跡分布図	63
第41図	打上遺跡	トレンチ配置図	64
第42図	打上遺跡	1トレンチ 溝1出土遺物実測図	65
第43図	打上遺跡	1~4・6トレンチ出土遺物実測図	65
第44図	打上遺跡	3トレンチ出土遺物実測図	66
第45図	打上遺跡	1・3~5トレンチ出土遺物実測図	66
第46図	打上遺跡	1・2トレンチ平・断面図	69・70
第47図	打上遺跡	3トレンチ断面図	71・72
第48図	打上遺跡	4~7トレンチ断面図	73・74
第49図	茄子作遺跡	周辺既往調査区位置図	75
第50図	茄子作遺跡	調査区位置図	79
第51図	茄子作遺跡	西端部平面図	80
第52図	茄子作遺跡	中央西半部平面図	81
第53図	茄子作遺跡	中央東半部平面図	82
第54図	茄子作遺跡	東端部平面図	83
第55図	茄子作遺跡	8トレンチ掘立柱建物検出状況(左)及び土坑SK01出土状況(右)	85
第56図	茄子作遺跡	13Aトレンチ大溝東側法面遺物出土状況図	87
第57図	茄子作遺跡	3B・10・12・13B・14トレンチ土層断面図	88

第58図	茄子作遺跡	3 A・4・11・13A トレンチ土層断面図	89
第59図	茄子作遺跡	13A トレンチ大溝SD01出土土器実測図	91
第60図	茄子作遺跡	8 トレンチ土坑SK01出土遺物実測図	92
第61図	茄子作遺跡	トレンチ出土遺物実測図（1）	92
第62図	茄子作遺跡	トレンチ出土遺物実測図（2）	93
第63図	茄子作遺跡	トレンチ出土遺物実測図（3）	94
第64図	茄子作遺跡	東西断面概念図	96
第65図	茄子作遺跡	各時代主要遺構・遺物分布図	97
第66図	藤阪大龜谷遺跡	長尾窯跡群調査位置図	99
第67図	藤阪大龜谷遺跡	長尾窯跡群トレンチ配置図	100
第68図	藤阪大龜谷遺跡	長尾窯跡群 A～F トレンチ断面図	101～102
第69図	藤阪大龜谷遺跡	長尾窯跡群 G～H トレンチ断面図	103～104
第70図	藤阪大龜谷遺跡	長尾窯跡群 G1～1 トレンチ出土遺物実測図	105
第71図	長尾東地区	調査・トレンチ位置図	107
第72図	長尾東地区	トレンチ断面図	108
第73図	長尾東地区	トレンチ位置図	110
第74図	長尾東地区	トレンチ断面図	110
第75図	寝屋川付近条里図		114
第76図	讚良郡の条里復原図		114
第77図	条里制復原図		114
第78図	条里制復原図		114
第79図	大阪府下の条里制		114
第80図	寝屋川市文化財分布図		114
第81図	条里復原図		114
第82図	明和年代村絵図 高宮地区		118
第83図	寝屋川市教育委員会作成大宮高宮小字図		118
第84図	茨田郡条里秦里、讚良郡条里9・10条復原案対比図		119
第85図	讚良郡条里遺跡 01～④調査区 試料採取地点図		129
第86図	讚良郡条里遺跡 01～⑥調査区 試料採取地点図		129
第87図	讚良郡条里遺跡 01～④調査区の花粉化石分布図		131
第88図	讚良郡条里遺跡 01～⑥調査区の花粉化石分布図		132
第89図	讚良郡条里遺跡 00～⑧調査区の花粉化石分布図		133
第90図	讚良郡条里遺跡 00～⑤調査区28層中の鉱物組成図		135
第91図	讚良郡条里遺跡 火山ガラス屈折率		135
第92図	小路遺跡・讚良郡条里遺跡 確認調査トレンチ位置図		138～141
第93図	小路遺跡・讚良郡条里遺跡 縦断方向地盤想定図		142～147

## 表 索 引

表 1 茄子作遺跡 調査一覧表 .....	76
表 2 茄子作下浦遺跡 調査一覧表 .....	77
表 3 茄子作遺跡 遺物観察表 .....	95
表 4 讀良郡条里遺跡 検出花粉化石一覧表 .....	130
表 5 讀良郡条里遺跡 検出珪藻化石一覧表 .....	134
表 6 讀良郡条里遺跡 00-⑤調査区28層中の鉱物分析結果一覧表.....	135

## 写真図版目次

- 写真図版1 讀良郡条里遺跡1 (全景、00-①・②調査区)  
写真1. 調査地全景 (東から)  
写真2. 調査地全景 (西から)  
写真3. 00-①調査区 第7面 (南から)  
写真4. 00-②調査区 第6面 (東から)
- 写真図版2 讀良郡条里遺跡2 (00-④調査区)  
写真1. 第6面検出流路48断面 (南から)  
写真2. 流路48最下層 繩紋土器出土状況  
写真3. 東西断面 (第24~27層)  
写真4. 第10面 墳砂検出状況 (北から)
- 写真図版3 讀良郡条里遺跡3 (00-⑤調査区)  
写真1. 東西断面 (第25~28層)  
写真2. 南北断面 (第25~28層)  
写真3. 第18面 (東から)  
写真4. 25層最下部 有舌尖頭器出土状況
- 写真図版4 讀良郡条里遺跡4 (00-⑥・⑦調査区)  
写真1. 00-⑥調査区 南北断面 (第1~10層)  
写真2. 00-⑥調査区 第1層繩紋土器出土状況  
写真3. 00-⑦調査区 第3面 (南から)  
写真4. 00-⑦調査区 南北断面 (第14~23層)
- 写真図版5 讀良郡条里遺跡5 (00-⑧・⑨調査区)  
写真1. 00-⑧調査区 第4面 (北から)  
写真2. 00-⑧調査区 第14面 (北から)  
写真3. 00-⑧調査区 南北断面 (第21~28層)  
写真4. 00-⑨調査区 第16面 (北から)

写真図版6 讀良郡条里遺跡6（01-④調査区）

写真1. 第6面（東から 写真・縦方向）

写真2. 第9面（南から）

写真3. 第11面（南から）

写真4. 第15面（北から）

写真図版7 讀良郡条里遺跡7（01-⑤・⑥調査区）

写真1. 01-⑤調査区 第3面（西から）

写真2. 01-⑤調査区 第10面（北から）

写真3. 01-⑥調査区 第4面（東から）

写真4. 01-⑥調査区 第16面（北から）

写真図版8 讀良郡条里遺跡8（00-④・⑤調査区出土遺物）

写真図版9 讀良郡条里遺跡9（00-⑥～⑨調査区・01-④調査区出土遺物）

写真図版10 小路遺跡1

写真1. 1～6トレンチ 全景（南から）

写真2. 1トレンチ 全景（西から）

写真3. 1トレンチ 北壁 土器出土状況

写真4. 2トレンチ 全景（西から）

写真図版11 小路遺跡2

写真1. 4トレンチ 全景（南から）

写真2. 4トレンチ 遺構検出状況

写真3. 5トレンチ 全景（北から）

写真4. 5トレンチ 遺構検出状況（西から）

写真図版12 小路遺跡3

写真1. 6-2トレンチ 全景（東から）

写真2. 6-2トレンチ 土器出土状況（北から）

写真3. 10-1トレンチ 遺構検出状況（南から）

写真4. 10-1トレンチ 土器出土状況（東から）

写真図版13 小路遺跡4

写真1. 高宮遺跡方向 遠景

写真2. 高宮地区から西方方向を望む

写真3. 15-1トレンチ 全景（東から）

写真4. 15-1トレンチ 遺構検出状況

写真図版14 小路遺跡5

写真1. 15-2トレンチ 全景（東から）

写真2. 15-2トレンチ 遺構検出状況

写真3. 16トレンチ 全景（東から）

写真4. 16トレンチ 遺構検出状況（西から）

写真図版15 小路遺跡6

写真1. 17トレンチ 全景（北西から）  
写真2. 17トレンチ 遺構検出状況（西から）  
写真3. 20-2トレンチ 全景（南西から）  
写真4. 20-2トレンチ 自然流路断面（北から）

写真図版16 小路遺跡7

写真1. 20-3トレンチ 全景（北西から）  
写真2. 20-3トレンチ 自然流路断面（北西から）  
写真3. T1-1トレンチ 全景（北東から）  
写真4. T1-1トレンチ 溝状遺構断面（東から）

写真図版17 小路遺跡8 出土遺物

写真図版18 小路遺跡9 出土遺物

写真図版19 小路遺跡10 出土遺物

写真図版20 小路遺跡11 出土遺物

写真図版21 小路遺跡12 出土遺物

写真図版22 小路遺跡13 出土遺物

写真図版23 打上遺跡1

写真1. 3トレンチ 現況（南西から）  
写真2. 3トレンチ 現況（北西から）  
写真3. 4トレンチ 現況（北西から）  
写真4. 5トレンチ 現況（南東から）  
写真5. 7トレンチ 現況（北から）  
写真6. (参考) 調査地周辺の竹林造成状況

写真図版24 打上遺跡2

写真1. 1トレンチ 溝検出状況（西から）  
写真2. 1トレンチ 溝検出状況（北東から）  
写真3. 2トレンチ 落込み検出状況（東から）  
写真4. 3トレンチ（北東から）  
写真5. 3トレンチ（南から）  
写真6. 3トレンチ（南西から）

写真図版25 打上遺跡3

写真1. 3トレンチ（南西から）  
写真2. 4トレンチ 全景（北西から）  
写真3. 5トレンチ 全景（南東から）  
写真4. 6トレンチ 全景（南東から）  
写真5. 7トレンチ 全景（北西から）  
写真6. 7トレンチ（北東から）

写真図版26 打上遺跡4 出土遺物

写真1. 1トレンチ 須恵器有蓋高杯蓋

写真2. 1トレンチ 須恵器壊身

写真3. 3トレンチ 塗輪片

写真4. 1~4・6トレンチ 須恵器壊片

写真図版27 茄子作遺跡1

写真1. 調査対象地 中央・西側 航空写真（東から）

写真2. 調査対象地 中央 航空写真（北西から）

写真3. 調査対象地 中央・東側 航空写真（西から）

写真図版28 茄子作遺跡2

写真1. 3Aトレンチ 遠景（西から）

写真2. 3Bトレンチ 東半（西から）

写真3. 8トレンチ 土坑SK01土器出土状況（西から）

写真4. 8トレンチ 挖立柱建物SB01検出状況（西から）

写真図版29 茄子作遺跡3

写真1. 8トレンチ 全景（南から）

写真2. 10トレンチ 全景（南東から）

写真3. 13Aトレンチ 遠景（西から）

写真4. 13Aトレンチ 大溝SD01東側法面土器出土状況

写真図版30 茄子作遺跡4

写真1. 出土土器（上）、出土石器（下）

写真2. 13Aトレンチ 大溝SD01出土弥生土器

写真図版31 藤阪大龜谷遺跡・長尾窯跡群1

写真1. Aトレンチ 全景（西から）

写真2. Aトレンチ 断面（北から）

写真3. Bトレンチ 全景（北から）

写真4. Bトレンチ 断面（西から）

写真図版32 藤阪大龜谷遺跡・長尾窯跡群2

写真1. Cトレンチ 断面

写真2. Dトレンチ 全景（北から）

写真3. Eトレンチ 全景（北西から）

写真4. Fトレンチ 全景（北西から）

写真図版33 藤阪大龜谷遺跡・長尾窯跡群3

写真1. G1-1トレンチ 調査前（西から）

写真2. G1-1トレンチ 断面（北西から）

写真3. G1-1トレンチ 全景（北西から）

写真4. G1-2トレンチ 断面（北東から）

写真図版34 藤阪大龜谷遺跡・長尾窯跡群4

写真1. G2トレンチ 全景（西から）

写真2. Hトレンチ 挖削地点遠景（南西から）

写真3. H 1 トレンチ 全景（西から）

写真4. H 2 トレンチ 全景（東から）

写真図版35 藤阪大龜谷遺跡・長尾窯跡群 5

写真1. H 3 トレンチ 断面（南東から）

写真2. G 1 - 1 トレンチ出土遺物

写真図版36 長尾東地区 1

写真1. A トレンチ 全景（北東から）

写真2. A トレンチ 断面（北から）

写真3. B トレンチ 全景（北から）

写真4. B トレンチ 断面（北西から）

写真5. C トレンチ 全景（北西から）

写真6. C トレンチ 断面（西から）

写真図版37 長尾東地区 2

写真1. ①トレンチ 全景（北から）

写真2. ①トレンチ 東壁断面（北西から）

写真3. ②トレンチ 全景（南から）

写真4. ②トレンチ 東壁断面（南西から）

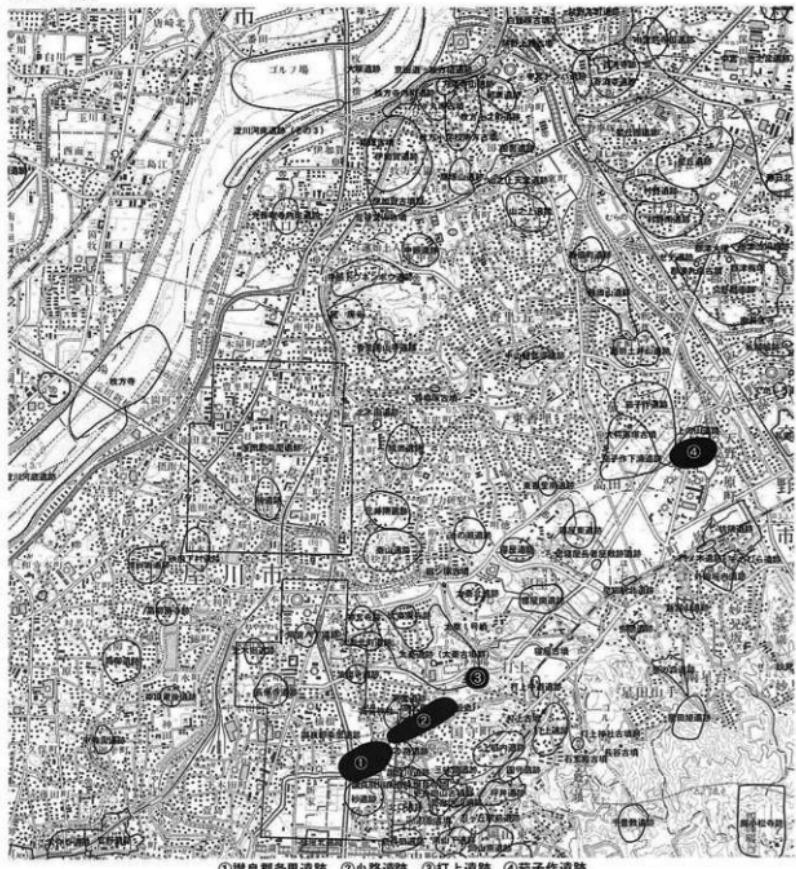
写真5. ③トレンチ 全景（北西から）

写真6. ③トレンチ 東壁断面（南西から）



## 第1章 調査に至る経緯と調査方法

今回の調査は、第二京阪道路とそれに併行して建設される一般国道1号バイパス（大阪北道路）予定地で、埋蔵文化財の遺構・遺物の有無を確認するために行った。平成8年度に一般国道1号の一部、府道深野南寺方大阪線～大阪中央環状線間における道路整備に伴って、門真市三ツ島地先で埋蔵文化財確認調査を行った〔『三ツ島遺跡 一般国道1号バイパス（大阪北道路）建設に伴う門真市三ツ島地区埋蔵文化財確認調査報告書』1997. 3〕。平成10年度には門真市四宮地区と枚方市尾台地区の確認調査を、平成11年度には枚方市の津田城遺跡と交野市の有池遺跡で確認調査を行った〔『一般国道1号バイパス（大阪北道路）建設に伴う 長尾台地区、杉・氷室地区、津田城遺跡、有池遺跡、門真遺跡群』2001. 3〕。

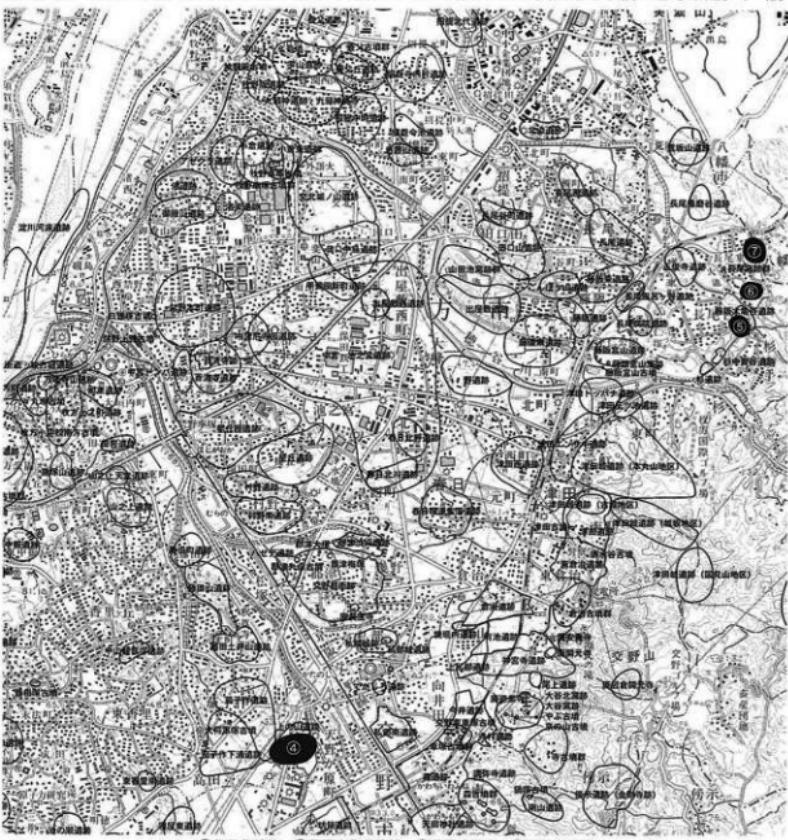


第1図 調査遺跡分布図（西部）

さて本書に掲載する平成12・13年度では、讀良郡糸里遺跡、小路遺跡、打上遺跡、茄子作遺跡、藤阪大龜谷遺跡、長尾窯跡群、長尾東地区の各地点の確認調査を実施した。

これらのうち寝屋川市域西側は堆積活動が活発な沖積地にあたり、掘削深度の深い地域においては $6 \times 4$ ないしは $5 \times 4$ mのトレンチにそれぞれ土留め用の鋼矢板を打ち込んで高架道路基礎が地下に大きく影響を与えると考える現地表面から5mの深さまで掘削した。それ以外の場所では主に予定地の側辺にそわせるように幅2~4mの細長いトレンチを設定し、鋼矢板は用いずに掘削した。対面するトレンチ間で様相が大きく異なる部分や丘陵性の地形を呈する部分では、用地を横断する方向のトレンチや等高線の微地形にあわせ調査区を設定した。現代の耕作土および盛土は主に重機で掘削し、それより下層の堆積土は人力で一層ごとに掘削し、遺構の検出に努めた。

なお、調査の成果を受けて各地点は、小路遺跡を小路・高宮・大尾として遺跡名を分け、打上遺跡が太秦遺跡・太秦古墳群の範囲に加え、茄子作遺跡を上の山遺跡として独立させる扱いとなった。(一概)



第2図 調査遺跡分布図(東部)

## 第2章 調査成果

### 第1節 讀良郡条里遺跡

#### 1. 位置と環境（第3図）

讀良郡条里遺跡は、生駒山系から派生する洪積層にある交野台地の南西部、河内平野の中では北東部に位置している。現在の行政区域では寝屋川市と四条畷市にまたがり、東西約1.6km、南北約2.6kmの広範囲にわたる<sup>1)</sup>。讀良郡条里遺跡は、現在でも条里区画水田が残っていることから名づけられた遺跡である。讀良郡の条里制は、天坊幸彦氏によって『上代浪華の歴史地理的研究』で復原されたのが最初であり、さらに『寝屋川市史』に寺前治一氏によって研究成果と全体復原図が掲載され、周知されるところとなった。調査対象地は遺跡内でも東南部に位置している。調査地の南側に楠根川・讀良川が正方位に沿って流れしており、この地域に条里型地割が敷かれた際に付け替えられたと考えられる。

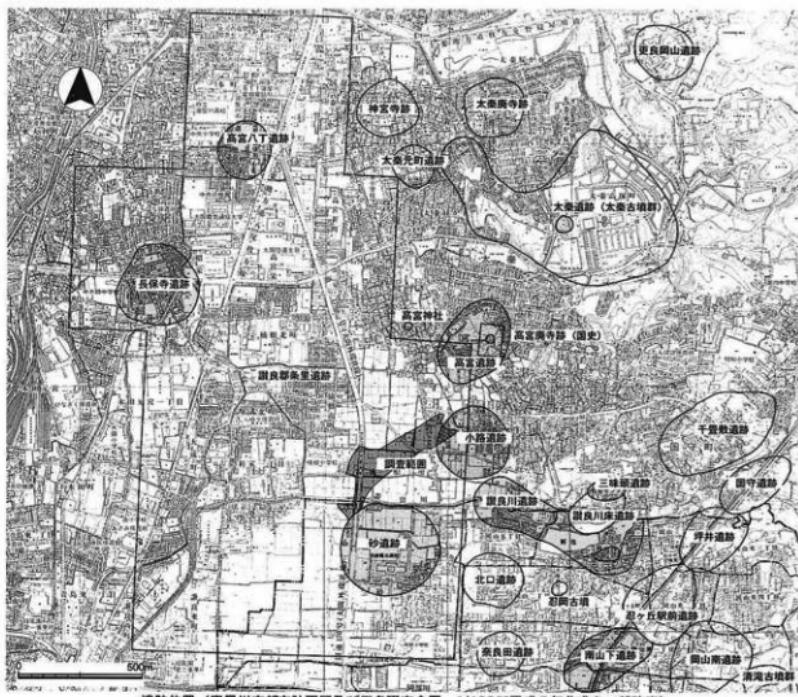
遺跡内の調査例については、調査地から北西方向に約1.2kmの地点で、大阪府教育委員会が1989年から1991・1992年の3ヶ年にわたりて調査を行っている<sup>2)</sup>。古墳時代中～後期の集落および土塙墓、奈良～平安時代と鎌倉～室町時代の集落を確認しており、5世紀代の井戸から船材を転用した井戸枠も検出されている。さらに寝屋川市教育委員会が1993年に行った調査では、古墳時代中～後期と鎌倉～室町時代の集落などを確認している。この調査で製塙土器が大量に出土しており、船材転用の井戸とあわせて、当時河内湖の汀線がこの付近にあったことを推定させる一資料となっている。またこの二調査地は、長保寺遺跡と別名が付されている<sup>3)</sup>。調査地から北に約1.4km離れた高宮八丁遺跡では、弥生時代前～中期の集落などを確認している<sup>4)</sup>。また調査地に南接する砂遺跡は、昭和58～59年にかけて大阪府教育委員会によって調査がなされており、縄紋時代中・晚期の土塙墓などが確認されている<sup>5)</sup>。

讀良郡条里遺跡周辺には旧石器時代～古代にかけての遺跡が集中している。旧石器時代の遺跡は交野台地の縁辺部に立地しており、高宮・讀良川・讀良川川床・忍ヶ丘駅前遺跡では国府型ナイフ形石器、南山下遺跡で有舌尖頭器、岡山南遺跡で木葉状尖頭器の出土例がある。縄紋時代の遺跡は、高宮遺跡で前期の土坑、讀良川遺跡では中期初～後期初頭の貯蔵穴などが確認されている。また先述の長保寺・高宮八丁遺跡で遺構は未確認であるものの、晩期の遺物が出土している。弥生時代には太秦遺跡で中期の集落が確認されているほか、小路遺跡で中～後期の遺物が表採されており、立地から高地性集落である可能性が高い。古墳時代には前期に築造された前方後円墳の忍岡古墳、後期には太秦古墳群が知られている。また7世紀代には高宮遺跡で豪族居宅が確認されており、8世紀には高宮遺跡の範囲内に薬師寺式伽藍配置をもつ高宮庵寺が創建されている。

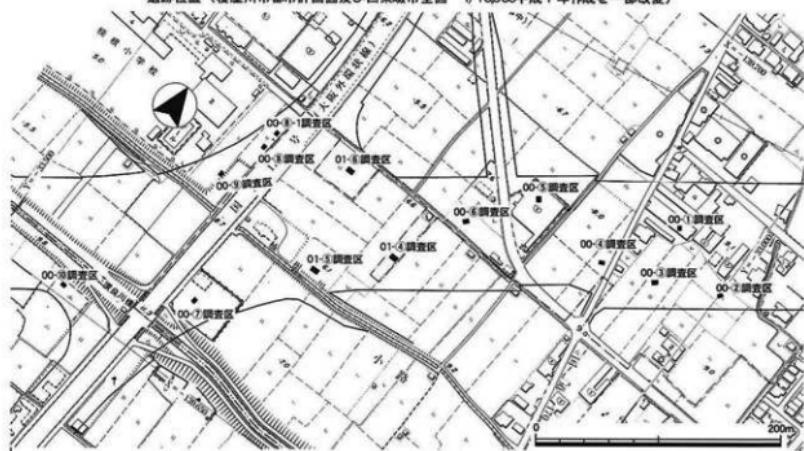
以上のように、讀良郡条里遺跡周辺は、各時代を通じて重要な地域であったといえよう<sup>6)</sup>。

#### 2. 調査区の設定

調査区は基本的に道路予定地の縁辺部に並行し、2000年度の調査では4.0×5.2mの調査区を10ヶ所、2001年度の調査では4.0×6.0mの調査区を6ヶ所設定している。2000年度調査分は00-①調査区、2001年度調査分は01-①調査区から番号を付している。なお拡張した調査区に関しては、調査時と同



遺跡位置 (寝屋川市都市計画図及び四条畷市全図 1/10000平成7年作成を一部改変)



00~01年度 調査区位置図 (寝屋川市地形図 8 1/2,500平成7年作成を一部改変)

第3図 講良郡条里道路 遺跡・調査区位置図

様に枝番号を付している。本報告書においては、2000年度調査分および2001年度調査の外環状線東側にあたる01-①～⑥調査区について報告する。01-①～③調査区に関しては次年度に報告を行いたい。

### 3. 2000年度調査成果

#### 検出遺構

##### 東側地域（00-①～00-⑥調査区）

交野台地と河内平野が接する所で調査対象地の東側地域にあたり、旧国道170号線の周辺に合計6ヶ所の調査区を設定した。掘削深度はボーリングデータに基づいて、現地盤から00-①～00-③調査区は3.0m、00-④調査区は4.9m、00-⑤・⑥調査区は6.0mに設定し、鋼矢板を打設している。

##### 00-①調査区（第4・8図）

調査対象地の中でも最北東部に位置している。掘削深度は3.0mで、約0.8mの盛土を除去した後、近・現代の水田面、縄紋中期以前の水成堆積層を確認した。

1層は暗青灰色中～粗砂混じりシルト層で、近・現代水田の床土にあたる。2層は褐灰色シルト層で、3層をブロック状に混入する。第3面（3層上面）では落ち込み35を検出している。調査区端で確認しており、土坑になる可能性もある。3層は黒褐色シルト層であり、礫を若干混入している。他調査区で同一層から弥生土器・古墳時代～古代の須恵器・土師器片が出土しており、客土である可能性が高い。

4層は暗灰黄色微砂混じりシルト層で、時期不明の縄紋土器片が出土している。第7面（8層上面）では土坑49、溝50を検出している。溝はほぼ南北方向を指向しているが、遺物は出土していない。低湿地の様相を示している。8層以下は他調査区での検出状況から縄紋時代中期以前の流水堆積層と考えられ、約1.9mの層厚がある。多方向にラミナが切りあっており、数回の流れを確認した。

##### 00-②調査区（第4・8図）

調査対象地の最東部に位置する。掘削深度は3.0mで、約0.2mの盛土を除去した後、近・現代の水田面、中世の包含層、縄紋時代中期の包含層、縄紋時代中期以前の流水堆積層、陸地化に伴う粘土層を確認した。

1・2層は近・現代水田の耕土と床土にあたる。4・5層はそれぞれ弥生時代～中世の遺物が出土しており、客土である可能性が高い。第3面（5層上面）では東西方向を指向する溝11～13を検出している。5層が客土であることを考えると、近・現代の遺構であろう。

8層は黒褐色の均一な粗砂層で、中世の土師器が出土していることや層序から、中世の包含層と考えられる。第5面（9層上面）では土坑18、流路19を検出している。流路19は深いところで0.7mの深度があるが、地形に即していることから条里に伴う遺構の可能性は低い。9層は灰黄褐色シルト層で、鉄分の沈着が著しい。第6面（14層上面）では流路19に削剥されなかった部分でピット22～27を検出している。建物に伴うものは今回確認することはできなかった。14層は灰色細砂混じりシルト層で、鉄分の沈着が著しい。

16層は均一なオリーブ黒色細～粗砂層である。中期の縄紋土器とサヌカイト片が出土しており、土器の時期から、縄紋時代中期の包含層と考えられる。18～21層は緑灰色シルト層であり、水成および低湿地の堆積状況を示す。23層は縄紋中期以前の流水堆積層であり、層厚約1.2mある。ラミナの顕著なシルト～礫層であり、一定して南北方向の流れである。第13面（24層上面）では、方向および深さ

も一定しない溝を数条検出した。24層はオリーブ黒色粘土層で、T.P.+6.0m前後で検出した。層序などから陸地化に伴う粘土層と考えられる。25層は暗オリーブ灰色シルト層で、遺物は出土しなかった。

#### 00-③調査区（第4・9図）

00-①調査区の南側に設定している。掘削深度は3.0mを測り、約0.2mの盛土を除去した後、近・現代の水田面、縄紋時代中期以前の流水堆積層を確認した。

1層は灰白色シルト層で、近・現代水田の床土にあたる。第3面（4層上面）では南北方向に溝2・3を検出した。近・現代の遺構である。4層は黒褐色粗砂～礫混じりシルト層で、古代の土師器のほかにサヌカイトなどが出土しており、00-①～②調査区で確認した客土と同一層と考えられる。

8～9層はいずれも鉄分およびマンガンの沈着が著しく、水田の可能性が高い。

10～11層は水成および低湿地の堆積状況を示す。12層以下は縄紋時代中期以前の流水堆積層であり、約1.6mの層厚がある。ラミナの方向および切りあいより数回の流れが確認でき、第8面（13層上面）の東西方向の落ち込みも同様のものと想定される。

#### 00-④調査区（第5・9図）

旧国道170号線をはさんで、00-①～③調査区の西側に設定した。掘削深度は4.9m、約0.2mの盛土を除去した後、近・現代の水田面、縄紋時代中期の包含層と流路、縄紋時代中期以前の流水堆積層を確認した。

2層は灰白色中砂～礫混じりシルト層で、近・現代水田の床土にあたる。第2面（5層上面）では東西方向の溝1を検出している。層序から近・現代の遺構と考えられる。5層は褐灰色粗砂混じりシルト層で、部分的に炭化物を混入する。第3面（6層上面）では南北方向に溝を数条検出しており、これらの溝は耕作に伴うものと思われる。6層は灰黄褐色中～粗砂混じりシルト層である。弥生～古代の土器片が出土していることや層序から、他調査区と同様の客土の可能性を考えられる。故に第3面で検出した溝群も近・現代の遺構といえるであろう。

第4面（9層上面）では流路47を検出している。9層中からは縄紋土器が出土している。土器の時期から考えると9層は縄紋時代中期の包含層と考えることも可能である。第6面（18層上面）では流路48を検出しており、最下層にあたる16層から縄紋土器が数点出土している。時期は中期中～末頃にあたり、土器の表面がほとんど磨耗していないことから、至近距離で廃棄されたものと考えられる。流路47と48はほぼ同一方向を流れており、時期差がほとんどない可能性がある。第8面（24層上面）では西方向に段を検出しているが、上層の流路に切られており形状は不明瞭。24層は灰色シルト層で、25層を部分的に混入し、マンガンの沈着が著しい。第10面（26層上面）では墳砂を数条検出しており、断面でも確認することができた。層序から縄紋時代中期以前の地震痕跡と考えることができる。28層は緑灰色細砂層で、縄紋時代中期以前の流水堆積層である。層厚は約2.8mを測り、ラミナの方向および切りあいから、数回の流れを確認することができた。

#### 00-⑤調査区（第5・10図）

旧国道170号線と外環状線（国道170号線）の間、00-④調査区の西側に設定した。掘削深度は6.0mを測り、約1.5mのコンクリートおよび盛土を除去した後、近・現代の水田面、縄紋時代中期と考えられる包含層、縄紋時代中期の流水堆積層、陸地化に伴う粘土層、安定した火山灰層を確認した。

1層は灰白色シルト層で、近・現代水田の床土である。第2面（3層上面）では東西方向を指向する溝4を検出している。3層は黒色細砂混じりシルト層である。遺物は出土していないが、層序などから

他調査区と同様の客土の可能性が高い。

第4面（6層上面）では東西方向の溝15～17を検出している。いずれも耕作に伴う溝であろう。14層は黒褐色粗砂混じりシルト層で、鉄分の沈着が著しい。縄紋土器およびサヌカイト片が出土している。表面が磨耗しており時期を断定することは難しいが、縄紋時代中期に相当する包含層の可能性が高い。第10面（17層上面）では土坑53と溝54を検出している。溝は正方位でないことなどから、地形に即したものである可能性が高い。23～26層は縄紋時代中期以前の流水堆積層である。層厚は約2.8mあり、多方向のラミナが確認できることから、数回の流れを想定することができる。25層の最下部からサヌカイト製の有舌尖頭器が出土している。第17面（27層上面）に接するような状態で出土しているが、表面の磨耗が著しいことから洪水沙に伴って流されてきたものと考えられる。27層は黒色粘土層であり、T.P.+3.0m前後で検出している。層序などから00-②調査区で確認したものと同層であり、陸地化に伴う粘土層の可能性が高い。第18面（28層上面）以下は南側しか検出できず、北側は26層によって削除されていた。28層は安定した火山灰層で、均一な火山ガラスを大量に含む。水成堆積であるが、さほど水位がない地点に堆積した様相を呈する。調査時は層序などからアカホヤ火山灰層（約6,300年前降下）の可能性も考えられたが、その後の分析結果よりAT火山灰層（約24,000年前降下）であることが判明している。

#### 00-⑥調査区（第6図）

旧170号線と外環状線（国道170号線）の間で、00-⑤調査区の南西部に設定した。掘削深度は6.0mを測る。上層は約2.7mの層厚で産業廃棄物が埋められており、今回の調査では縄紋時代中期の包含層、縄紋時代中期以前の流水堆積層しか確認できなかった。

第1面（1層上面）は黄灰色細砂混じりシルト～中砂層で、鉄分・マンガンの沈着が著しい。断面で縄紋土器が出土している。中期の深鉢の底部であり、体部から上半分は産業廃棄物によって欠損している。上層を削平されており、かつ搅乱が多いため確定することはできないが、埋甕の可能性もある。9層以下は縄紋時代中期以前の流水堆積層であり、層厚は約3.6mを測る。基本的に同一の流水堆積層であるが、シルトと互層になっている細砂～礫層から縄紋土器が十数点出土し、調査時は面として調査を行っている（第4～6面）。9層からは縄紋時代中期中～末頃の遺物が、また12層からは同期前～中頃の遺物が出土しており、いずれも表面の磨耗が著しく、洪水に伴って流されてきたものと考えている。

#### 西側地域（00-⑦～00-⑩調査区）

00-①～00-⑥調査区の南西部、外環状線（国道170号線）の東西側に合計4ヶ所の調査区を設定した。掘削深度はボーリングデータに基づき、現地盤から00-⑦調査区は6.0m、00-⑧～00-⑩調査区は4.9mに設定し鋼矢板を打設した。また00-⑧調査区の北東側に微高地の存在が想定されたため、大阪府教育委員会の指示のもと、2×2mの調査区を任意に設定し、00-⑧-1調査区として調査を行った。掘削深度は1.2mを測っている。

#### 00-⑦調査区（第6・10図）

国道170号線の東側に設定した。譲良川の北岸にあたり、2000年度西側地域の中では、外環状線の東側に設定した唯一の調査区で、掘削深度は6.0mを測る。上層は約2.6mの層厚で産業廃棄物が埋められていた。近・現代の水田面および流水堆積層、中世以前の流水堆積層を確認した。

1層はオリーブ灰色細砂混じりシルト層で、近・現代水田の床土である。2～4層は譲良川の洪水に

伴う流水堆積層と思われ、古代～中世の須恵器・土師器、近世の陶磁器・瓦が出土している。

第3面（5層上面）では、南北方向の溝を検出している。洪水の際に派生したものと思われ、古代の須恵器・土師器が細片で出土している。5層は灰オリーブ色細砂混じりシルト層である。古代の須恵器・土師器が出土している。第4面（6層上面）では、南北方向の溝87を検出している。耕作に伴うものである可能性が高い。6層および8層から土師器片が出土しているが細片であり、時期は不明。

9層以下はシルトと細砂～礫層の互層であり、基本的に同一の流水堆積層であろう。第9面（18層上面）は黒色中砂混じりシルト層で、後期中頃の繩紋土器が出土している。

#### 00-⑥調査区（第7・11図）

外環状線（国道170号線）の西側で、2000年度の調査対象地の中でも最北西部に設定した。掘削深度は4.9mを測る。約0.3mの盛土を除去した後、近・現代の水田面、中・近世の包含層、繩紋時代中期の流水堆積層、陸地化に伴う粘土層、海成堆積層と考えられるシルト～粗砂層を確認した。

1層は赤褐色シルト層で、近・現代水田面の床土である。2層は灰色中～細砂混じりシルト層で、鉄分・マンガンの沈着が著しい。古墳時代の須恵器や古代～中世の土師器と瓦器が出土している。第3面（7層上面）では水田耕作に伴う南北方向の溝を数条検出している。7層は灰黄褐色シルト混じり中～粗砂層で、古墳時代～古代の須恵器・土師器、中世の土師器が出土している。2・7層からは一括して遺物が出土しており、周辺に同時期の遺構が存在していた可能性を示す。

第4面（9層上面）では落ち込み69と溝70を検出した。落ち込み69からは古代～中世の土師器が多く出土している。また第5面（12層上面）では溝73を検出している。溝70と73は正方位を示さないが、ほぼ同位置かつ同方向を指向することから、地形に即した溝の可能性、かつ当調査区の北東部に想定される微高地の縁辺部をめぐる溝の可能性がある。

第6面（15層上面）では路流74を検出した。ほぼ南北方向を指向しており、下層から繩紋時代中期中頃の土器が出土している。第8面（19層上面）では南側に落ち込み77を検出している。21層はラミナの顕著な流水堆積層である。繩紋土器が数点出土している。いずれも繩紋時代中期中頃の時期のものである。22～27層はシルトと細砂の互層であり、同一の流水堆積層と考えられる。28層は黒色粗砂混じり粘土層で、T.P.+2.2m前後で検出した。層序から陸地化に伴う粘土層と考えられる。第14面（30層上面）では溝を数条検出している。これらの溝は深さも一定ではなく、東と西の両方向からの流れが確認できることから、陸地化に伴う水の流れによるものと考えている。31層以下は層厚約1.8mを測り、海成堆積層の可能性がある。

#### 00-⑧-1調査区（第6・10図）

00-⑧調査区の第2～4面で古墳時代～中世の遺物が集中して出土していること、第4・5面で地形に即した溝を検出していることから、北東部に微高地とその上部に古墳～中世の遺構が存在していることを想定し、追加の調査区を設定して調査を行った。調査区名は枝番号を付し、00-⑧-1調査区とした。面積は2×2mで、掘削深度は1.2mを測る。約0.2mの盛土を除去した後、近・現代の水田面、中・近世の包含層を確認した。層序は基本的に00-⑧調査区と同一である。

1・2層は近・現代水田の耕土と床土にあたる。4層は灰色細砂混じりシルト層で、マンガンの沈着が著しい。サスカイトのほか須恵器・土師器が出土している。第3面（10層上面）では南北方向に溝80、東西方向に溝81を検出している。溝80からは近・現代の陶磁器などが出土しているが、溝81からは古墳時代～古代の須恵器・土師器が出土しており、中世以前の遺構の可能性が高い。

第4面（11層上面）ではピットを数基検出しているが、構造物に伴うものかは不明。11層は黒褐色中～粗砂混じりシルト層で、鉄分・マンガンの沈着が著しい。12～13層は流水堆積層であるが、ラミナは見られない。14層は黒色シルト層で、部分的に細砂と礫を混入している。

00-⑧調査区の北東部に新たに調査区を設定して調査を行ったが、00-⑧調査区と同様に削平を受けていることが判明した。いずれも中世以前の遺構が削平されて遺物が流れきっていることが確認されたが、こうした状況は、さらに東側の外環状線（国道170号線）付近に、古代～中世の遺跡が存在していた可能性を示すものであるといえよう。

#### 00-⑨調査区（第7・11図）

外環状線（国道170号線）の西側で、00-⑧調査区の南側に設定した。掘削深度は4.9mを測り、約0.3mの盛土を除去した後、近・現代の水田面、中・近世の包含層、縄紋時代の包含層、縄紋時代中期以前の流水堆積層、陸地化に伴う粘土層、海成堆積層と考えられるシルト～粗砂層を確認した。

1層は灰オリーブシルト層で、近・現代水田面の床土である。3層は暗青灰色粗砂混じりシルト層で、鉄分の沈着が著しい。中世の土師器などが出土している。第3面（5層上面）では南北方向に溝を検出している。5層はオリーブ灰色中～粗砂混じりシルト層で、6層をブロック状に混入する。古代～中世の須恵器・土師器が出土しており、中～近世の包含層の可能性が高い。7層は灰色粗砂混じりシルト層で、上面に踏み込みが見られ、古代の土師器が出土している。

9層は暗灰色シルト層で、円筒埴輪片・古代の土師器が出土しており、付近に同時期の古墳の存在を示唆するものといえる。

10～28層は低湿地の堆積状況を示す。11層から縄紋土器が出土しているが、細片でありかつ磨耗が著しく、時期は不明瞭。29層は層厚約0.5mの流水堆積層で、他調査区で確認している縄紋時代中期以前の流水堆積層と同一層であろう。第16面（30層上面）では溝や落ち込みを検出している。深さが一定していない点や方向性などから、陸地化に伴う水の流れによってできたものと考えられる。30層は黒色粘土層で、T.P.+1.8m前後で検出した。34層以下は層厚約1.8mを測り、海成堆積層の可能性がある。38・39層のシルト層は00-⑧調査区では未確認であった。34層に削削されず残存した部分であろう。

#### 00-⑩調査区（第8図）

外環状線（国道170号線）の西側で、讃良川の南側に設定した。当年度の調査対象地の中でも最南西部に位置している。掘削深度は4.9mである。上層は約3.8mの層厚で産業廃棄物が埋められており、当調査区では、縄紋時代中期以前の流水堆積層、陸地化に伴う粘土層しか検出できなかった。

1～3層は黒色系の微砂～細砂混じりシルトと灰色細砂～粗砂が互層をなし、低湿地の堆積状況を示す。4・5層は流水堆積層で、一定方向のラミナが確認できた。6～8層も低湿地の堆積状況を呈するが、6層は黒色シルト層であり、植物遺体が層中で確認できることから、一旦陸化した状況にあったことが想定できる。9層はオリーブ灰色シルト～細砂層であり、多方向のラミナが顕著に見られる流水堆積層である。第4面（14層上面）で遺構は検出できなかったものの、他調査区の層序から、陸地化に伴う粘土層と考えられる。T.P.+1.0m前後で検出した。

## 出土遺物

### 00-①調査区

1層の床土から須恵器・土師器・陶磁器が出土しているが、いずれも細片であり実測は不可能であった。また客土の可能性のある3層から、弥生土器・古墳時代～古代の須恵器・土師器が出土している。

### 00-②調査区（第14図-1・3）

1・2層の近・現代水田面から須恵器・土師器・陶磁器のほか、13世紀以降の瓦器が出土している。3～5層の客土から近世の陶磁器のほか、縄紋土器・弥生土器・古代の須恵器・土師器が出土している。縄紋土器の時期は不明だが、縄紋を地文としているものである（1）。8層で中世の土師器が数点出土しているほか、16層から縄紋土器とサヌカイト片が出土している（3）。全体に橙色系の胎土であり、隆起帯に爪形紋を施すものである。時期は不明瞭であるが、船元IV～里木IIの深鉢の可能性が高い。

### 00-③調査区

1層の近・現代水田床土から中世以前に遡る土師器や近世の陶磁器が出土している。4層ではサヌカイト片や古代の土師器が出土しているが、破片でありいずれも実測は不可能であった。

### 00-④調査区（第12図-1～7）

1・2層の近・現代水田面から、古代の土師器や近世陶磁器などが出土している。5層では弥生土器・古代の須恵器・瓦器・近世の陶磁器などが、6層では弥生土器や古代の土師器が出土しており、5・6層は他調査区で確認されているものと同様、客土と考えてよいであろう。

9層から縄紋土器が2点出土している（1・2）。同一個体と考えられ、微粒の長石を大量に混入する胎土をもち、灰白色を呈するものである。隆帯を付し、三角形刺突の変形した工具で綾杉状に紋様を施している。東海に多く出土する神明式（中期前～中頃）に紋様が酷似しており、口縁部に近い部位と考えられる。第6面検出流路48の最下層から縄紋土器が5点出土している（3～7）。3は長石・石英・角閃石を混入する胎土をもつ。4条の沈線を施すが、地文については不明。星田式もしくは中津式の可能性もある。4も長石・角閃石を混入する胎土を使用している。磨消し縄紋のため中津式と考えられるが、口縁端部にも縄紋を施しており、中期の特徴を残した段階のものと思われる。5は長石・角閃石を混入する胎土を使用し、浅い縄紋を施す。時期は不明。6は長石・石英・角閃石を混入する胎土を使用している。口縁部の形状は波状になる可能性を多分にもつものである。口縁端部にもやや磨耗しているが縄紋を施しており、星田式と考えられる。7も長石・石英・角閃石を混入するもので、平口縁になる可能性が高い。口縁端部にも縄紋を施す星田式の土器である。

### 00-⑤調査区（第14図-2・22～24）

1層の近・現代水田面から陶磁器・須恵器・土師器片が出土している。14層からは縄紋土器とサヌカイトが出土している（2・22・23）。2は石英の微粒を混入し、にぶい黄橙色を呈する。磨耗著しく時期は不明瞭であるが、縄紋を地文としており、中期に相当する可能性が高い。22・23は剥片である。いずれも刃部を作り出しておらず、未製品で廃棄されたものであろう。25層から桃核が1点出土している。当時の環境を考える上で貴重な資料となりうる。また25層の最下部で、有舌尖頭器が1点出土している（24）。舌部が欠損しているために石器の長さは不明。刃部のつくりは非常に粗く、縄紋時代前期にまで遡るものと考えてよいかもしれない。

### 00-⑥調査区（第13図-1～33）

当調査区の上層は産業廃棄物で削平されていたため、縄紋土器しか出土していない。33は1層から

出土しているもので、底部の形状から里木II～IIIに相当するものと思われる。

1～25は3層から出土したものである。いずれも磨耗が著しく、縄紋の不明瞭なものが多い。1～3は船元IIに相当するものである。1は体部に縄紋を施した後に口縁部外面には2段の半截竹管による刺突紋を、内面には1条の縄紋を施す。2は石英を混入しているため灰白色を呈している。結節隆帯に半截竹管紋を施し、体部には棒状工具で刺突紋を施す。3は硬い原体を縄紋に使用していることから、船元IIと考えている。4～7は船元II～IIIに相当するものである。6は長石と雲母を混入しており、灰黄色を呈する。外面に粘土の離ぎ目が明瞭に残る。7は微隆起帶を有するものであるが、縄紋を地文としているかどうかは不明。石英のほかに円鱗を混入する。8・9は船元II～IV、10～12は船元III～IVに相当するものである。8・9は2mm幅の縄紋を2mm間隔で施しており、いずれも黄褐色を呈する。10～12は石英・雲母を混入しており、2mm幅の縄文を2～3mmの粗い間隔で施す。13は里木IIと考えられるが、地文に使用している縄紋の幅が大きいため船元IVの可能性もある。14～16は里木IIに相当するものである。14は縄紋の地文に連弧状沈線をめぐらすものである。15・16は地文に撚糸紋を用いているもので、長石・雲母を多く混入する。17は縄紋が確認できいため中津式と考えられるが、東海系の呪式（中期中頃）の可能性もある。18～25は縄紋が不明瞭であり時期が不明のものである。3層出土の縄紋土器は、いずれも中期中頃～後期初頭におさまる。

26～32は5層から出土したものである。26は船元Iに相当するものである。1字形爪形紋を施し、キャリバー形の形状を持つ土器の頸部に該当する。27～29は船元IIに相当するものである。27は外面に半截竹管による刺突紋を2段施し、口縁部内面に縄紋を1条施すものである。口縁部内面に段は有さない。28は黒褐色を呈しており、外面に刺突紋を施す。29は地文に硬い縄紋原体を用いているため、船元IIと考えている。30～32は船元II～IVに相当するものである。30は胎土に石英と角閃石の微粒を混入する。31は金雲母を大量に混入し、暗灰黄色を呈している。外面に雲母の鉱物がはざた痕が明瞭。32も金雲母を混入し黒褐色を呈する。磨耗が著しく縄紋が不明瞭である。5層出土の縄紋土器は、いずれも中期前～中頃におさまる。

#### 00-⑦調査区（第14図-4～10）

1層は近・現代水田面の床土であり、縄紋土器・弥生土器・時期不明の須恵器・土師器が出土している（4～6）。4は船元II～IIIに相当し、口縁部内面に縄紋を1条施す。5は船元II～IVに相当するものである。6は磨消し縄紋でかつ垂下沈線に楕円紋を施すもので、中津式と考えられる。2～4層は流水堆積層であり、古代～中世の須恵器・土師器・近世の瓦・陶磁器が出土している。5層で古代の須恵器・土師器が、6・8層で時期不明の土師器が出土している。7～10は18層出土の縄紋土器である。7は後期の可能性のあるもので、8は北白川上層に相当するものである。9～10は縄紋が不明瞭であり、時期は不明である。

#### 00-⑧調査区（第14図-11～16・18～19）

1層は近・現代水田面であり、時期不明の須恵器・土師器・近世の陶磁器が出土している。2～7層で古墳～古代・中世の遺物が出土している（18・19）。18・19はいずれもTK23～47に相当するものである。11・12は第6面検出流路74の下層から出土したもので、12は船元IVの可能性がある。13～16は21層から出土した縄紋土器である。14～15は船元II～IV、16は船元IVに相当する。

#### 00-⑨-1調査区（第14図-21・25）

1・4層からはサヌカイト・須恵器・土師器が出土している（25）。1層から出土したサヌカイトは

明瞭な刃部をつくりだしてはいないが、若干使用痕が残るものである。第3面検出の溝81からは古墳時代～古代の須恵器・土師器が多く出土している（21）。

00-⑨調査区（第14図-17・20）

1層の近・現代水田面から中世の土師器が、3・7層からは古代～中世の須恵器・土師器が出土している。9層からは円筒埴輪片と古代の土師器が出土している（20）。円筒埴輪は円形のスカシを有するもので、TK23～MT15に収まるものである。11層から繩紋土器が1点出土しているが（17）、磨耗しており時期は不明瞭である。

00-⑩調査区

上層の大半が産業廃棄物で占められていたこと、繩紋時代中期の流水堆積層しか検出できなかつたことから、当調査区から遺物の出土はなかつた。

#### 4. 2001年度調査成果

##### 検出遺構

2000年度に調査を行つた東側地域と西側地域の間が未調査であり、断面の整合性を見るために2001年度に外環状線から東側に3ヶ所、そこから讃良川の南で外環状線より西側の地区に新たに3ヶ所、の計6ヶ所調査区を設定した。掘削深度は、ボーリングデータおよび前年度の調査成果に基づいて現地盤から5.0mに設定し、鋼矢板を打設している。

2000年度の調査成果と整合性を見るため、00-④～⑥調査区に関しては本報告書で成果を述べることにするが、01-①～③調査区に関しての成果報告は次年度に譲ることにしたい。

01-④調査区（第15～17図）

2001年度の調査対象地の中でも最東部に位置している。約0.2mの耕土を除去した後、近・現代の水田面、古代と考えられる包含層、古代以前の流路および落ち込み・溝を確認した。

1層は近・現代水田面の床土にあたる。第2面（3層上面）では南北方向を指向する鰐溝を検出している。4・5層ともいずれも鉄分の沈着が著しい。古代の須恵器片が出土していることから、古代の包含層の可能性もある。第3面（6層上面）は黄灰色粗砂混じりシルト層で、上面に踏み込みが多く見られる。また第4面（7層上面）では上面に稈株痕が見うけられ、ともに水田面であった可能性が高い。第6面（13層上面）では溝11・落ち込み12を検出している。北側から舌状に張り出した微高地の南西部に落ち込み12があり、低湿地の堆積状況を示す。この落ち込み12がほぼ埋没してから、溝11が微高地の縁辺に沿うような形で、北東側から西側に流れている。

第7面（17層上面）では流路13、第9面（20層上面）では流路14、第10面（25層上面）では流路15、第11面（27層上面）では流路18を検出している。いずれも南側を肩部にしたもので、基本的に東西方向に流れている。堆積状況やあまり土壤化していないことから流水の強い環境下にあったと思われる。また第10～12面でこれらの流路に伴う溝を検出しておらず、北側に交野台地から派生する谷が存在していた可能性を示す。

第13面（33層上面）では南北方向を指向する流路31を検出している。33～38層はラミナが顕著なシルト層であり、全く土壤化していないことから流路内の堆積土である可能性も考えられる。第14面（39層上面）でも南北方向を指向する流路32を検出している。39層がほとんど土壤化していない点や、

40~45層がラミナの顕著な細砂～疊層であることから、南北方向を主として指向する流路の流れが一時的に落ちていた状況であることがわかる。第15面（46層上面）は、東北方向を指向する流路33に東側から溝34が流れ込んでいる状況を確認した。47~52層はいずれもラミナの顕著なシルト～疊層であり、ラミナの方向および切りあいから、数回の流れを確認している。

#### 01-⑤調査区（第15・17図）

2001年度の調査対象地の中では最南部で、楠根川の北岸に設定した。糸引0.2mの耕土および床土を除去した後、近・現代の水田面、中世以前の包含層、縄文時代中期の流水堆積層、陸地化に伴う粘土層、海成堆積層と考えられる粗砂層を確認した。

第1面（1層上面）は近・現代水田面の床土・盛土にあたる。1層から古墳時代～中世の遺物が出土している。第2面（2層上面）は東西方向を指向する鰐溝を検出している。2層で弥生時代～古代の遺物が出土しており、1~2層は客土である可能性が高い。

第3面（3層上面）では不定方向の溝を数条検出している。条里に付かない溝と考えられる。第4面（4層上面）は、ラミナの見られない黄灰色極細～粗砂層である。上部に根痕が明瞭に残る。第5面（5層上面）は灰色細砂混じりシルトで、鉄分の沈着が著しい。6層は発達した土壤化層であり、水田面であった可能性もある。6~8層は流水堆積層であるが、ラミナは確認できなかった。

9~13層は基本的に黒色系と灰色系のシルトおよび粘土の互層であり、低湿地の堆積状況を示す。

第10面（14層上面）は、緑灰色シルト混じり極細～細砂で、植物遺体を含む。14層以下は流水堆積層である。14層からサヌカイト片（未加工品）が出土しているが、時期は不明。15層からは縄文土器が出土している。縄文土器は細片であり、かつ磨耗が著しいため時期は不明瞭でない。

第11面（17層上面）は、暗オリーブ灰色極粗砂混じりシルト層で、T.P.+2.2m前後で確認している。層序から陸地化に伴う粘土層の可能性が高い。層厚がない点や上面の凹凸が著しく、14~15層によって大きく削除されていることがわかる。第12面（18層上面）はオリーブ灰色極細砂層である。東側で南北方向を指向する流路35を検出した。19~20層はラミナの顕著な流水堆積層である。なお、断面にはかからなかったが、第13面（21層上面）を調査区の南側、T.P.+1.5m前後で確認している。黒色細砂混じりシルト層であり、19~20層の洪水によって南側以外は大きく削除されたものと思われる。

#### 01-⑥調査区（第16~18図）

調査対象地の中でも最西部で、外環状線（国道170号線）の東側に位置している。約0.2mの耕土を除去した後、近・現代の水田面、中世の包含層、古墳時代～古代の包含層、縄文時代の包含層、陸地化に伴う粘土層、海成堆積層と考えられるシルト～粗砂層を確認した。

第1面（1層上面）は近・現代水田の床土である。第2面（3層上面）は褐灰色粗砂混じりシルト層で、東西方向を指向する鰐溝を検出している。第3面（4層上面）は足跡が多く検出されている。鉄分・マンガンの沈着が著しい。

第4面（6層上面）では溝3およびピット4~8を検出している。溝3はラミナの顕著な流水堆積層で、肩部が直に落ちることから人工的な水路の可能性もある。ピットはいずれも円形のもので、溝3に伴う杭列と考えられる。第5面（10層上面）では溝9を検出している。溝9は溝3よりやや南側を流れるが、西側で2本に分流している状況を確認した。第6面（15層上面）では溝10を確認している。溝10は溝9とほぼ同じ方向を指向している点、溝10の上層を切って溝9が掘削されている点から、時期にそう隔たりがないものと考えている。溝10の最下層（14層）はラミナの顕著な極粗～粗砂と粘土の

互層で、古代以前の土師器片が出土している。

18~21層は基本的に黒色系と灰色系の粘土およびシルトの互層であり、低湿地の堆積状況を示す。

22~25層は流水堆積層であるが、ラミナは不明瞭である。縄紋時代中期以前のものと考えてよいであろう。第14面(27層上面)は、緑灰色シルト層で植物遺体を多く含む。第15面(29層上面)は黒色極粗~粗砂混じりシルトで、T.P.+3.2m前後で検出した。昨年度の調査で確認された陸地化に伴う粘土層と同層である。概ね東西方向を指向する溝20と落ち込み21を検出している。第16面(30層上面)は暗オリーブ灰色シルト~極細砂で、深さや形状の一定しない溝を数条検出している。第17面(31層上面)は灰オリーブ色極細砂である。31~35層は層厚約1.8mの流水堆積層である。上~中層にあたる31~34層では水平方向のラミナが見られ、海成堆積層の可能性もある。最下層では36層のシルトブロックを若干混入しており、不定方向のラミナが顕著に認められる。第18面(37層上面)は黒褐色粘土で、植物遺体や炭化物が水平に堆積しており、水中堆積の様相を呈する。層序より01~⑤調査区の第13面(21層上面)に対応するものと考えられる。

#### 出土遺物

##### 01~④調査区

1層の床土から須恵器、土師器、また2面の精査中に陶磁器、土師器が出土しているが、いずれも細片であり時期は不明瞭。2層からは時期不明の土師器と古代の須恵器が出土している。細片であり実測は不可能であった。

##### 01~⑤調査区(第18図-1~3)

1層の床土から近・現代の陶磁器、古代~中世の土師器、古墳時代~古代の須恵器、サヌカイトが出土している。いずれも細片であり実測は不可能であった。2層は時期不明の須恵器、古代の土師器、弥生土器が出土している。1~2層は客土の可能性もある。また14層からサヌカイトが出土している。流水堆積層から出土していることや、未加工品であることから、至近距離から廃棄されているものであり、当調査区に帰属するものではない。

15層から縄紋土器が3点出土している(第16図-1~3)。1の外表面は、凹凸の不明瞭な隆起帯にC字形爪形紋を施している。船元IIに相当するものであり、他の縄紋土器に比して器壁が薄い。2は縄紋を地紋としているもので、外表面は隆起帯に半截竹管紋を上下2段に施している。内面の口縁部付近には縄紋を1段施し、端部には不明瞭であるが、縄紋を1条施している。鷹島~船元IIに相当する可能性がある。3の外表面は垂下条線を数条施すもので、線の太さは一定していない。縄紋時代中期~後期にかけての時期のものと考えられる。

##### 01~⑥調査区

1層の床土から近・現代の陶器が出土している。細片であり実測は不可能であった。3層からは古代~中世の土師器、瓦器が出土している。瓦器は磨耗が著しく時期は不明瞭であった。4層からは時期不明の土師器が出土。細片であり実測は不可能であった。第6面検出の溝10の最下層からは古代以前の土師器が出土している。磨耗著しくかつ細片であることから、時期を確定することはできなかった。

## 5. まとめ

2000年度の調査では、中・近世以降に大きく土地改変がなされており、弥生時代～古墳時代・古代の遺構および包含層は削平をうけているところが大半を占める。よって近・現代の水田面は確認しているものの、中世以前の条里地割に関連する水田面は検出できなかった。また東側地域では上層の客土から弥生～古代の遺物がまとまって出土しており、周辺に同時期の遺構が存在していた可能性を示すものとなった。同様に西側地域の00-⑧・⑧-1調査区では、古墳時代～中世にかけての遺物がまとまって出土しており、北東部側にも比較的浅い位置では同時期の遺構が存在していた可能性を示している。また00-⑨調査区では古墳時代後期に相当する円筒埴輪片が出土しており、至近に同時期の古墳が存在していたことを想定させるものである。

特筆できるのは、大半の調査区で縄紋時代の遺物が出土していることで、付近に縄紋時代の集落が存在していたことを充分に推定させる。なかでも00-④調査区で出土した縄紋土器は個体も大きくほとんど磨耗していないことから、至近距離で廃棄されたものであろう。また00-⑥調査区で埋葬の可能性のある遺構を検出するなど、この周辺に同時期の遺構群が存在している可能性は高い。また土器の大半が中期前～中頃におさまることなどから、今回の調査対象地から南東方向に約200m離れた讚良川遺跡との関係も含めて、大きな範囲で遺跡の性格を考える必要性がある。

00-⑤調査区では安定した火山灰層を確認した。陸地化に伴う粘土層に挟まれていることや水平堆積であることから、この火山灰層は水成堆積である。しかもあまり水位のない状態での堆積と考えられる。調査時には、層序および上層での出土遺物よりアカホヤ火山灰層（約6,300年前降下）の可能性が考えられたが、分析結果よりAT火山灰層（約24,000年前降下）であることが確定した。よって上層の流水堆積層によって、上層に降下したと考えられるアカホヤ火山灰層は大きく削剥されていることがわかった。このプライマリーに近い火山灰層の検出は、当地域の堆積層の時期を決定する重要な発見といえ、同様に00-④調査区の第10面で確認した地震の痕跡も、上層から中期の遺物が出土していることを考えると、縄紋時代中期末より以前に相当するものであろう。長原遺跡で中期中～末頃に相当する地震痕跡が確認されており、同じ地震によるものである可能性が高い。

00-②・⑤・⑧～⑩調査区では、陸地化に伴う黒色粘土層を検出した。洪積台地が西に下がっていくのと同様に粘土層の検出面も下がっており、かつ北よりも南側の方が下がっていることも確認できた。この粘土層の上面では、多方向に流れる溝や落ち込みを検出しており、水位の上下に伴ってできた自然遺構であることがわかる。またこれらの遺構の埋土に火山灰のブロックが混入し、これらアカホヤ火山灰層であることも確認できた。下層は流水堆積層であるが、海成堆積層であるかは不明。00-⑨調査区で確認したシルト層が00-⑧調査区では確認できないなど、周辺を削削する強い流れが想定できる。

2001年度の調査では、2000年度で明確にできなかった火山灰層と上下層の関係および、時期を決定することを調査の主目的としていた。火山灰層は上層の流水堆積層によって大きく削剥されており、全く確認できなかった。また、下層の陸地化に伴う粘土層上面の遺構埋土に、この火山灰ブロックの混入も全く確認できなかった。2001年度の調査における大きな成果の一つとして、01-⑤・⑥調査区で2000年度の調査で確認できなかった粘土を確認したことがあげられる。この層は炭化物および植物遺体が水平堆積していることから、沼澤湿地の水中堆積である。その結果によってこの周辺の状況を復原することができるであろう。

2001年度の調査では、前年度の調査成果と同様に、近・現代に中世もしくはそれ以前の面まで削平を受けていることが明らかになった。それは各調査区において、第2層以下で近・現代の遺物が少ないと、古代～中世の土器片が出土していることから考えられる点である。故に2001年度の調査でも中世以前の条里地割に関連する遺構は確認できなかったが、中世以降に相当する01-⑤調査区の第3面で方位に則らない溝を数条検出しており、この時期には条里地割が施工されていない可能性もある。今回の調査対象地は講良郡条里遺跡ということもあり、条里地割の復原は今後の課題となる。

2001年度の調査対象地で最東部にある01-④調査区では、第6面で微高地の縁辺に溝がめぐる状況を確認している。同様に01-⑥調査区でも古墳時代～古代に相当する第4～6面で、方位を指向しない溝を検出していることから、古墳時代～古代にかけて安定した環境ではなかった可能性が高い。また01-④調査区の第7～11面では、北側に落ちる流路に数条の溝が流れ込んでいる状況を確認しており、この周辺は繩紋～弥生時代にかけても、安定した環境ではなかった可能性がある。同様に第12面以下は西側に落ちる流路を検出しているが、いずれもほとんど土壤化していないことや、大半がラミナの顕著な層であることから、流路内の堆積土の可能性が高い。

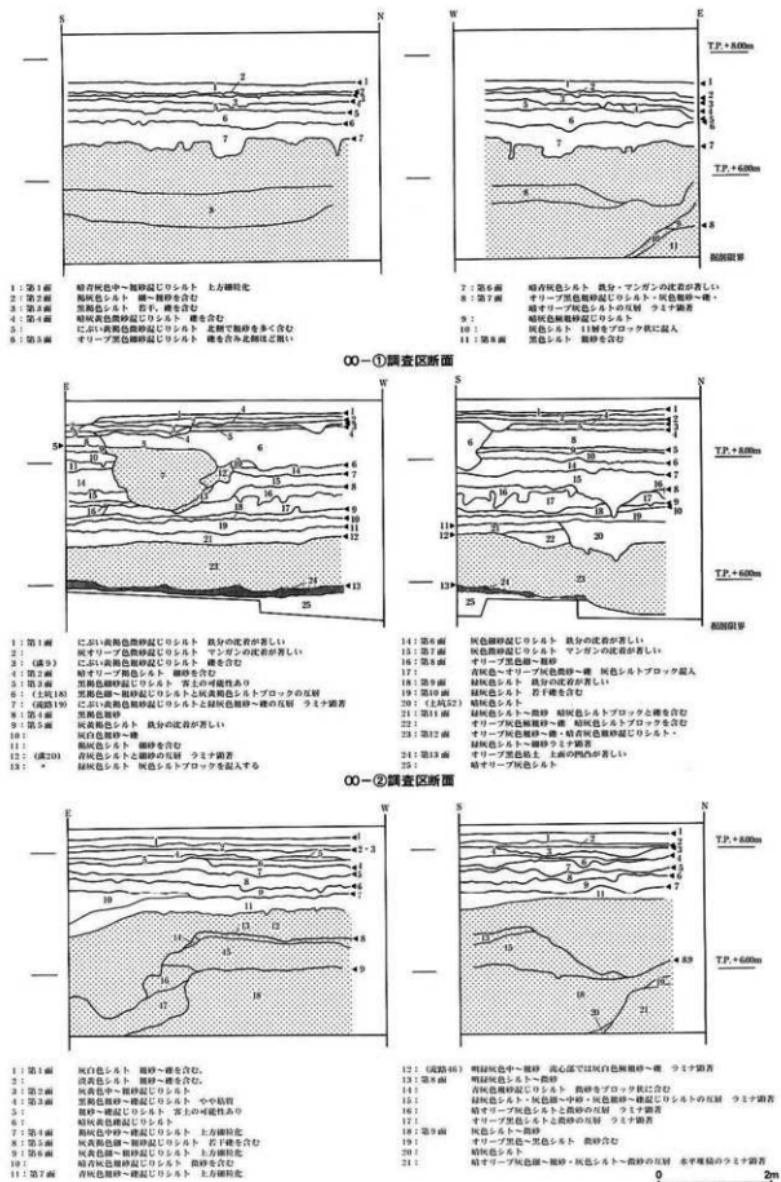
01-⑤調査区では、楠根川に接していることもあり、上層から流水堆積層を多く確認している。講良川に接している00-⑦調査区と同様の堆積状況を示していることから、近世の条里地割に伴って河川の流水方向が変更を受けているのにもかかわらず、ほぼ同じような地域を東西方向に流れていることが明らかになった。出土遺物がほとんどないため時期は不明瞭であるが、古墳時代～古代にはすでにこの周辺が河川であった可能性がある。

01-⑤・⑥調査区では、繩紋海進に伴う粘土層を検出した。2000年度の調査でも粘土層の検出面が東より西が、北より南側が下がっていることがわかつっていたが、2001年度の調査でも同様に北より南側に位置する01-⑤調査区の方が粘土層の検出面が下がっている。またこの粘土層の上面では、2000年度の調査と同様に多方向に流れる溝や深さの一定しない落ち込みを検出している。

講良郡条里遺跡の外環状線から東側における調査成果として、全体に近・現代の水田開発に伴って削平されており、不明瞭な部分が大きい。だが中・近世は水田耕作を行うなど安定した地域であるのに比べ、古墳時代～古代にかけては流路や溝が多く検出されているように、あまり安定した状況ではなかつたことが推定できる。また今回の調査では、繩紋時代中期以前の堆積状況を確認したことが大きい。例えば繩紋時代中期以前の流水堆積層に限るならば、東ではT.P.+6.0m前後で上面を検出しているが、西ではT.P.+3.0m前後で検出しており、西に行くにつれ地形が下がっている状況がわかる。また東側では流水堆積層が厚く、西側ではほとんどなくなるのも特徴的だといえよう。

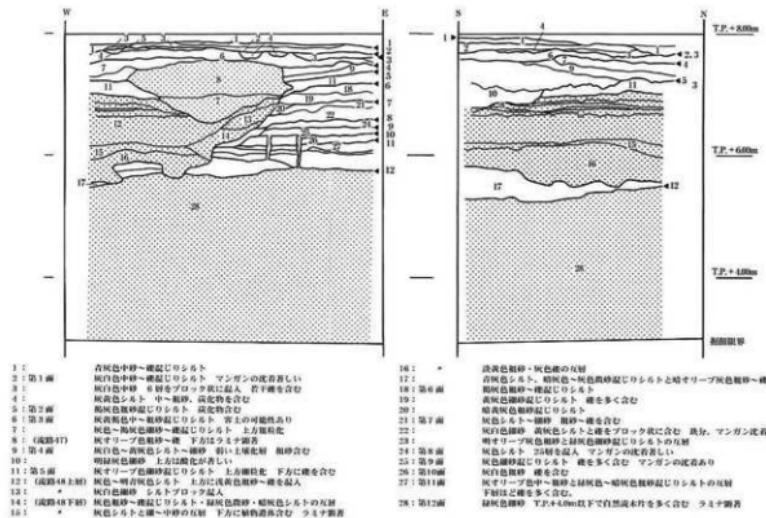
陸地化に伴う粘土層も東側の調査区のようにT.P.+6.0m前後で検出しているものと、掘削限界まで流水堆積層であった調査区がある。これは削平されている可能性と、交野台地から派生している谷地形に規制され、当時の汀線が入り組んでいる可能性がある。西側の調査区ではT.P.+1.0m前後で確認しており、南側にゆくにつれて低くなる点など、地形に即して粘土層が堆積している状況が確認できた。

また西側ではこの黒色粘土層で検出される溝から、火山灰のブロックが多く出土している。00-⑤調査区で黒色粘土層にパックされて安定した火山灰層が検出されていることと合わせて、黒色粘土層が堆積している際に、これらの火山灰が降下していることがわかる。分析の結果、約24,000年前に降下したとされるAT火山灰層であることが確認できた。この周辺でほぼプライマリーな火山灰層が確認された例は限られ、今後当時の周辺環境を考える上で重要な資料を呈したといえよう。 (本田・清水)

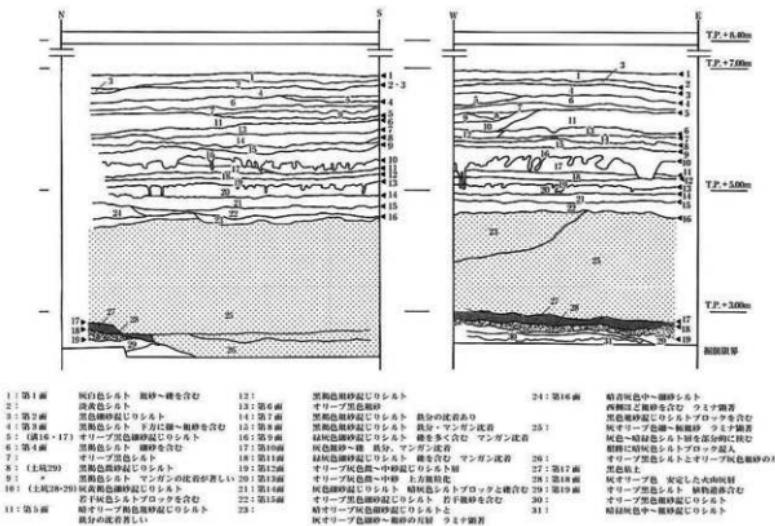


第4図 診定都条里道路 00-①～③調査区断面図

## 第1節 講良郡条里遺跡

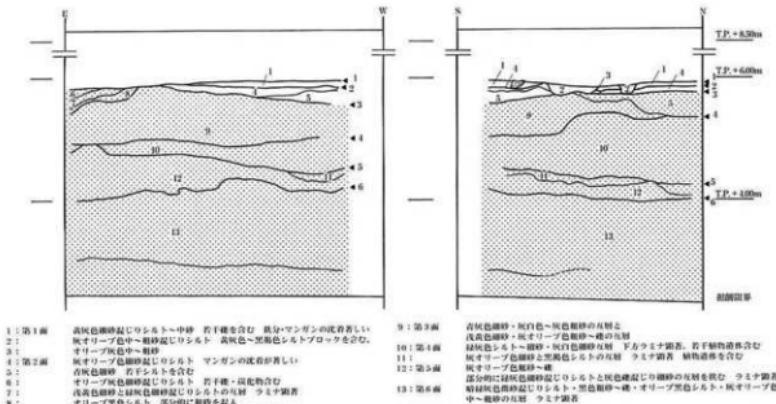


00-④調査区断面

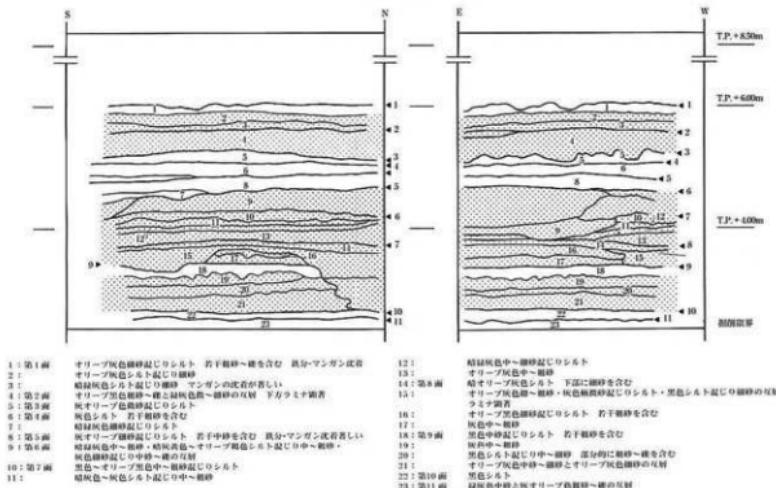


00-⑤調査区断面

第5図 講良郡条里遺跡 00-④・⑤調査区断面図



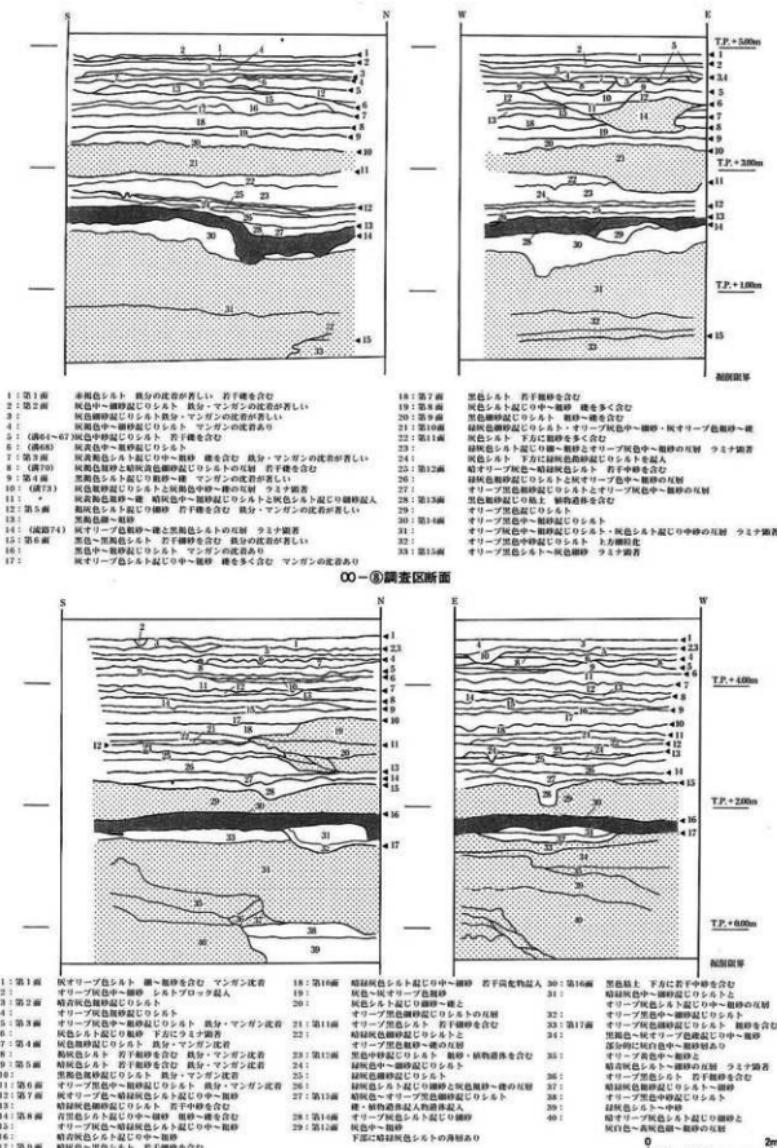
00-⑥調査区断面

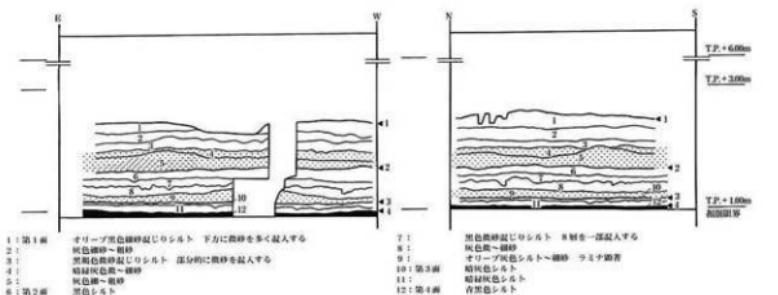


00-⑦調査区断面

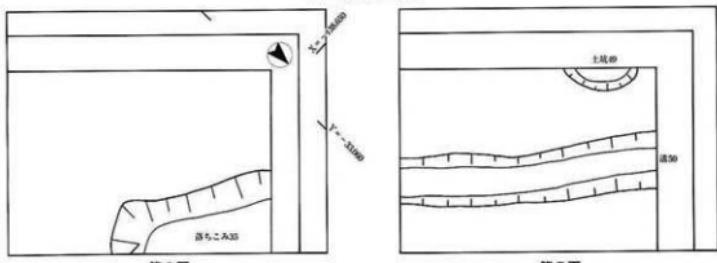
00-⑧-1調査区断面

第6図 謙良郡条里遺跡 00-⑥・⑦・⑧-1調査区断面図





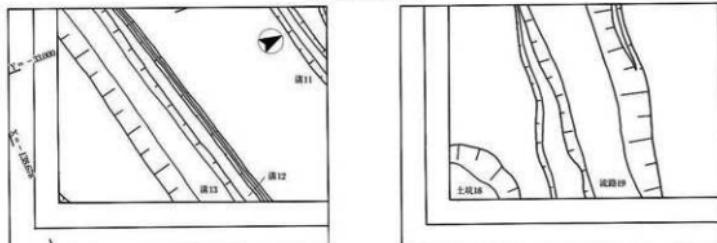
OO-⑩調査区断面



第3面

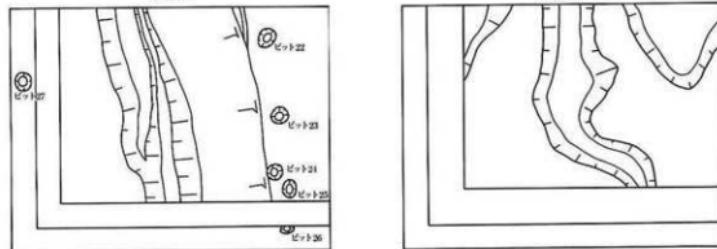
第7面

OO-①調査区平面



第3面

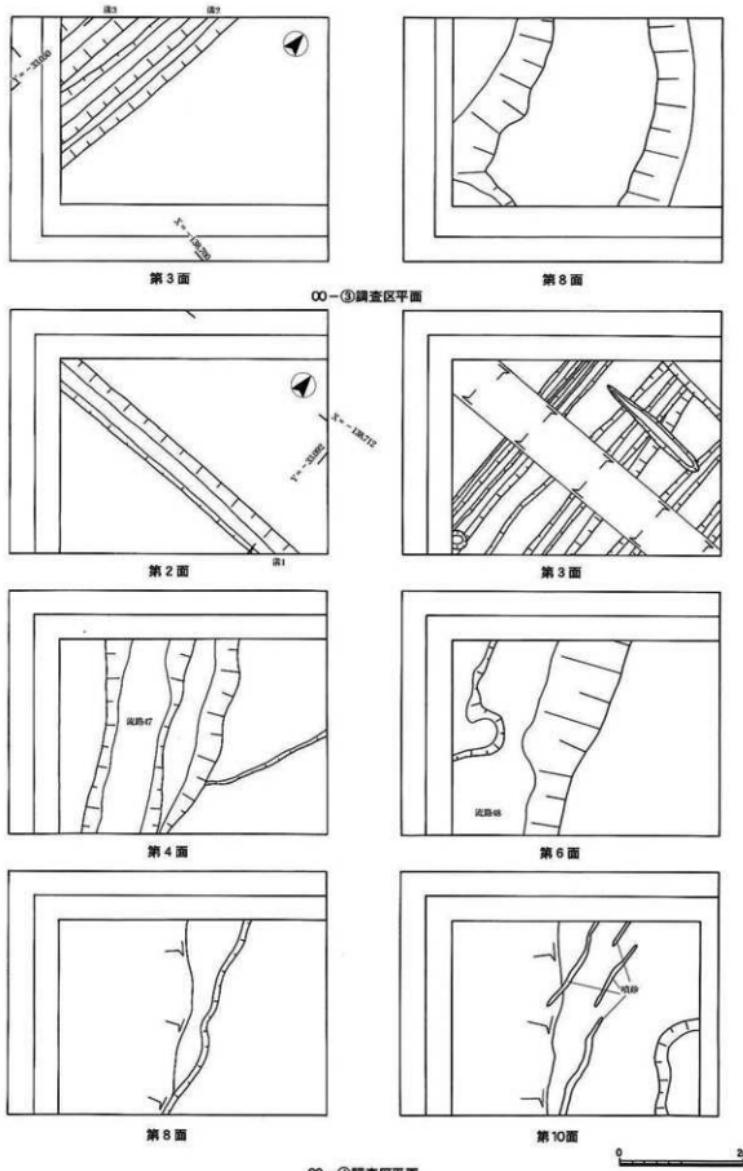
第5面



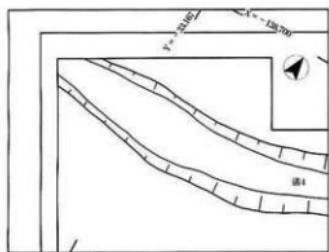
第6面

第13面

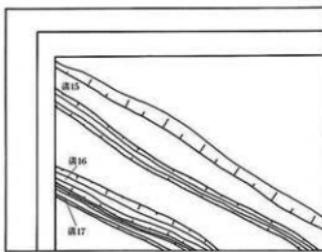
第8図 播磨郡条里遺跡 OO-⑩調査区断面、①・②調査区平面図



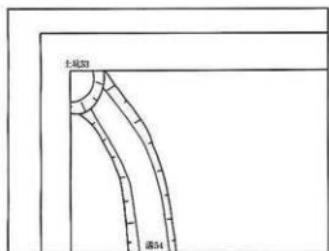
第9図 講良郡条里遺跡 00-③・④調査区平面図



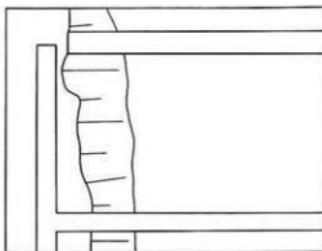
第2面



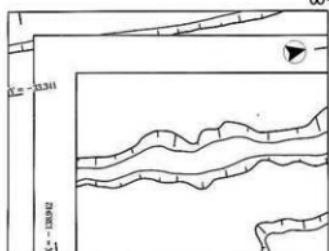
第4面



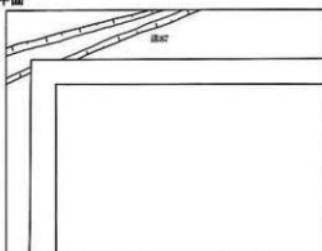
第10面



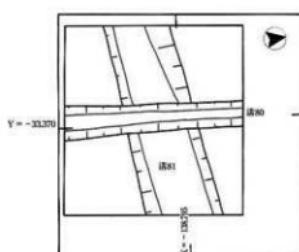
第18面



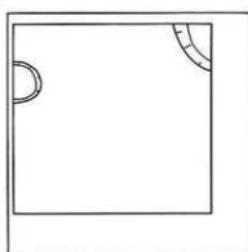
第3面



第4面

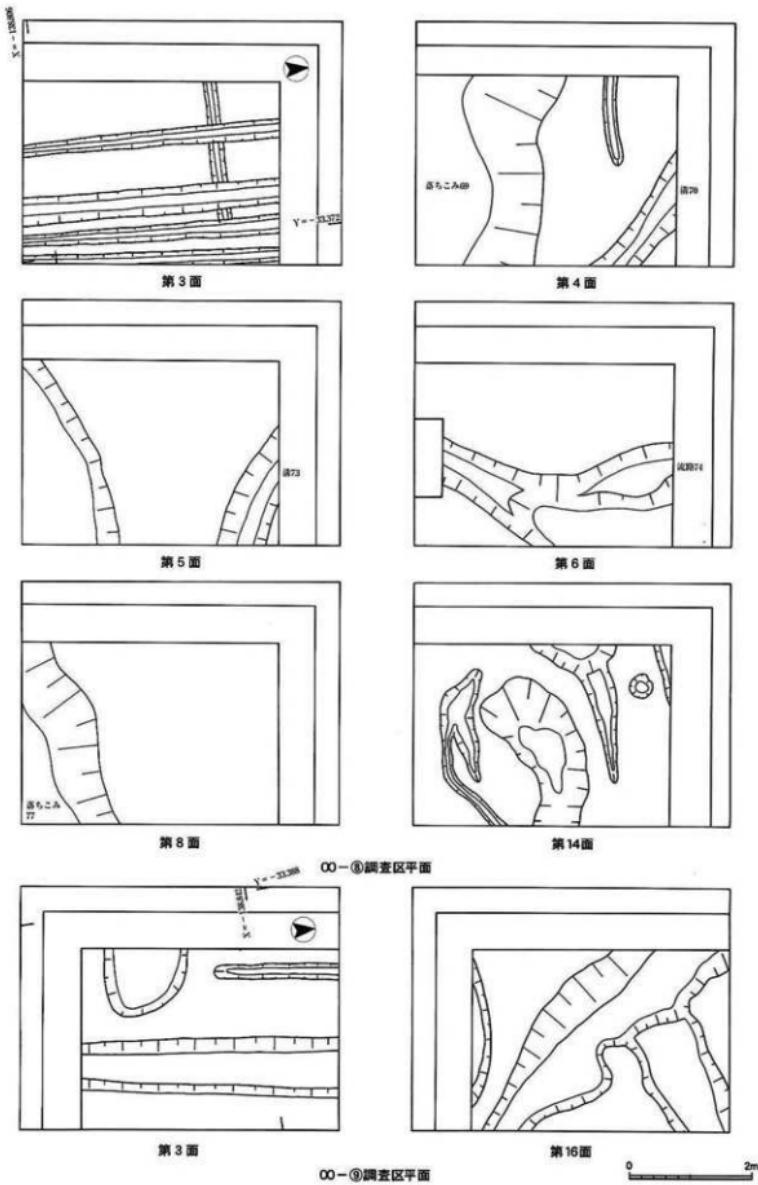


第3面



第4面

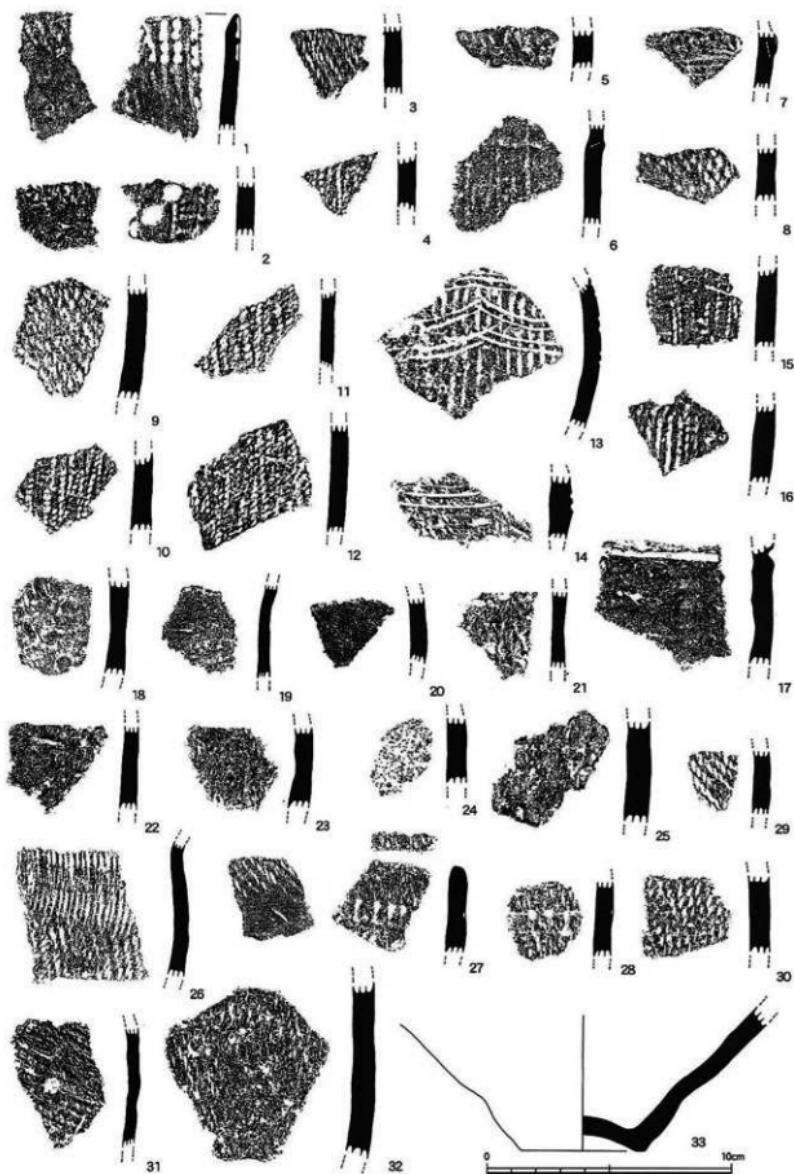
第10図 講良都条里遺跡 00-⑤～⑪調査区平面図



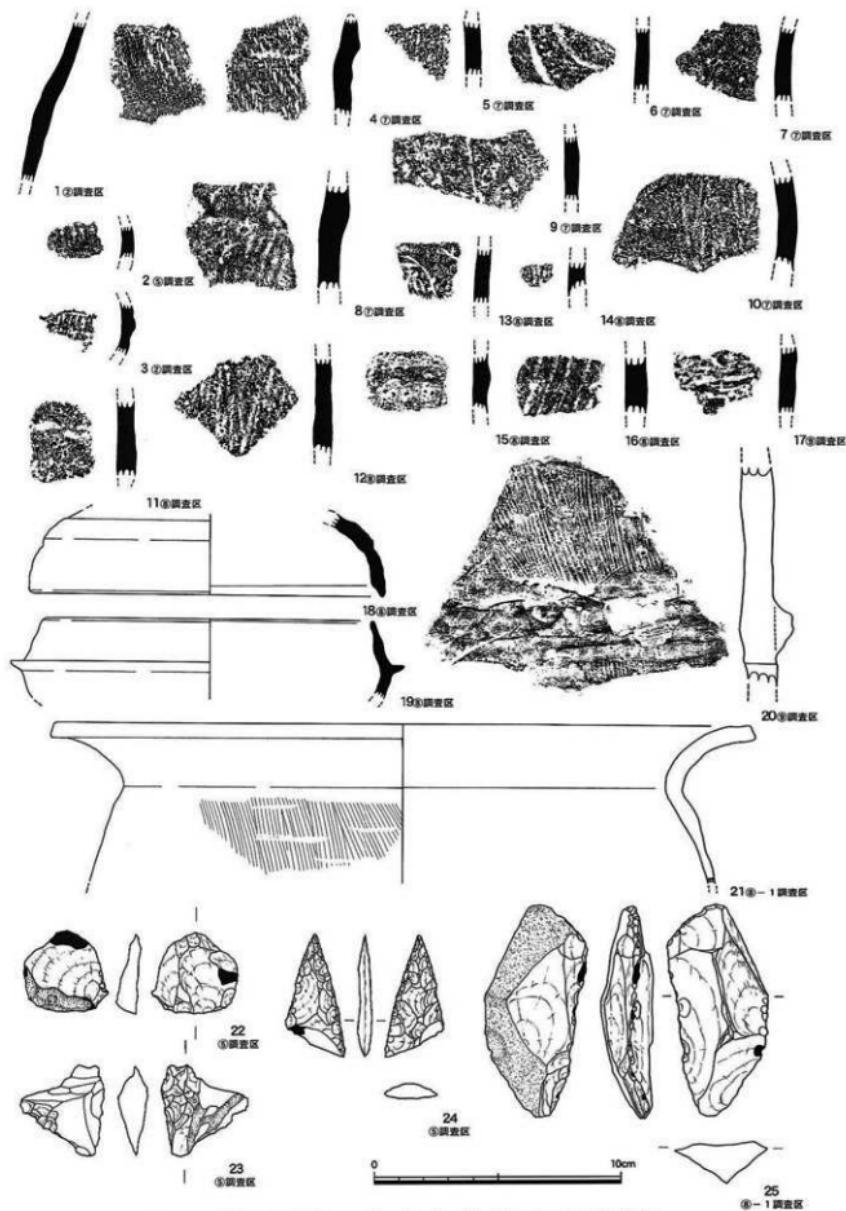
第11図 謕良郡条里遺跡 00-⑧・⑨調査区平面図



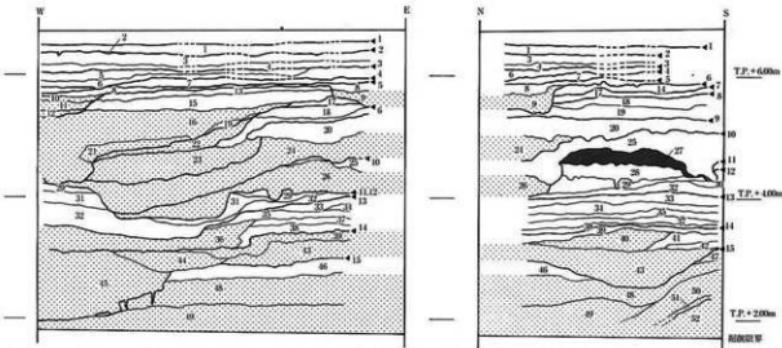
第12図 講良郡条里道路 00-④調査区出土遺物実測図



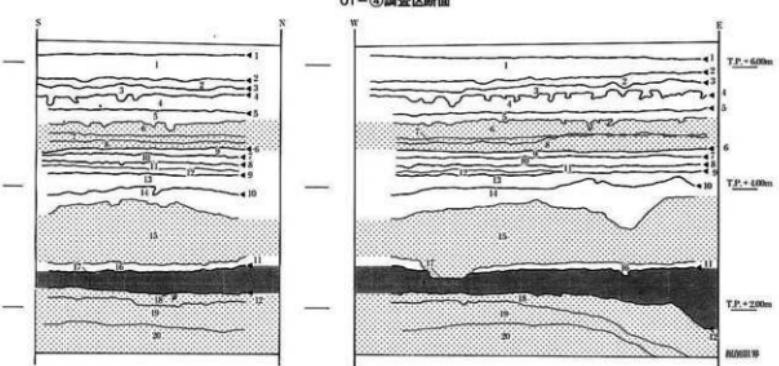
第13図 講良郡条里道路 00-⑥調査区出土遺物実測図



第14図 訓良郡条里遺跡 00-①～③・⑤・⑦～⑩調査区出土遺物実測図



1: 第1面	同上	21:	緑色沙色シート起じり層～細縫隙 動植物あり	49:	同色細縫隙 動植物多々含む
2: (第2面)	同じく黄色細縫隙 マンソン・鉄分沈着	22:	同色層～細縫隙起じりシート 動植物含む	51:	緑褐色細縫隙 シルト岩若干混入
3: 第3面	黄褐色中性起じりシート マンソン・鉄分沈着	23:	同色層	52:	オリーブ灰色シート起じり～中縫隙
4: 第4面	同上	24:	死骸層	53:	細縫隙
5: 第5面	同色細縫隙起じりシート 黄鉄鉬鉱化	25:	死骸層～細縫隙 最下部に礁を含む	54:	オリーブ灰色シート起じり細縫隙
6: 第6面	同色細縫隙起じりシート 黄鉄鉬鉱化	26:	死骸層～細縫隙 動植物有り	55:	緑褐色細縫隙起じり細縫隙と 灰オーバー色中性起じりシート
7: 第7面	同色細縫隙起じり細縫隙 灰分沈着	27:	死骸層～細縫隙	56:	ナミナガケ
8: 第8面	同色細縫隙起じり細縫隙 灰分沈着	28:	死骸層～細縫隙起じりシート	57:	死骸層～細縫隙
9: (第9面)	オリーブ灰色シート起じり細縫隙 ナミナガケ	29:	死骸層～細縫隙起じり中縫隙	58:	オリーブ色中性起じり細縫隙
10: (第10面)	オリーブ灰色シート起じり細縫隙 ナミナガケ	30:	死骸層～細縫隙起じり中縫隙	59:	ナマナガケ
11: (第11面)	オリーブ灰色シート起じり細縫隙 ナミナガケ	31:	死骸層～細縫隙起じりシート	60:	死骸層～細縫隙
12: (第12面)	オリーブ灰色シート起じり細縫隙 灰分沈着	32:	死骸層～細縫隙起じりシート	61:	死骸層～細縫隙
13: (第13面)	同色細縫隙起じりシート 灰分沈着	33:	第11面	62:	死骸層～細縫隙
14:	同上	34:	死骸層～細縫隙起じりシート	63:	死骸層～細縫隙
15:	同上	35:	死骸層～細縫隙起じりシート	64:	死骸層～細縫隙
16:	同上	36:	死骸層～細縫隙起じりシート	65:	死骸層～細縫隙
17: (第14面)	オリーブ灰色シート起じり細縫隙	37:	死骸層～細縫隙起じりシート	66:	死骸層～細縫隙
18: (第15面)	同上	38:	死骸層～細縫隙起じりシート	67:	死骸層～細縫隙
19:	同上	39:	第11面	68:	死骸層～細縫隙
20: 第16面	同色土 動植物含む				

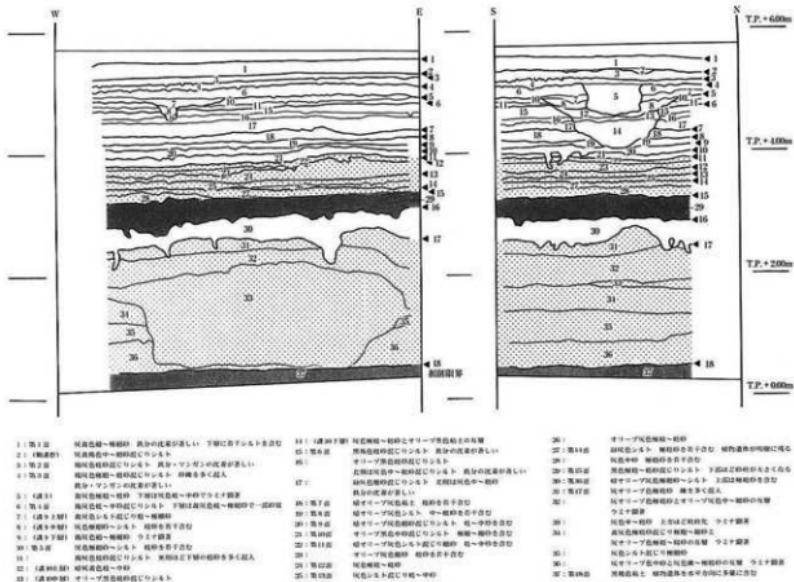


1: 第1面	黄褐色～中性起じる岩がけしい	12:	緑色シート起じり細縫隙
2: 第2面	同色細縫隙起じりシート 層～中縫隙を多く含む	13: 第1面	オリーブ灰色中性起じりシート
3: 第3面	黒褐色シート起じり細縫隙 層～中縫隙を多く含む	14: 第10面	緑色シート起じり細縫隙 動植物多々含む
4: 第4面	同上	15:	オリーブ灰色～中性～中性～灰オーバー色 細縫隙の互疊
5: 第5面	同上	16:	オリーブ灰色～中性～中性～灰オーバー色 細縫隙の互疊
6:	オリーブ灰色細縫隙～細縫隙 小縫隙含む 上部に粗粒の粘土ブロックが明瞭	17: 第11面	オリーブ灰色細縫隙起じりシート 下部に死骸層含む (太字はやや粗目質)
7:	同上	18: 第12面	オリーブ灰色細縫隙 下部に死骸層含む (太字はやや粗目質)
8:	オリーブ灰色細縫隙～細縫隙 小縫隙含む 上部に粗粒の粘土ブロックが明瞭	19:	同上
9:	同上	20:	死骸層～細縫隙
10: 第7面	オリーブ灰色土 层～中縫隙を多く含む		
11: 第8面	同色土 動植物多々含む		

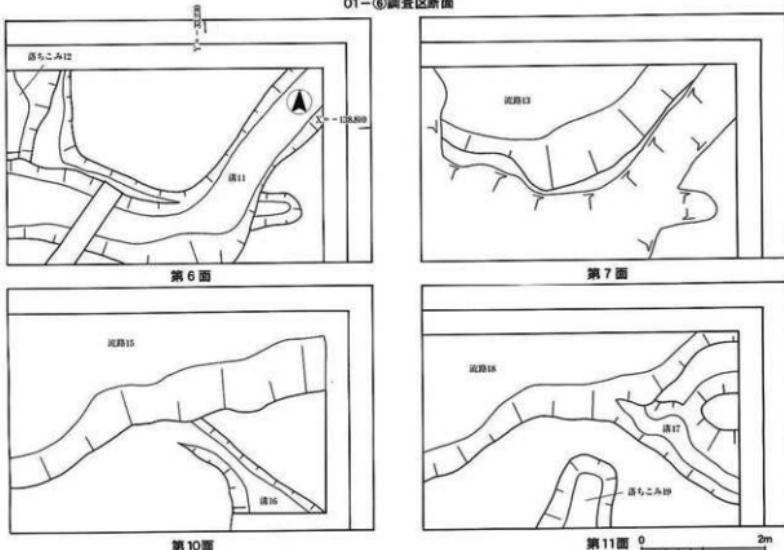
01-⑥調査区断面



第15図 許良郡条里遺跡 01-④・⑤調査区断面図

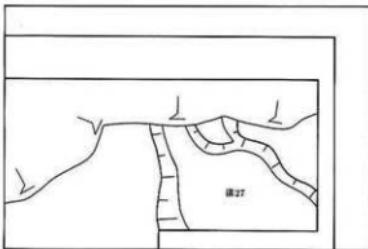


01-④調査区断面

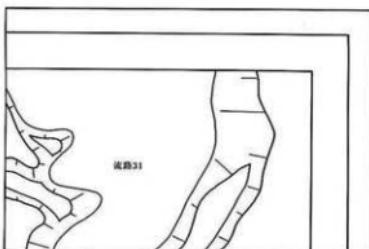


01-④調査区平面

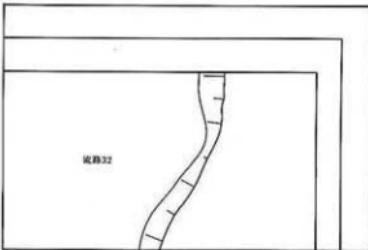
第16図 講良郡条里遺跡 01-④調査区平面図



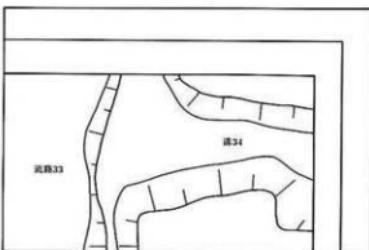
第12面



第13面

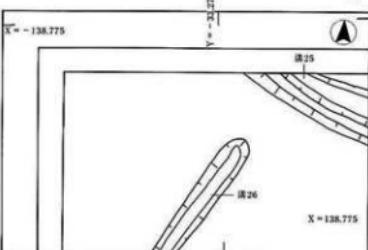


第14面

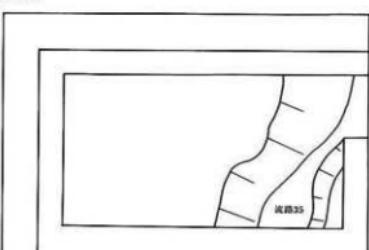


第15面

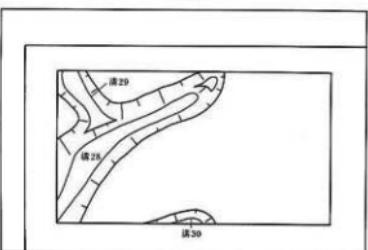
01-④調査区平面



第3面

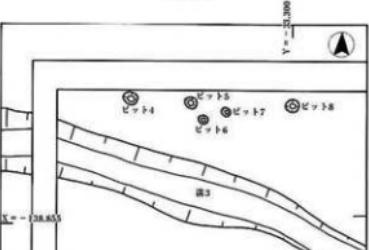


第13面



第9面

01-⑤調査区平面

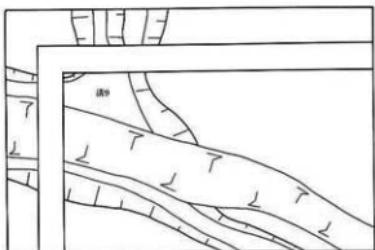


第4面

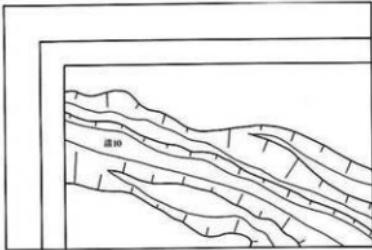
01-⑥調査区平面

0 2m

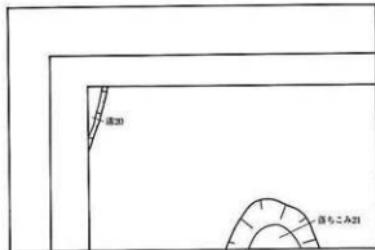
第17図 講良郡条里道路 01-④～⑥調査区平面図



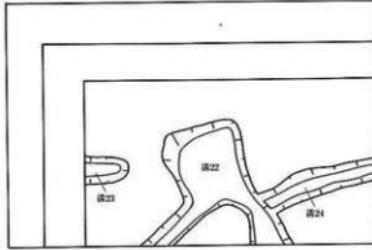
第5面



第6面



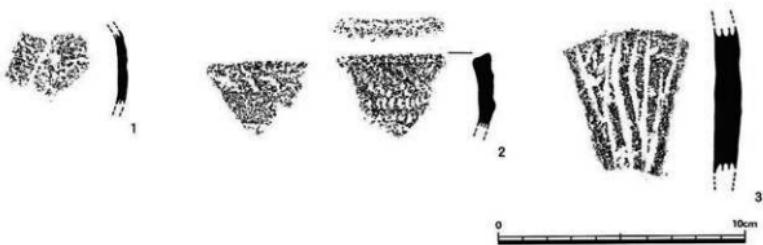
第15面



第16面

01-⑥調査区平面

0 2m



01-⑤調査区出土遺物

第18図 諸良郡条里遺跡 01-⑥調査区平面図・01-⑤調査区出土遺物実測図

## 《参考文献》

- i 「大阪文化財分布図」1996 大阪府教育委員会
- ii 「諸良郡条里遺跡発掘調査概要Ⅰ」1989 大阪府教育委員会
- iii 「諸良郡条里遺跡発掘調査概要Ⅱ」1991
- iv 「諸良郡条里遺跡発掘調査概要Ⅲ」1992
- v 「長保寺遺跡」1993 寝屋川市教育委員会
- vi 「高宮八丁遺跡」1987 寝屋川市教育委員会
- vii 「高宮八丁遺跡Ⅱ」1992
- viii 「更良岡山遺跡発掘調査概要」1992 大阪府教育委員会
- ix 「寝屋川市史 第一巻考古資料編」1999 寝屋川市史編纂委員会



## 第2節 小路遺跡

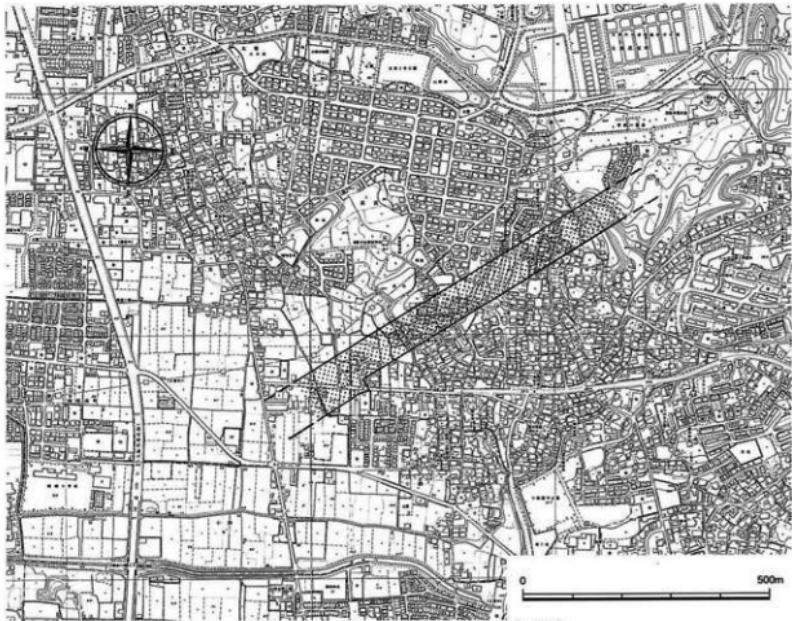
### 1. 調査地の立地と調査方法

当調査地は寝屋川市大字小路から国守町にかけて、北東から南西に幅約80m×全長約800mにわたる。調査区南西より約100mまではT.P.10m前後の南西へと傾斜する扇状地性微高地となっており、このあたりは旧河内湖の北岸にあたっている。以東では生駒山西麓から派生し、北は京都府八幡市の八幡（男山）丘陵、南は四条畷市南野丘陵まで広がる広大な丘陵、それに伴った谷を含む一帯である。

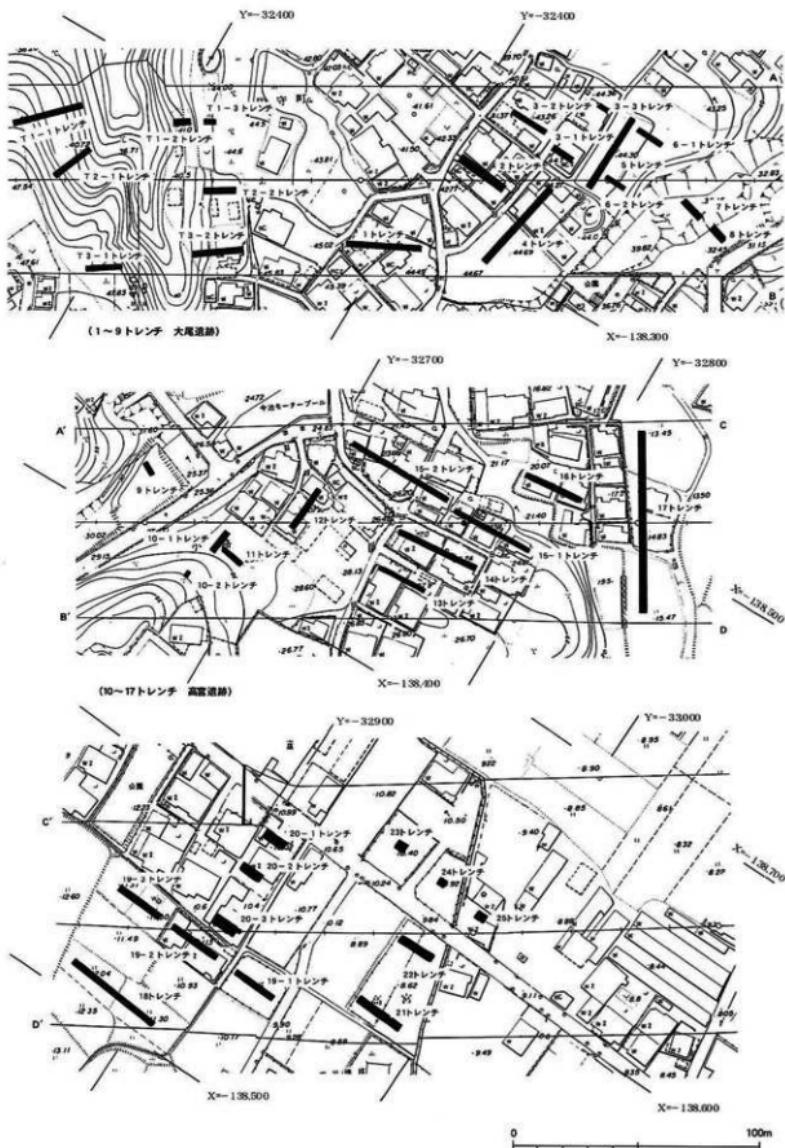
小路遺跡は1977年、当時小学生であった児童によって発見された遺跡である。水田耕作土から弥生時代後期の土器片が採取されている。一方南西部では市教育委員会によって地表下0.5~0.9mの間で茶褐色粘質土より庄内期前後の遺物の出土が確認されている。当調査区の北西には高宮遺跡、国指定史跡高宮廃寺跡が近接している。高宮遺跡は旧石器時代～縄文時代、古墳時代～平安時代にわたる複合遺跡である。高宮廃寺跡は白鳳時代に創建され、平安時代に廃絶、鎌倉・室町時代に延喜式内社大社御祖神社の神宮寺として再建された寺院跡である。

当調査区は小路遺跡はもとより、高宮遺跡や高宮廃寺との関連、旧河内湖岸周辺の集落跡なども想定される地域である。

現在の1~6トレンチを配置した丘陵上は、住宅地として造成されていた土地と、田畠として耕作されていた土地が入り混じっている。以前は、この丘陵上一帯は田畠が広がっていた。所々に溜池を配置



第19図 小路遺跡 調査地位図 (S=1/1,000)



第20図 小路道路 トレンチ配置図 (S=1/2,000)

し、水源を確保していたようである。10~16トレンチを配置した丘陵上では現在、住宅地として造成された土地である。それ以前、この辺りでは茶畠が営まれていたようであり、住宅地として造成されたのは約50年前である。その際、16トレンチやや南で、地表より約2m下から直径10cm前後の素焼きの皿が多数掘り出されたという証言を得た。17~25トレンチを配した扇状地性高地では現在、水田が緩やかな棚田となっており、一部で住宅が建設されていた。水田には式内大社御祖神社（高宮庵跡）南脇に位置する宮池から水路によって水を引き入れている。

今回の調査では合計28ヶ所のトレンチを調査区内に予定していたが、地形や水路などの関係上、トレンチを分割して設定した部分もあった。そのため、合計41ヶ所でのトレンチ調査を実施した。なお、分割したトレンチには基番号に枝番号を付したトレンチ番号とした。

調査は機械によって表土・搅乱を除去し、人力で掘削、遺構検出を行なった。機械の進入路が確保できないトレンチについては、全て人力による調査を行なった。また、各トレンチには2点の座標を測定して取り付け、位置の測定を行なった。

## 2. 調査成果

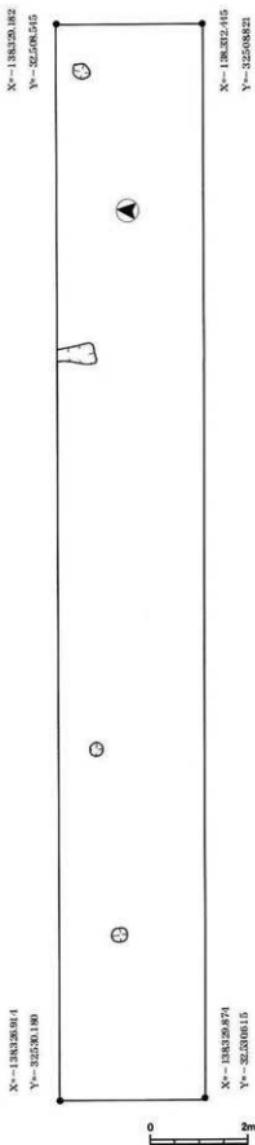
### 1 トレンチ

T.P.44m付近にあたり、丘陵上に位置する。調査区の東端に設定した30×2mのトレンチである。トレンチの中央部にはブロック塀が埋没しており、これを境界として以東は盛土と搅乱が確認された。この盛土の下部にはヘドロ状の堆積物が確認されたため溜池であったと思われ、盛土は住宅建設に伴う土地造成時に埋め立てたものと思われる。

トレンチ中央のブロック塀以西では表土と搅乱を約1~1.5m掘削した。表土は約25cmあり、以下は約30cmの褐色土と約20cmの黄褐色土の遺物包含層と思われる層が堆積している。この層から弥生土器片（第24図1・2）が出土したが遺構は確認されなかった。以下は地山層である。

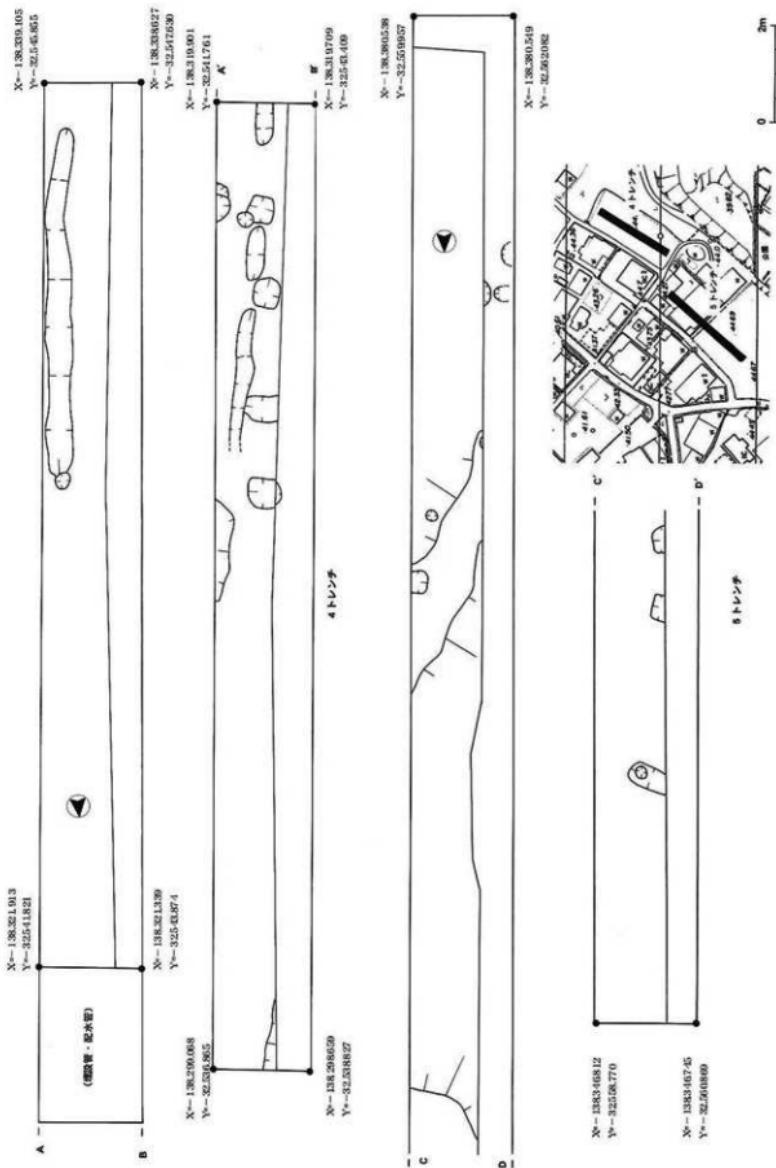
### 2 トレンチ

1トレンチと同じ丘陵上から東の谷に傾斜するT.P.43m付近で22×2mのトレンチを南北に設定した。現地表面より約1.5m掘削したが、上部は住宅解体時の搅乱であった。

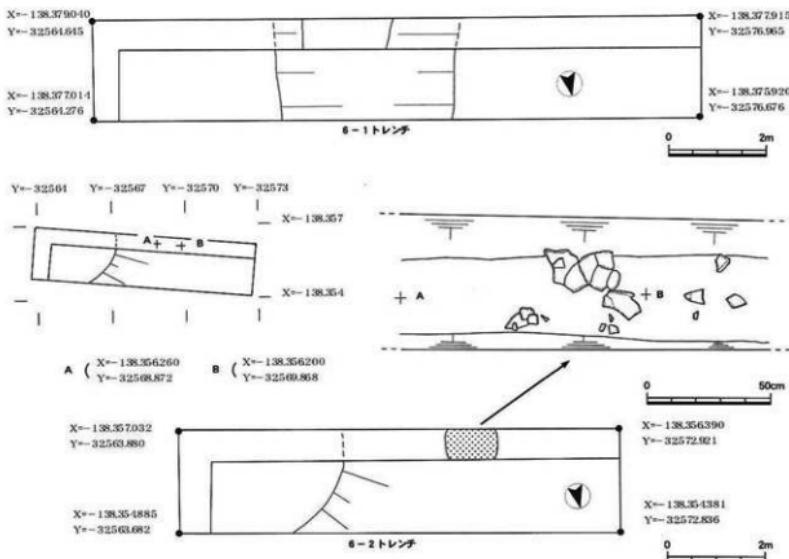


第21図 小路遺跡 2トレンチ  
遺構検出状況図 (S=1/100)

第2節 小路道路



第22図 小路道路 4・5トレント構造状況図 (S=1/100)



第23図 小路遺跡 6トレンチ造構・土器検出状況図 (S=1/100・1/20)

東に傾斜する東端部分で、褐色の整地土もしくは遺物包含層と思われる土層が20cmの幅で確認された。遺物は土器片が少量出土した。なお、地山直上でピットが数基確認された（第21図）。

### 3 (3-1～3-3) トレンチ

同丘陵上に位置し、T.P.44～43m付近に位置する。3-1トレンチは10×2mを設定した。このトレンチ内には住宅の基礎が残っており、結果的には幅1m分を調査した。現地表面から約20cmの表土下には旧耕作土が約15cmあり、以下は地山層にあたる。造構としてはトレンチ東に幅2m以上の溝状のものを確認したが遺物は確認されなかった。

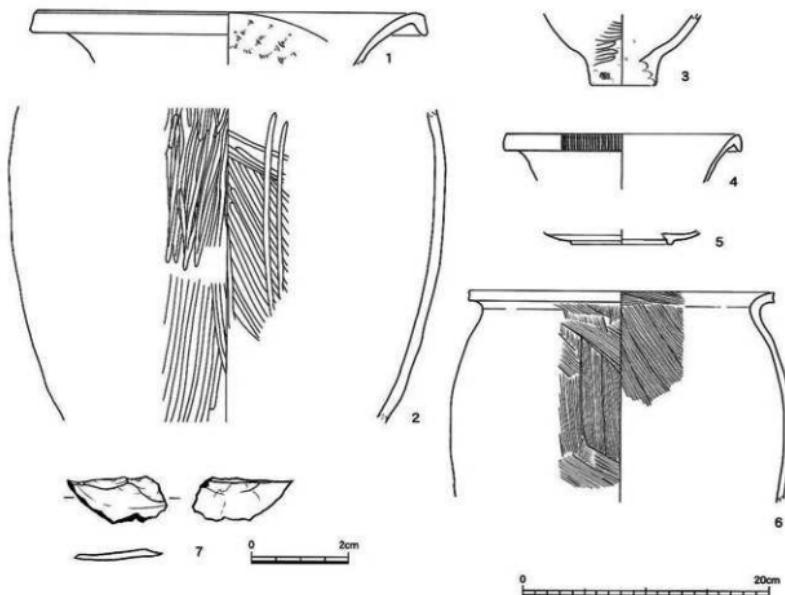
3-2トレンチは15×2mを設定した。表土と擾乱を除去した段階で整地土を確認。地山は東の谷に向かって緩やかに傾斜している。造構・遺物は確認されていない。

3-3トレンチは4×2mを設定した。表土と整地土層を約40cm掘削すると地山である。

これら3トレンチの付近は住宅建設時の削平と整地土、解体時の擾乱が非常に多く見られた。

### 4 トレンチ

同丘陵上に位置し、T.P.44m付近にある。調査区中央から北端に向かう南北方向に41×2mを設定した。現地表面から約30cmの盛土があり、北側トレンチでは以下に旧耕作土が約20cm見られた。旧耕作土下は薄い整地土と思われる層が見られるが、すぐに地山層に達する。北側トレンチの北側では整地土層下に暗褐色土層の堆積が見られ遺物包含層と思われる。このトレンチからは遺物の出土は少なかったが、土師器片などが少量見られ、造構も確認された。造構は、ピットや土坑、南北方向に走る溝などがある。ピットは一片約60cmの隅丸方形のもので、等間隔とは言いがたいが、直線的に4基並ん



第24図 小路遺跡 1・6・T1-1-1トレンチ出土遺物実測図 (S=1/4・1/1)

だ状態で確認されている（第22図）。

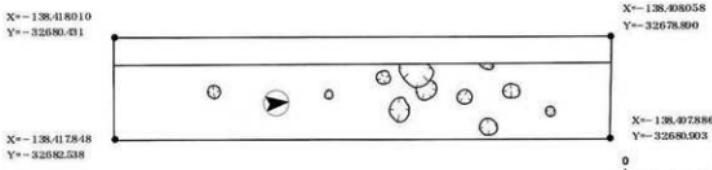
### 5 トレンチ

同丘陵上の西の谷へと傾斜する手前に位置し、4トレンチを南へ延長した辺りである。34×2mのトレンチを設定した。トレンチ中央部の現地表面から約20cm下で厚さ30cm・幅10mを超える溝状の落ち込みを検出。また、トレンチ北側でも幅10mを超える落ち込みを検出した。これらの溝や落ち込みは耕作により上部が攪拌されている。しかし、トレンチ南の落ち込み下にはピットが存在していることから、遺物包含層が攪拌を免れた部分とする可能性も残る。以下は地山層となる。検出されたピットは直径が20～60cmの円形や一片が約50cmの隅丸方形のものが数基あり（第22図）、側溝で確認すると深さは約40cm以上のものもある。遺物の出土は少なく、側溝から土師器小片が少量出土した。

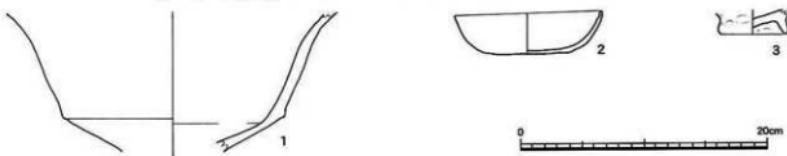
### 6 (6-1-6-2) トレンチ

同丘陵上に位置し、西の谷へと傾斜する位置にあたる。6-1トレンチは13×2mを東西方向に設定した。表土下西に向かって堆積しており、溝状の遺構（第23図）が確認された。この溝状の遺構から、弥生土器片（第24図3）が確認されたが、遺構の広がりは不明である。

6-2トレンチは10×2mを6-1トレンチに平行するように北側に設定した。このトレンチの中央部から西の谷へと傾斜していく落ち込みが検出された。トレンチの側溝掘削段階で、落ち込みの埋土上部から須恵器片、肩幅最下部周辺から弥生土器片（第24図4・6）がまとまって検出されたため（第23図）、側溝の掘削を中止し、側溝の西端のみを約30cm掘り下げたが、落ち込みの底を確認するには至っていない。廃土中からではあるが青磁皿小片（第24図5）を探取した。



第25図 小路遺跡 10 (10-1) トレンチ造構検出状況図 (S=1/100)



第26図 小路遺跡 10 (10-1) トレンチ出土遺物実測図 (S=1/4)

#### 7・8・9トレンチ

T.P.35~27m付近に位置し、1~6トレンチを設置した丘陵の西側斜面上に位置するトレンチである。7・8トレンチはそれぞれ11×2m・9×2mのトレンチで、旧地形の斜面を削り、若干の平坦面を造成していると思われる整地土層を確認。7トレンチでは以下は地山層であるが8トレンチでは約2~2.5m掘削したが地山を検出するには至っていない。遺物は8トレンチから土器小片を1点確認した。

9トレンチは9×2mのトレンチで、地表面より3m程度掘り下げたが、コンクリート片を含む残土が多く堆積しており、地山を確認することはできなかった。

#### 10 (10-1・10-2) トレンチ

1~6トレンチを設置した丘陵上から西側の谷をはさんだ丘陵上のT.P.30m付近に位置する10×2mのトレンチである。10-1トレンチは表土を約30cm掘削した段階で地山を確認した。地山面からは数基のピットを検出した（第25図）。遺物は土師器杯のほぼ完形品（第26図2）が地山直上で1点出土し、他は破片ではあるが土師器の高壺など（第26図1・3）が出土した。

10-2トレンチは10-1トレンチを北に延長した位置に2×2mのトレンチを設置した。表土を約20cm掘削すると地山を確認。遺構・遺物は確認されなかった。

#### 11トレンチ

10トレンチのすぐ西に10×2mで東西に設置した。表土を東部で約30cm、西部で約2cm掘削した段階で地山を検出。南北に走る幅80cmの溝を検出したが遺物は確認されなかった。

#### 12トレンチ

10・11トレンチを設定した丘陵を約20m南に下ったT.P.29~28m付近で南北に20×2mを設置した。このトレンチ周辺は2段に土地造成がなされ地形が大きく改変されており、南から約8mの地点で高低差約1.5mの段になっている。表土を段の北側（上段）では約30cm、南側では約5cm掘削した段階で地山を確認。所々に住宅解体時の攪乱が見られるほか、遺構・遺物は確認されなかった。

#### 13トレンチ

T.P.27m付近で丘陵の南西側先端部に位置する。トレンチは20×2mを設定した。上部は住宅解体

時の擾乱を受けており、約30cm下は地山であった。遺構・遺物は確認されなかった。

#### 14トレンチ

13トレンチの南側で約2m下がった地点に35×2mのトレンチを設定した。トレンチは丘陵斜面をやや南に下ったT.P.26m地点である。

トレンチの中央より東側がやや高く、住宅解体時の擾乱を受けており、盛土が約1m確認され、西側は約20cmの盛土があった。盛土以下は地山である。遺構・遺物は確認されなかった。

#### 15（15-1・15-2）トレンチ

15-1トレンチはT.P.24m付近に位置する南向き斜面の造成地にあたり、35×2mのトレンチである。表土と擾乱を除去すると褐色砂層が確認されるが東へ27m付近ではほとんど見られなくなる。この褐色砂層以下は茶褐色の遺物包含層で、厚さは不均等であるが、北西から南東に向かって厚く堆積している。更に、遺物包含層を除去すると、地山となっている。地山直上で、ピットや土坑などが密集した個所と希薄な個所に分かれて検出された（第27図）。遺物は遺物包含層内よりサヌカイト剥片（第28図10）、弥生土器片、土師器片、須恵器片、瓦器片など（第28図1～4・6～9）が出土している。

15-2トレンチはT.P.23m付近に位置し、15-1トレンチの東側に延長した45×2mのトレンチである。表土と擾乱を除去した段階で東側はすぐ地山層であった。西方では表土層の下に褐色～暗褐色の遺物包含層が最大約40cmあったが、トレンチ北側（斜面上方）では15-1トレンチ同様にほとんど厚みがない。

遺構は遺物包含層を除去した段階でピットや土坑、溝などが検出された（第27図）。トレンチ東側の遺構が密集している個所では直径60cm前後のピットが約1.5m間隔で並ぶように検出されたため、南北方向の広がりは不明であるが建物などの施設が考えられる。

遺物は土師器片、須恵器片、瓦器片など（第28図5・11～24）破片を数多く出土した。

#### 16トレンチ

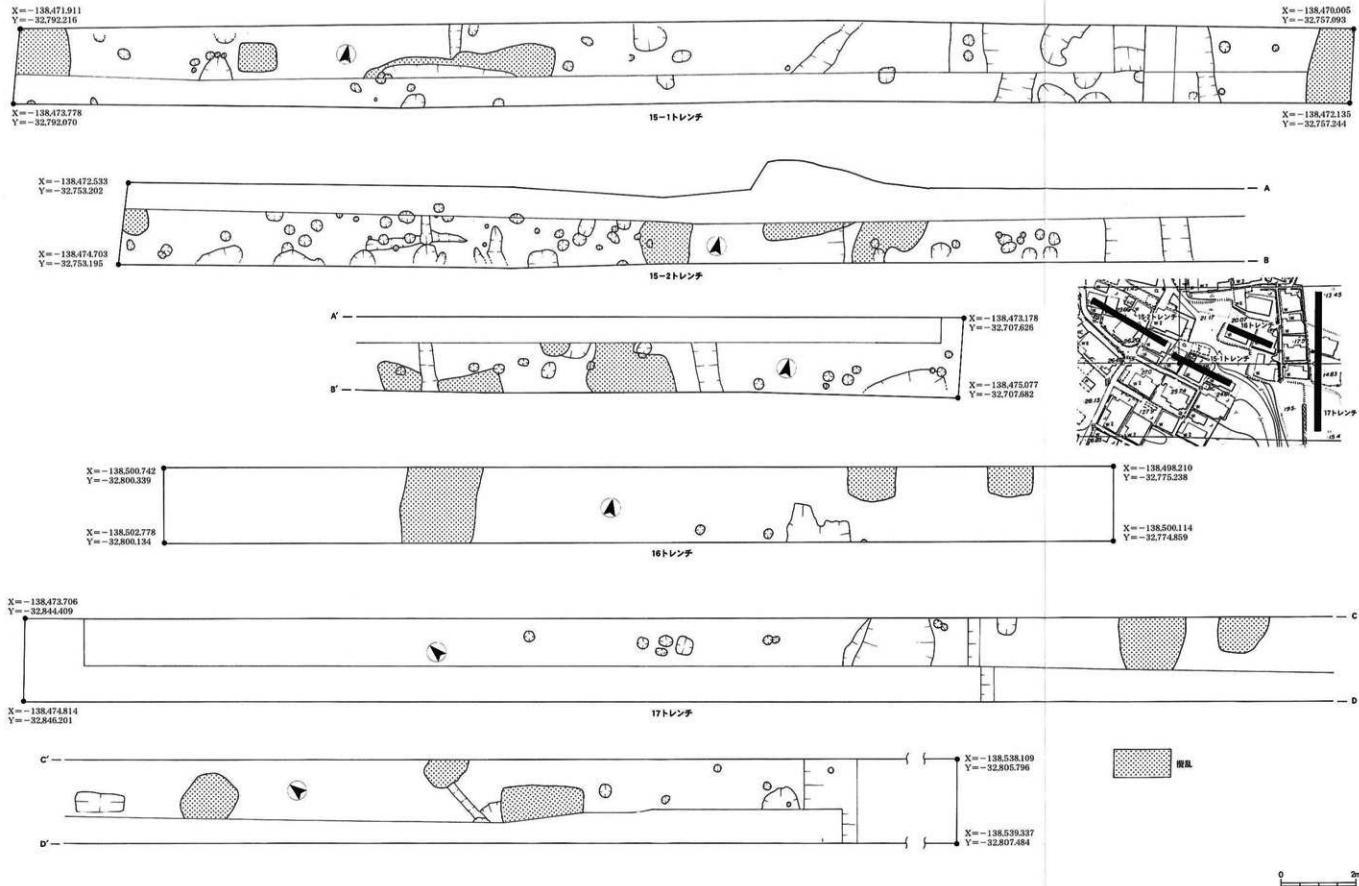
15トレンチの南側でT.P.20m前後の地点に16×2mのトレンチを設定した。住宅解体時の擾乱がひどく、盛土と擾乱が最大約60cmあり、以下は地山層である。一部で、遺物包含層らしき茶褐色の層を確認した。遺構は土坑状のものと、ピットを数ヶ所確認することができた（第27図）。擾乱によって上部が切られているため、規模は不明である。

遺物は図化し得ないものも含めて土師器片、須恵器片、瓦器片数点（第28図25）が出土した。

#### 17トレンチ

計画路線を横断するような形で、70×2mのトレンチを設定した。このトレンチはT.P.15～13m前後の3段に造成された地形となっており、小さな一つの尾根上に位置する。この地点から以東は生駒山麓から派生した丘陵となる。トレンチの下段（南側）は約20cmの現代耕作土層と床土層以下はすぐに地山層が検出され、遺構・遺物は検出されなかった。

上段（北側）は現代耕作土と床土が約15～20cmあり、以下は整地土層と思われる盛土が20～30cmみられた。さらに下層は地山層となるがこの層の上には薄く遺物包含層へと続く層が堆積している。地山層は上段の中央部より南側からなだらかに傾斜し、整地土層下との間に遺物包含層の厚さが増していく。遺物包含層は中段でも見られ、やや南側に傾斜するように堆積している。遺物包含層は上段と中段の段によって途切れたり、中央部付近が住宅解体時の擾乱で分かれにくくなっていることや、トレンチの幅が2mのために南北方向への広がりは不明であるが、今回設定したトレンチより南北方向に地



第27図 小路遺跡 15~17トレンチ造構検出状況図 (S=1/100)

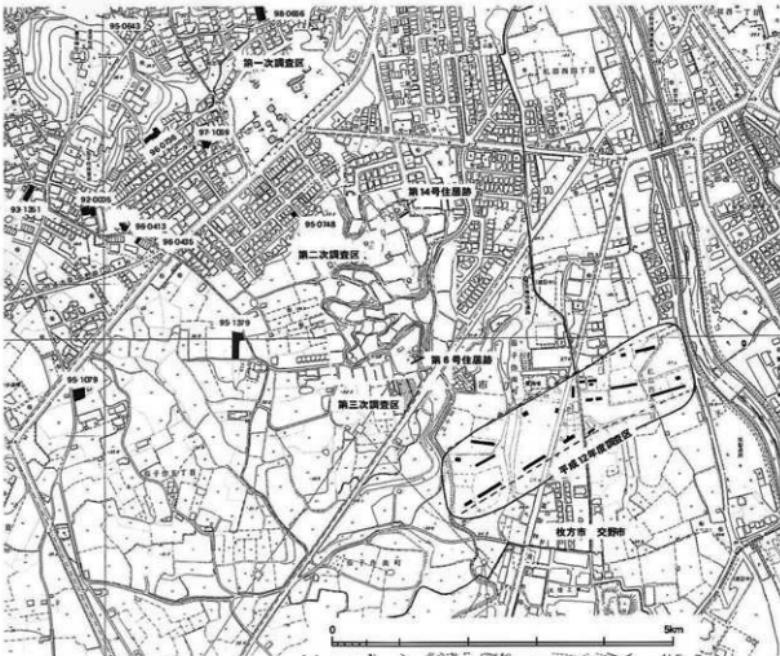
## 第4節 茄子作遺跡

### 1. 位置と環境

茄子作遺跡の調査対象地は、交野台地に続く茄子作台地から天野川側に並行する形で突出した小丘陵の一つを東西方向に横断する区間である。西は、弥生時代後期～古墳時代中期集落・墓地が検出された茄子作遺跡とは小谷を挟み、東は天野川の河川敷に続く。小丘陵上には旧東高野街道が、本区域ではほぼ南北方向に通じ、かつ、現在の市境になっている。西が枚方市、東が交野市である。枚方市側の茄子作集落は、茄子作台地の北半、さらに高所の台地上を中心としてあり、調査地西にあたる台地南半はこの集落の耕作地域である。交野市側の天野川までの地域も、右岸北東部の私部集落の耕作地域である。

以上のような集落と耕作地との関係は、近世期以降の本調査地には集落がなかったと考えられている。ただし、それ以前は、調査地北方に元享年間（1321年）の融通念佛宗中興法明上人ゆかりの「本尊掛松遺跡」が所在するように、東高野街道沿いの信仰や休憩所のような施設の存在は推測されていた。茄子作遺跡の西南部に隣接する茄子作下浦遺跡もそうである。下浦遺跡は、中世（15世紀含む）の掘立柱建物・土坑・溝などが検出されている。したがって、周辺部の今後については、茄子作台地を中心とした遺跡の立地、変遷などの再検討が望まれるところである。

なお、地形の関係上、調査地周辺の耕作地は、枚方市側、交野市側、ともに旧星田村の余水を利用す



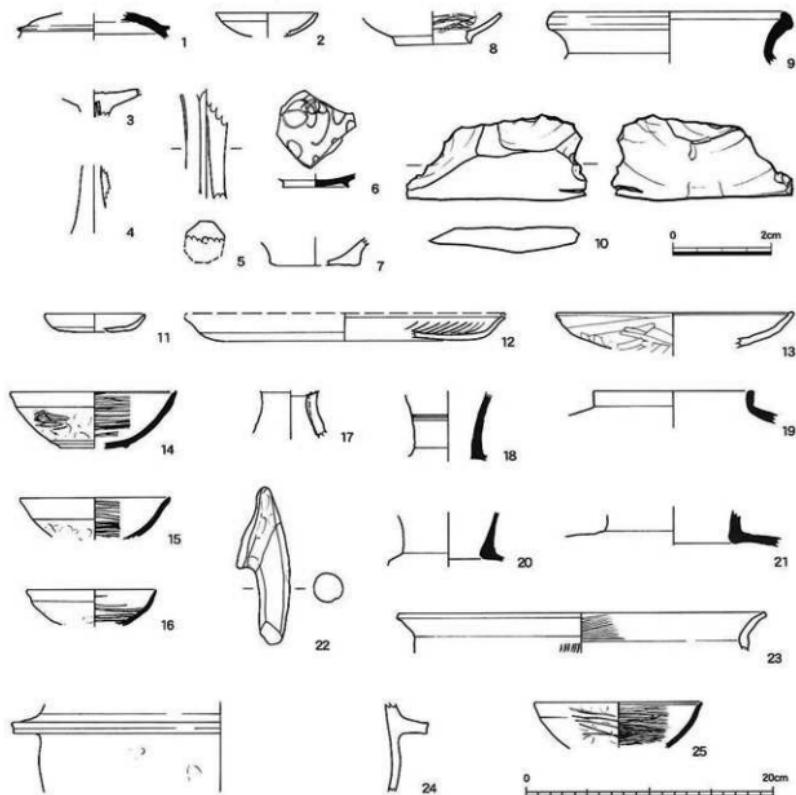
第49図 茄子作遺跡周辺既往調査区位置図

る形にはなっている。したがって、調査地周辺部は、私部、茄子作、星田の取り合い地でもあったのだろう。当地は古代以降、渡来人、交野郡衙に関わる三宅（屯倉）山、朝廷の交野牧、石清水八幡宮領など周辺部の歴史も彩りが多い地域でもある。

(井藤)

表1 茄子作遺跡 調査一覧表

調査名	住所	期間	原因	面積	時代	遺構・遺物	文 獻
1 第1次調査	大字茄子作 607	S49.3~8	民間宅地造成	8,000m <sup>2</sup>	弥生後期～ 古墳時代初期 中期	堅穴式住居 14 方形周溝墓 1 土塙群 大湯 井戸状遺構	枚方市文化財研究調査会「枚方市における遺跡調査概況」 1968年～1976年 1976.6 瀬川芳樹「弥生文化と農耕」「大阪府史」第一巻 1978 枚方市文化財研究調査会・枚方市文化局合編 『第四回枚方カンジョウ』、「古代日本」学の参考 一冊内の古跡を探るために』 1980
						堅穴式住居込み 13世紀の遺物	枚方市教育委員会 「文化出版ハンドブック」枚方の遺跡と文化財」 1985
2 第2次調査	茄子作4丁目 1681	S52.6~ 53.3	民間宅地造成	38,000m <sup>2</sup>	弥生後期～ 古墳時代中期 中期	堅穴式住居 19 方形周溝墓	枚方市文化財研究調査会「枚方市文化財年報」 1980 枚方市文化財研究調査会 「枚方市における遺跡調査概況」 1976.6 宇治田和生「茄子作遺跡」第3号 1978 宇治田和生「茄子作遺跡(2)」 「地域文化誌まんた」第4号 1978 瀬川芳樹「枚方台地とその周辺」「大阪府史」第一巻 1978
						遺物のみ	
3 第3次調査 (NS-3)	茄子作4丁目 395-1,他	S61.11~ 12	民間宅地造成	2,000m <sup>2</sup>	弥生後期	堅穴式住居 1 圓周溝墓 1 土塙 1 堅穴式土壙破片 土師器・貝殻器	枚方市文化財研究調査会「枚方市文化財年報」 1987 枚方市文化財研究調査会「20年のあゆみ」 1998
4 GARD	茄子作4丁目 483,他(草)	S61.11	共同住宅	996.3m <sup>2</sup>	弥生後期	弥生後期土塙 保証のみ	枚方市文化財研究調査会「枚方市文化財年報」 1987
5 (立金) 61-0779	茄子作4丁目 4516	S62.4	個人住宅	323.64m <sup>2</sup>	即地山		枚方市文化財研究調査会「枚方市文化財年報」 1988
6 (立金) 61-0831	茄子作4丁目 665-127, 126	S62.4	個人住宅	70.62m <sup>2</sup>		~2m築り上内	枚方市文化財研究調査会「枚方市文化財年報」 1988
7 第5次調査 (NS-5)	茄子作3丁目 4607-3, 4625,他	S62.10~	宅地造成	/		谷地形のため 造構未検出	枚方市文化財研究調査会「枚方市文化財年報」 1988
8 (立金) 62-0573	茄子作4丁目 493-4	S62.11	個人住宅	52.25m <sup>2</sup>			枚方市文化財研究調査会「枚方市文化財年報」 1988
9 (立金) 62-0566	茄子作4丁目 499-64	S63.2	個人住宅	45.47m <sup>2</sup>		遺構・遺物なし	枚方市文化財研究調査会「枚方市文化財年報」 1988
10 第4次調査 (NS-4D)	茄子作4丁目 665-79	S63.4	民間宅地造成	665m <sup>2</sup>		遺構・遺物なし	枚方市文化財研究調査会「枚方市文化財年報X」 1989
11 (踏査) 第二京阪道路 予定地茄子作、 津田原駅		S63.8					枚方市文化財研究調査会「枚方市文化財年報X」 1989
12 (試掘) 88-0505	茄子作2丁目 134	S63.9	事務所付店舗	894m <sup>2</sup>		遺構・遺物なし	枚方市文化財研究調査会「枚方市文化財年報X」 1989
13 NS91-19 91-0522	茄子作3丁目 4642,他	H3.9	個人住宅	5m <sup>2</sup>			枚方市教育委員会 「枚方市埋蔵文化財発掘調査概要1991」 1992 枚方市文化財調査報告第26号
14 (試掘・立金) NS-20 91-0563	茄子作4丁目 665-40,他	H3.12	個人住宅	478.8m <sup>2</sup>		遺構・遺物なし	枚方市文化財研究調査会 「枚方市文化財年報13」 (1991年度分) 1994
15 (試掘・立金) NS-26 92-1288	茄子作4丁目 330-1, 331-1	H5.3	共同住宅	/		遺構・遺物なし	枚方市文化財研究調査会 「枚方市文化財年報14」 (1992年度分) 1995
16 NS93-29 91-1220(??)	茄子作1丁目 4612	H5.5	個人住宅	6m <sup>2</sup>			枚方市教育委員会 「枚方市埋蔵文化財発掘調査概要1993」 1994 枚方市文化財調査報告第28号
17 NS-30 93-0812	茄子作2丁目 H6.3	H5.12~	公共下水溝 工事	/		遺構・遺物なし	枚方市文化財研究調査会 「枚方市文化財年報15」 (1993年度分) 1995.12
18 NS95-40 95-0699	茄子作1丁目 4521	H7.10	個人住宅	1.60m <sup>2</sup>			枚方市教育委員会 「枚方市埋蔵文化財発掘調査概要1995」 1996 枚方市文化財調査報告第30集
19 NS95-41 95-0748	茄子作4丁目 499-73	H7.10	個人住宅	1.44m <sup>2</sup>			枚方市教育委員会 「枚方市埋蔵文化財発掘調査概要1995」 1996 枚方市文化財調査報告第30集
20 NS95-42 95-0643	茄子作1丁目 4521の一部	H7.11	個人住宅	3.01m <sup>2</sup>			枚方市教育委員会 「枚方市埋蔵文化財発掘調査概要1995」 1996 枚方市文化財調査報告第30集
21 NS96-46 96-0736	茄子作4丁目 665-124, 125	H8.10	個人住宅	1.5m <sup>2</sup>			枚方市教育委員会 「枚方市埋蔵文化財発掘調査概要1996」 1997 枚方市文化財調査報告第31集
22 NS97-48 96-1291(??)	茄子作4丁目 417	H9.9	個人住宅	7.3m <sup>2</sup>			枚方市教育委員会 「枚方市埋蔵文化財発掘調査概要1997」 1998 枚方市文化財調査報告第33集



第28図 小路遺跡 15・16トレンチ出土遺物実測図 (S=1/4)

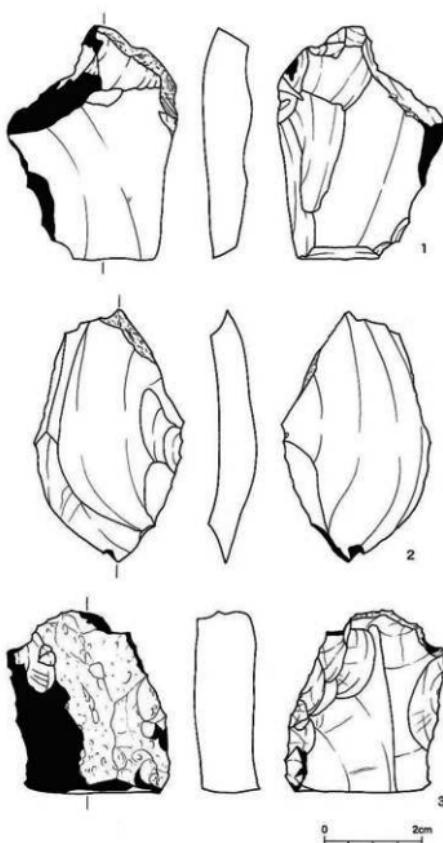
山層が緩やかに傾斜してゆく地点に堆積していると思われる。遺構は中段でもピットや土坑などが確認され（第27図）、遺物は遺物包含層内より旧石器時代のサヌカイト剥片、石核（第29図1～3）、土師器、須恵器、瓦質土器、瓦器、白磁など（第30図1～21）が出土した。

#### 18トレンチ

丘陵斜面下のT.P.12～11mにあたる現代耕作地に50×2mのトレンチを東西方向に設定した。現代耕作土及び床土が約20cmあり、下には整地土層が見られた。以下では全体が大きな流水堆積層で、トレンチの中央部には幅約5mの自然流路と思われるものが南北方向に走り、調査地の北側に位置する宮池の方向から延びていると思われる。このトレンチの整地土層から、弥生土器片、土師器片、須恵器片、瓦、瓦器、青白磁など（第32図1～19）が出土した。

#### 19（19-1～19-3）トレンチ

19-1トレンチは18×2mのトレンチで、現地表面以下50cm～1mに全面的に擾乱を受けていたが、部分的に現代耕作土層と床土層が残る。トレンチ東方で床土下に幅3.5m以上の自然流路を北東から南



第29図 小路遺跡 17トレンチ出土遺物実測図(1) (S=1/1)

## 20-(20-1~20-3) トレンチ

T.P.10m前後に位置し、東西方向に3本平行して設定した。

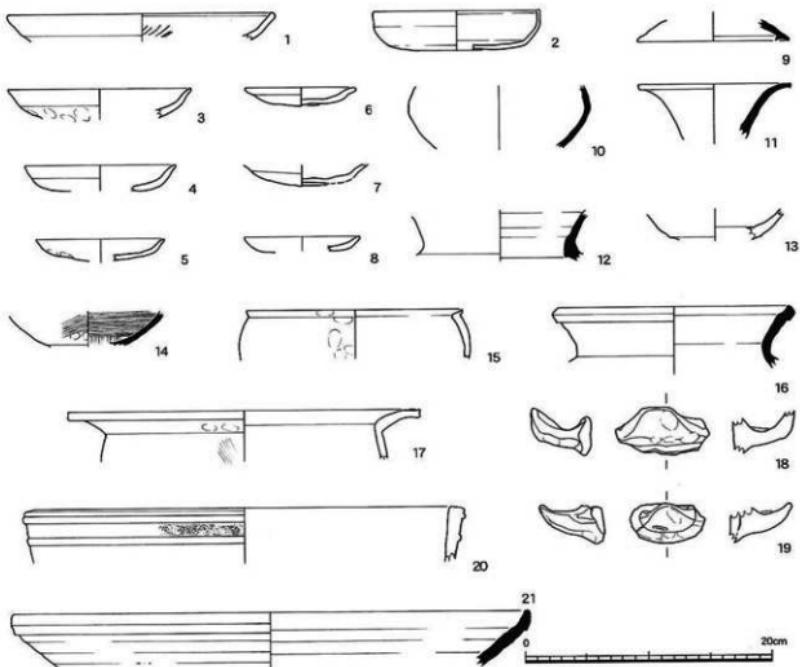
20-1 トレンチは南側に設定した13×2mのトレンチで南側の現道より約50cm下にあり、現地表面より1.5m下は住宅解体時の擾乱と盛土があった。調査は現地表面より最大2mまで掘削した。擾乱、盛土の下は旧耕作土が約10cm、床土層が約30cm堆積していた。以下には洪水層と思われる砂層がみられ、下部に黒色粘土層がわずかに見られた。この層は20-2・20-3トレンチでは自然流路と思われる溝の埋土であるが、20-1トレンチからは溝として検出されてなかった。

20-2 トレンチでは現地表面下約50cmで北東から南西方向の自然流路が検出され、流路の幅は1mを測るが上部は洪水砂で削平されているため本来の規模は不明である。遺物は土師器高坏片(第32図20)が出土している。20-3 トレンチでも現地表面より約60cm下で、北東から南西方向の自然流路が

西方向に検出した。また、トレンチの西に向かって整地土層が見られ、トレンチ西側で幅3m以上の自然流路を北東から南西方向に検出した。自然流路下には黄灰色と灰オリーブ色シルトが広がる。以下は緑灰色シルトと褐灰色粘土層の湧水層を確認。遺物は床土下より須恵器小片が1点出土した。

19-2 トレンチは23×2mのトレンチで、ここでも現代表土以下最大1.2mにわたり全体的に擾乱を受けている。擾乱の浅いところには現代耕作土層と床土層が残る。以下に黒色土器片、土師器片を少量包含する灰黄色の整地土を確認。トレンチ東方では幅2m以上の自然流路、トレンチの中央からやや東よりで幅1.5mの自然流路を共に北東から南西方向で検出した。その下にはにぶい橙から灰色の砂～シルト質の層が広がり、下層には青灰色と黒・灰色の湧水層を確認した。

19-3 トレンチは、20×2mのトレンチで地表面以下約30cmは現代耕作土と床土層である。下層に西側に傾斜して堆積している整地土層を確認。以下は黄褐色粘質土と砂礫の堆積層とその堆積時の主流れと思われる自然流路が数ヶ所認められる。その下層には緑灰色シルトと褐灰色シルト～粘土の湧水層である。



第30図 小路遺跡 17トレンチ出土遺物実測図（2）(S=1/4)

検出された。流路の幅は2mを測るが上部は整地土層によって削平されているため、本来の規模は不明である。遺物は洪水砂上面にぶい黄色土内より、土師器片、須恵器片が確認され、また、下層の褐灰色粘質シルト層から、縄文土器片（第32図21）が1点出土している。

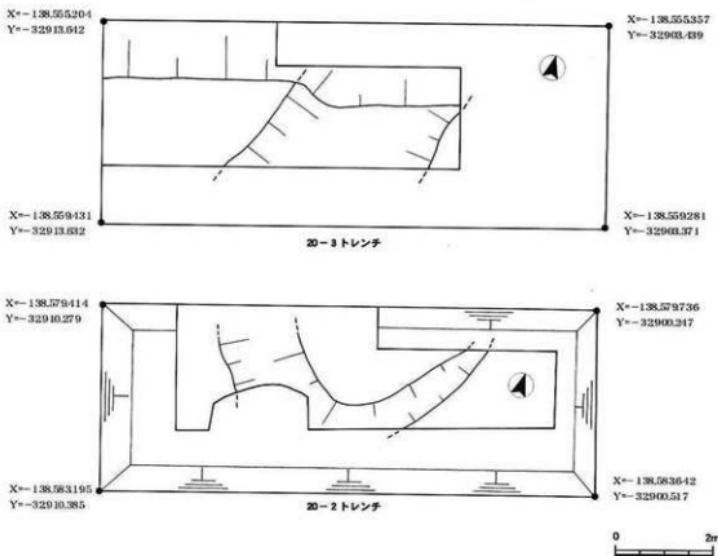
#### 21トレンチ

T.P. 8m前後の地点で東西方向に20×3mのトレンチを設定し、現地表面より1.8mまで掘削した。厚さ約25cmの現代耕作土と床土があり、以下は黄褐色土、褐色土、暗褐色土が堆積し、この暗褐色土をベースとする面より自然流路が2本検出されている。流路はトレンチの西端とほぼ中央部で検出され、最深部までは約25cmを測る。暗褐色土層下は青灰色砂質シルト層が堆積する。この層は洪水堆積層と思われ、流木などと共に土器が出土するが、今回は1.8mまで掘削したが溝の底は確認できなかった。

出土土器は床土、黄褐色土、褐色土、暗褐色土から、中世のものと思われる土師器片、須恵器片、陶磁器片などが少量出土し、最下部層の青灰色シルトからは奈良時代の土器が出土した。

#### 22トレンチ

東西方向に21トレンチと平行して15×3mのトレンチを設置し、現地表面より1.7mまで掘削した。厚さ20cmの現代耕作土と床土、以下は黄褐色土、褐色土、暗褐色土、黒色粘土が堆積し、この暗褐色土をベースとする面より溝が2本検出される。溝はトレンチの西端とほぼ中央で検出され、最深部までは約20cmを測り、暗褐色土層下は青灰色砂質シルトが堆積し、21トレンチとほぼ同じ状況である。



第31図 小路遺跡 20(20-2・20-3) トレンチ造構検出状況図 (S=1/100)

出土遺物は黄褐色土、褐色土、暗褐色土から、中世のものと思われる土師器片、須恵器片、陶磁器片などが少量出土した。

### 23~25トレンチ

4×4mのトレンチを3ヶ所で設置した。23トレンチは現地表面より1.3mの盛土があり、旧耕作土、床土、整地土、21・22トレンチの自然流路から続く黒褐色・黄褐色流水堆積層、青灰色粘土の順に堆積し、2.6mまで掘削した。24・25トレンチも同じような堆積であるが、西方向ほど浅い。

遺構・遺物はないが、下部の青灰色粘土が21トレンチの縄文土器出土層と同一と考えられる。

### T 1 (T 1-1~T 1-3) トレンチ

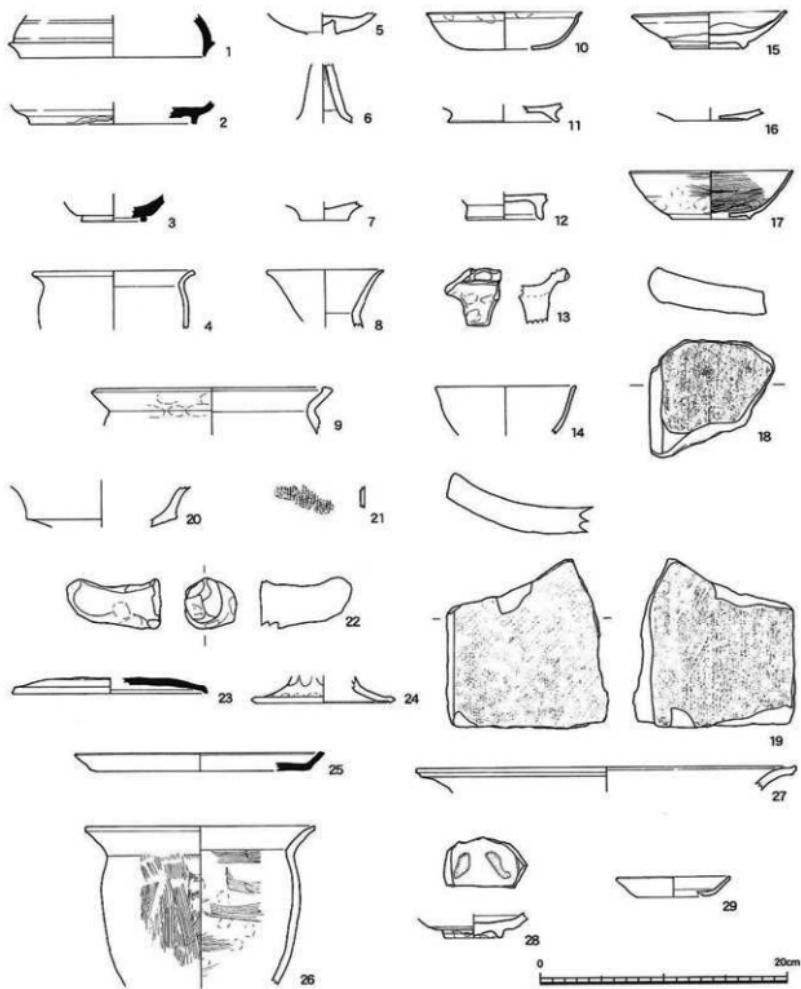
T 1-1トレンチは谷の北東部のT.P.44m~35mで谷へと傾斜する位置に29×2mで設置した。表土は竹藪の腐食土層で以下は基本的には地山である。

遺構はトレンチ東方から5m付近で、現地表面下80cmに幅約5mの溝状遺構を確認し、また、トレンチ西方から2m付近に現地表面から1.5m下で西へと落ちる落込みを確認した。

遺物は溝状遺構の断面から、サヌカイト剥片（第24図7）と土器片を確認したが、土器片は原型を留めていないものであった。また、落込みからも、土師器片1点を確認している。

T 1-2トレンチはT 1-1トレンチの南西部で、谷をまたいだT.P.44~42mに位置する7×2mのトレンチである。表土の腐食土層を除去すると、竹藪造成時の整地土と思われる層を確認。以下は地山で、遺物は整地土層より須恵器片を確認した。

T 1-3トレンチはT 1-2トレンチを西に延長した個所に設置した5×2mのトレンチである。表



第32図 小路遺跡 18・20 (20-2・20-3)・21トレンチ出土遺物実測図 (S=1/4)

土の腐食土層を20~30cm掘削した段階で地山を確認。遺構・遺物は確認されなかった。

#### T 2 (T 2-1・T 2-2) トレンチ

T 2-1 トレンチはT 1-1 トレンチから北に約20mの位置に設置した。谷の北東のT.P.46.5~38.5mに位置し、26×2mのトレンチである。表土の腐食土層以下は地山層であるが、東方から10m付近までアスファルトなどが深さ数mにわたり埋め立ててあったため、掘削を中止している。

T 2-2 トレンチはT 1-2・T 1-3 トレンチの北西約30mに16×2mのトレンチを設置した。

谷の西側で平坦に造成された土地でT.P.45m付近にある。現代表土以下約40cmまでは現代の盛土層・攪乱であった。それを除去すると、一部で地山層を確認できたが、深いところでは1.5mまで掘削しても、攪乱の底を確認するには至らなかった。遺構・遺物は確認されなかった。

#### T 3 (T 3-1・T 3-2) トレンチ

T 1・T 2 トレンチより更に谷の上流側に設定したトレンチである。

T 3-1 トレンチは谷の北斜面を上りきったT.P.48m付近に位置する。ここでは現在では畠となっていたところに、15×2mのトレンチを設定した。表土の耕作土層を除去した段階で整地土層を確認した。南西側へと傾斜する斜面を平坦に造成した際の整地土と思われる。以下、2mまで掘削したが、整地土層の底を確認することはできなかった。

T 3-2 トレンチはT 2-2 トレンチの北約30mに位置し、同じ平坦面上に21×2mのトレンチを設置した。現地形はトレンチ東から10m付近で1段上の地形となっている。この段の下側は攪乱のみで、1m掘削したが地山を確認するには至らなかった。段から西へ4m付近までは、旧耕作土を確認したが、更に以西では表土下は地山となる。なお、遺構・遺物は確認されなかった。

### 3.まとめ

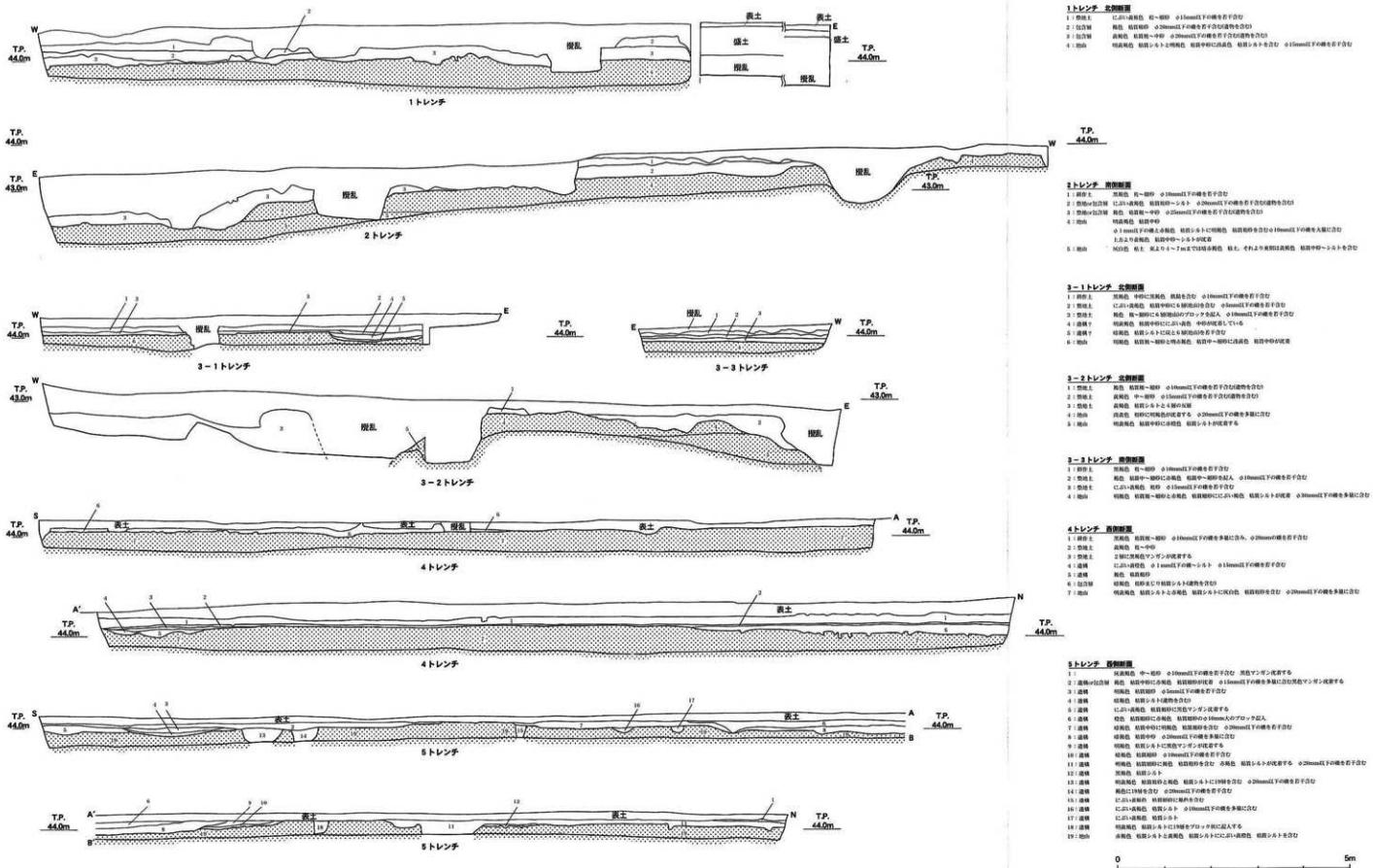
今回の確認調査は幅80×全長800mという長細い調査区である。この調査区では合計41ヶ所にトレンチを設定し、遺構・遺物の有無の確認に努め、その結果、大きく分けると3地区に分けることができる。

1つ目は1～6 トレンチを設定した丘陵上である。以前の田畠耕作時、住宅建設時の削平及び盛土、解体時の攪乱などが多いが、その削平をまぬがれ、遺構も残されていた。1 トレンチは包含層内より弥生時代中期の壺などが検出され、トレンチ周辺には遺構の存在が想定される。また、6 トレンチでは丘陵端部から西の谷に向かう地点である。6-2 トレンチでは西方向に向かう落込み状のものを検出し、肩部直下で弥生土器が出土した。2 トレンチは上部の攪乱が深いが、周囲にも広がって遺構が残されている可能性がある。4 トレンチではほぼ南北方向に走る溝と隅丸方形のピットなどが検出された。このピットはほぼ等間隔に4基並び、3間分を検出したこととなる。

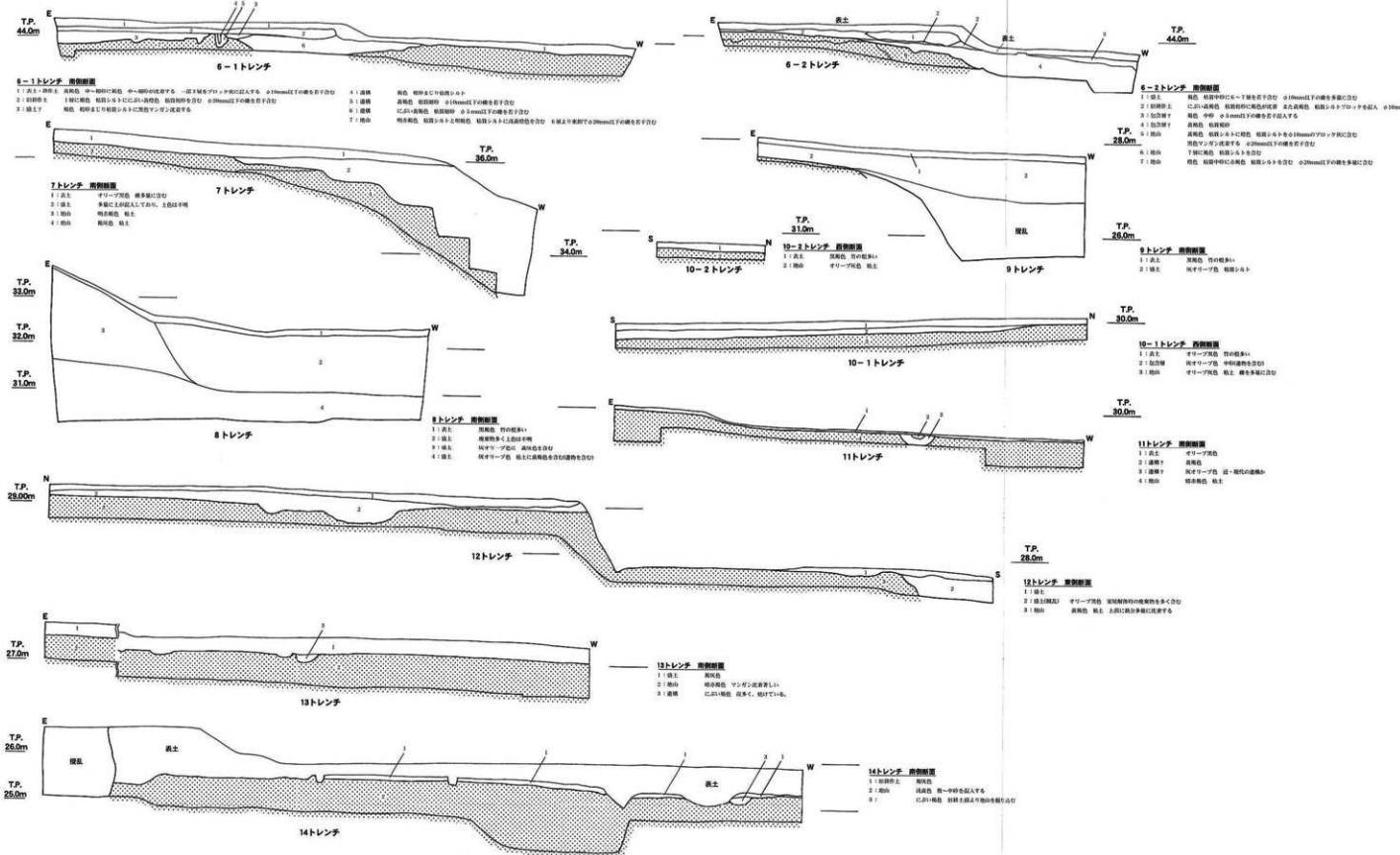
2つ目の地区は、10・15～17トレンチ周辺である。検出された遺構はピット、土坑、溝などがあげられる。特に15トレンチの東側では東西方向にピットが約1.5m間隔で5基（1基未検出の可能性がある）検出された。1棟であるならば、4間もしくは5間分を検出したこととなる。これらのピットはトレンチ内での側溝断面によると、比較的の良いものである。以上から、この上・中段には古代・中世の遺構が広がる可能性が高いが、周囲の田畠造成、中段は住宅が建設されていたこともあり、遺構自体がこの尾根のどの範囲まで残存するかは不明であるものの、15～17トレンチの北側には高宮遺跡や高宮庵寺跡が所在していることから、これらの遺構は近隣遺跡との関連性についても期待される。

3つ目の地区は丘陵縁辺部より以西に設定した18～25トレンチ周辺で、縄文前期から古代・中世にかけての土器が出土し、溝状のものが北東から南北方向に延びていた状況が確認できた。この辺り一帯は現代耕作土層・床土層・攪乱層以下、宮池方向からの自然流路及びそれに伴った流水堆積層が広がり、さらに下層にシルト～粘土が堆積している。宮池の堤が築かれる以前は谷川のような川が流れしており、調査区周辺は湿地となっていたようである。この流れは度々氾濫を引き起こし、整地土層からの出土遺物はそれにおし流されたものが混入したものと思われる。

（田中・植村）

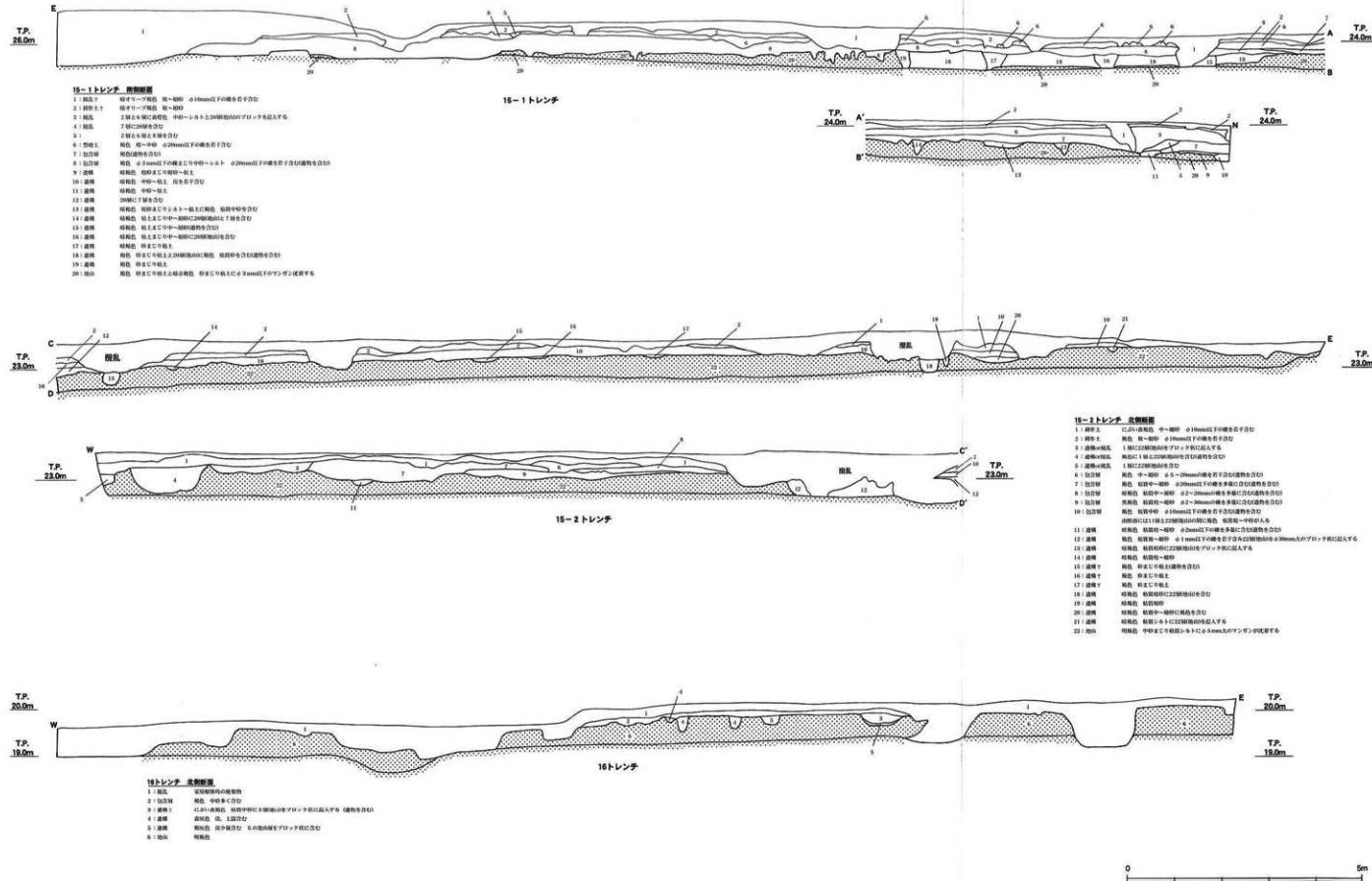


第33図 小路遺跡 1～5トレンチ断面図 (S=1/80)

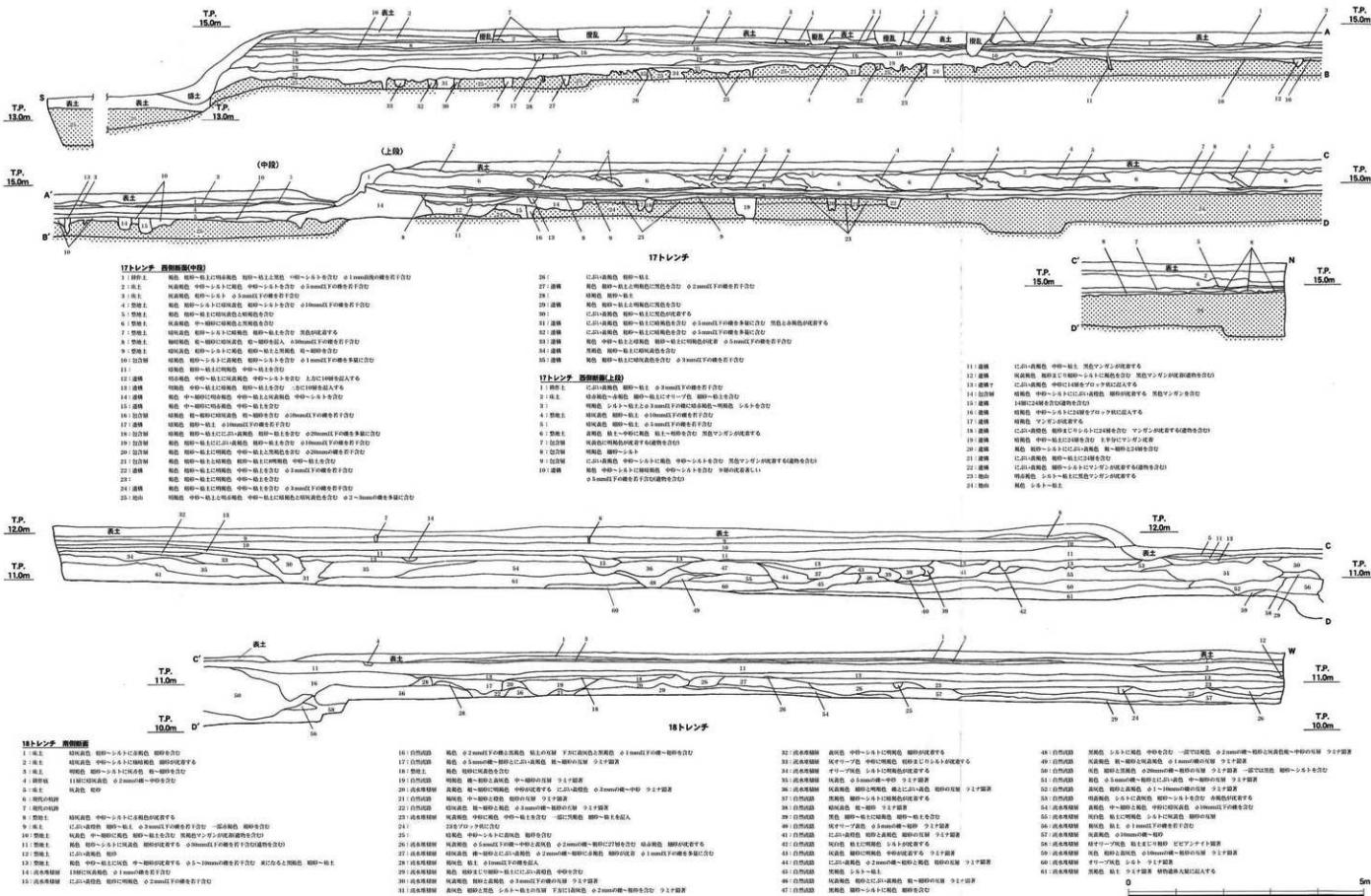


第34図 小路遺跡 6~14トレンチ断面図 (S=1/80)

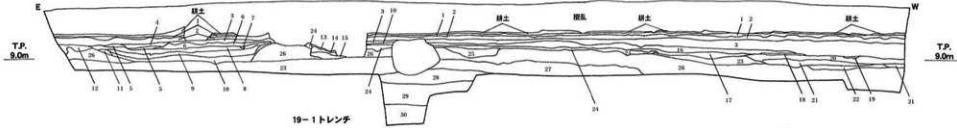
0 5m



第35図 小路遺跡 15~16トレンチ断面図 (S=1/80)

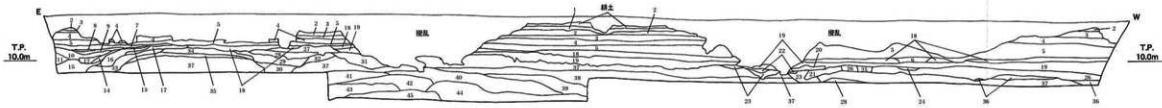


第36図 小路遺跡 17・18トレンチ断面図 (S=1/80)



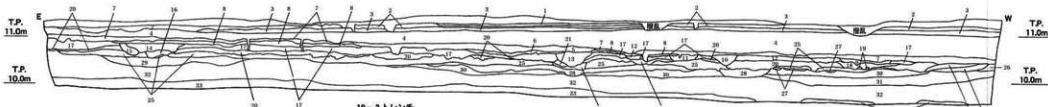
## 19-1トレンチ 断面図

- 1: 砂岩  
2: 砂岩  
3: 泥岩  
4: 粘土  
5: 砂岩  
6: 泥岩  
7: 泥岩  
8: 砂岩  
9: 泥岩  
10: 砂岩  
11: 砂岩  
12: 泥岩  
13: 泥岩  
14: 高水透鏡  
15: 泥岩  
16: 泥岩  
17: 泥岩  
18: 泥岩  
19: 泥岩  
20: 泥岩  
21: 泥岩  
22: 泥岩  
23: 泥岩  
24: 泥岩  
25: 泥岩  
26: 泥岩  
27: 泥岩  
28: 泥岩  
29: 泥岩  
30: 泥岩
- 1: 砂岩中に砂岩が分布する  
2: 中部に砂岩と粘土層が交互する  
3: 砂岩と粘土層が交互する  
4: 粘土層  
5: 砂岩と粘土層が交互する  
6: 砂岩  
7: 砂岩と粘土層が交互する  
8: 砂岩  
9: 砂岩と粘土層が交互する  
10: 砂岩  
11: 砂岩中に砂岩が分布する  
12: 泥岩  
13: 泥岩  
14: 砂岩  
15: 泥岩  
16: 泥岩  
17: 泥岩  
18: 泥岩  
19: 泥岩  
20: 泥岩  
21: 泥岩  
22: 泥岩  
23: 泥岩  
24: 泥岩  
25: 泥岩  
26: 泥岩  
27: 泥岩  
28: 泥岩  
29: 泥岩  
30: 泥岩
- 1: 砂岩  
2: 砂岩  
3: 泥岩  
4: 粘土  
5: 砂岩  
6: 泥岩  
7: 泥岩  
8: 砂岩  
9: 泥岩  
10: 砂岩  
11: 砂岩  
12: 泥岩  
13: 泥岩  
14: 高水透鏡  
15: 泥岩  
16: 泥岩  
17: 泥岩  
18: 泥岩  
19: 泥岩  
20: 泥岩  
21: 泥岩  
22: 泥岩  
23: 泥岩  
24: 泥岩  
25: 泥岩  
26: 泥岩  
27: 泥岩  
28: 泥岩  
29: 泥岩  
30: 泥岩



## 19-2 トレンチ 断面図

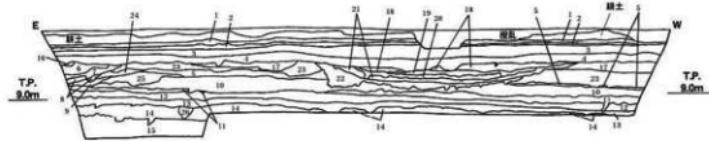
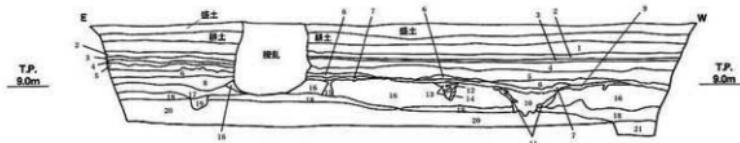
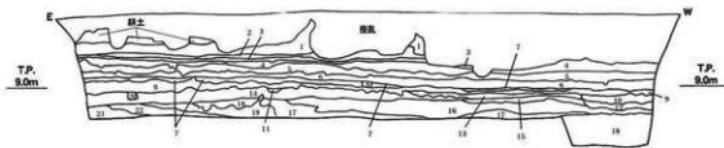
- 1: 砂岩  
2: 砂岩  
3: 泥岩  
4: 粘土  
5: 砂岩  
6: 泥岩  
7: 泥岩  
8: 泥岩  
9: 泥岩  
10: 泥岩  
11: 泥岩  
12: 泥岩  
13: 泥岩  
14: 泥岩  
15: 泥岩  
16: 泥岩  
17: 泥岩  
18: 泥岩  
19: 泥岩  
20: 泥岩  
21: 泥岩  
22: 泥岩  
23: 泥岩  
24: 泥岩  
25: 泥岩  
26: 泥岩  
27: 泥岩  
28: 泥岩  
29: 泥岩  
30: 泥岩  
31: 泥岩  
32: 泥岩  
33: 泥岩  
34: 泥岩  
35: 泥岩  
36: 泥岩  
37: 泥岩  
38: 泥岩  
39: 泥岩  
40: 泥岩  
41: 泥岩  
42: 泥岩  
43: 泥岩  
44: 泥岩  
45: 泥岩
- 1: 砂岩  
2: 砂岩  
3: 泥岩  
4: 粘土  
5: 砂岩  
6: 泥岩  
7: 泥岩  
8: 泥岩  
9: 泥岩  
10: 泥岩  
11: 泥岩  
12: 泥岩  
13: 泥岩  
14: 泥岩  
15: 泥岩  
16: 泥岩  
17: 泥岩  
18: 泥岩  
19: 泥岩  
20: 泥岩  
21: 泥岩  
22: 泥岩  
23: 泥岩  
24: 泥岩  
25: 泥岩  
26: 泥岩  
27: 泥岩  
28: 泥岩  
29: 泥岩  
30: 泥岩  
31: 泥岩  
32: 泥岩  
33: 泥岩  
34: 泥岩  
35: 泥岩  
36: 泥岩  
37: 泥岩  
38: 泥岩  
39: 泥岩  
40: 泥岩  
41: 泥岩  
42: 泥岩  
43: 泥岩  
44: 泥岩  
45: 泥岩



## 19-3 トレンチ 断面図

- 1: 砂岩  
2: 砂岩  
3: 泥岩  
4: 粘土  
5: 泥岩  
6: 泥岩  
7: 泥岩  
8: 泥岩  
9: 泥岩  
10: 泥岩  
11: 泥岩  
12: 泥岩  
13: 泥岩  
14: 泥岩  
15: 泥岩  
16: 泥岩  
17: 泥岩  
18: 泥岩  
19: 泥岩  
20: 泥岩  
21: 泥岩  
22: 泥岩  
23: 泥岩  
24: 泥岩  
25: 泥岩  
26: 泥岩  
27: 泥岩  
28: 泥岩  
29: 泥岩  
30: 泥岩  
31: 泥岩  
32: 泥岩  
33: 泥岩
- 1: 砂岩  
2: 砂岩  
3: 泥岩  
4: 粘土  
5: 泥岩  
6: 泥岩  
7: 泥岩  
8: 泥岩  
9: 泥岩  
10: 泥岩  
11: 泥岩  
12: 泥岩  
13: 泥岩  
14: 泥岩  
15: 泥岩  
16: 泥岩  
17: 泥岩  
18: 泥岩  
19: 泥岩  
20: 泥岩  
21: 泥岩  
22: 泥岩  
23: 泥岩  
24: 泥岩  
25: 泥岩  
26: 泥岩  
27: 泥岩  
28: 泥岩  
29: 泥岩  
30: 泥岩  
31: 泥岩  
32: 泥岩  
33: 泥岩

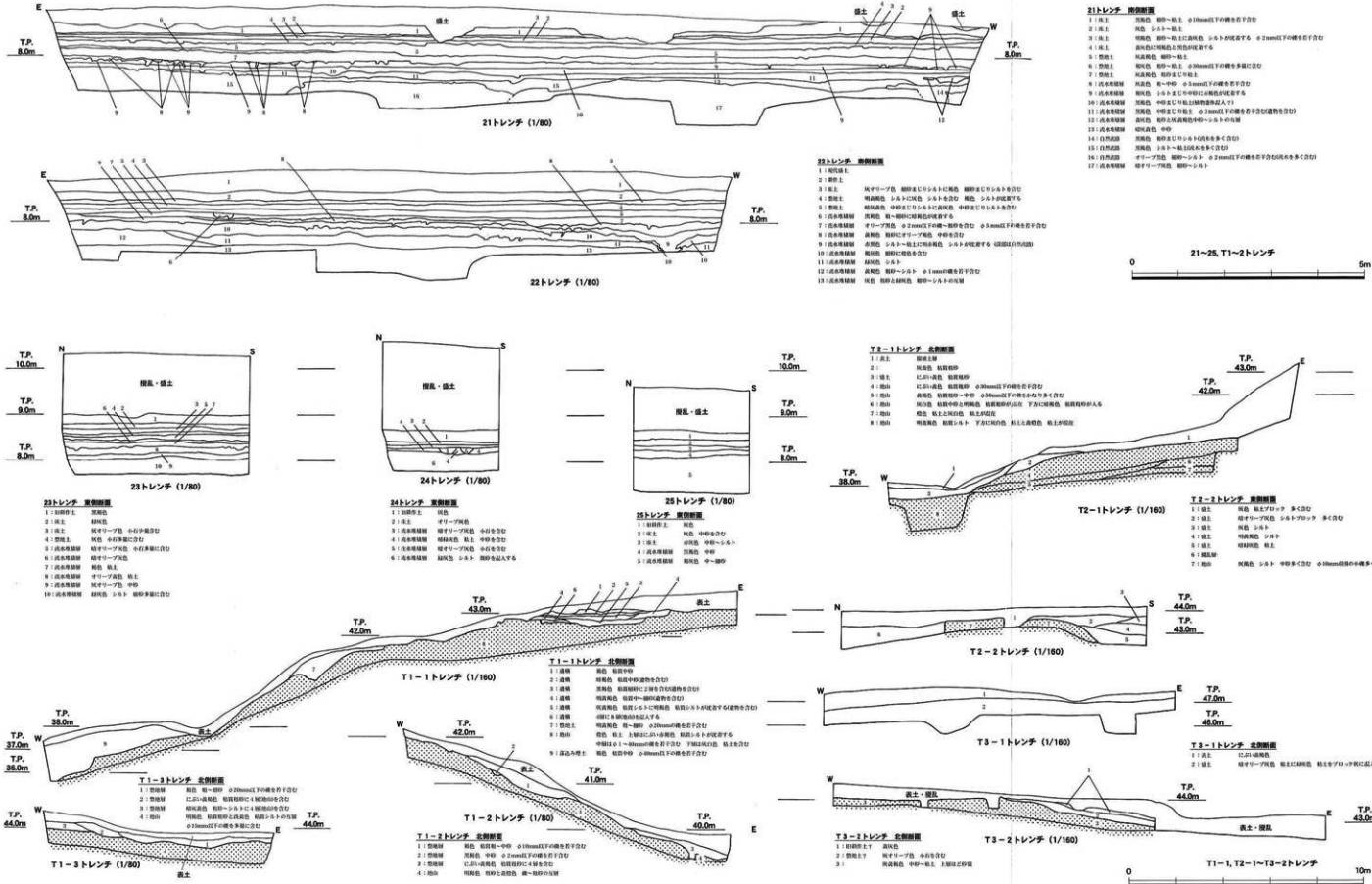
第37図 19トレンチ断面図 (S=1/80)



0 5m

第38図 小路遺跡 20トレチニ断面図 (S=1/80)





第39図 小路遺跡 21~25、T 1-1~T 3-2 トレンチ断面図 (S=1/80・1/160)

## 第3節 打上遺跡

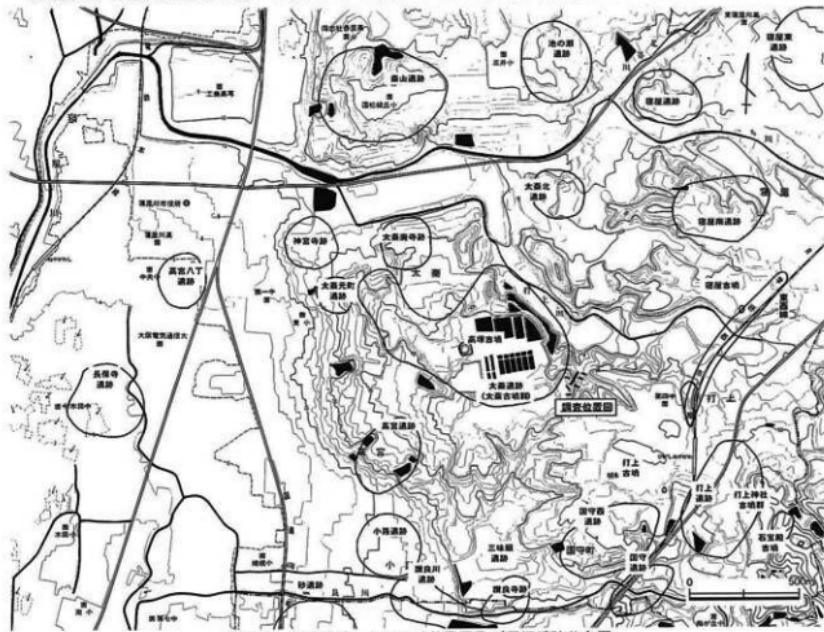
### 1. 調査に至る経過

平成11年度から第二京阪国道建設および一般国道一号バイパス「縁立つ道」の建設に先立ち、道路予定地部分についての埋蔵文化財に関する調査が実施されることとなった。既にその調査結果からは、様々な考古学的知見が数多く得られている。平成13年度にはその一環として、寝屋川市打上地区の埋蔵文化財に関する調査を実施した（第40図）。

打上地区は、寝屋川市東部の太秦遺跡と太秦古墳群に隣接する丘陵上に位置する。周辺は古くから遺物の散布が認められる地域で、多くの周知の埋蔵文化財包蔵地の存在が知られている。このことから、大阪府教育委員会と国土交通省との協議の結果、その詳細な状況を把握するための確認調査が実施されることとなった。現地調査は、財團法人大阪府文化財調査研究センターにより平成13年1月から2月にかけて実施された。

### 2. 位置と環境

確認調査部分は、寝屋川市の東部にあたる太秦丘陵上に位置する。太秦丘陵は、生駒山地から派生する丘陵で、確認調査部分は南から北にかけて標高47～33mと大きな傾斜をみせる。現在の地図は、全

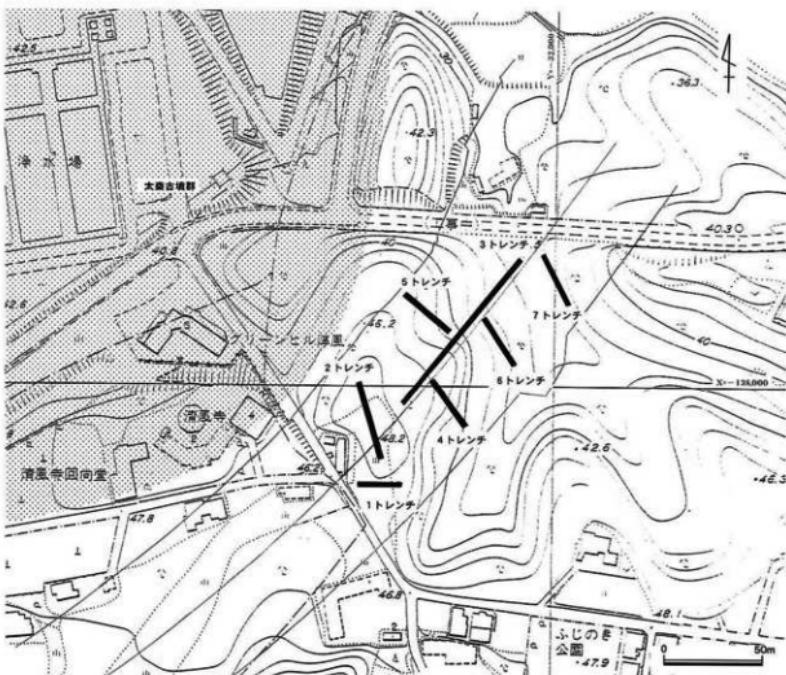


第40図 打上遺跡 トレンチ位置図及び周辺遺跡分布図

域がほぼ竹林である。特に戦後の竹林造成は広範囲に及び、旧地形を留めない程の変更が認められる。

調査部分の北西に当たる打上川右岸には太秦遺跡（弥生時代後期）や太秦古墳群（古墳時代後期）、太秦庵寺（奈良時代後期～平安時代前期）、太秦元町遺跡（古墳時代後期～鎌倉時代）などが認められ、古くからの丘陵部分の開発が窺われる。特に調査部分に隣接する太秦遺跡、太秦古墳群は、農地化に加え浄水場建設や宅地などの地域開発で既に大半が消滅しているものの、豊富な出土遺物によって弥生時代後期の高地性集落や群集墳として著明である。特に須恵器や土師器、六鈴鏡や金環、勾玉をはじめとする様々な玉類など副葬品や埴輪といった出土遺物によって、一帯には相当規模の古墳群が形成されていたことが明らかである。「高塚」「モロ塚」「トノ塚」「黄金塚」など古墳の存在を想定させる多くの字名と、周辺から出土する須恵器や埴輪片などから広範囲に古墳群が形成されていた事が色濃く窺われる。

特に、平成9年に寝屋川市の史跡第1号に指定された太秦高塚古墳は、これらの古墳群の中で1基だけ現存する円墳である。高塚古墳は墳丘裾部分に幅5m、深さ1mの周溝を巡らす円墳である。全長35m、墳丘高5mを測り、周辺からは円筒埴輪片が大量に確認される。主体部については不明であるが、5世紀末～6世紀初頭の築造と考えられている。現在、史跡整備に向けた寝屋川市教育委員会による発掘調査が行われており、埴輪列が検出されている。また、短甲などの鉄器類が出土するなど、多大な調査成果がもたらされている。



第41図 打上遺跡 トレンチ配置図

### 3. 調査区の設定

調査に際しては、調査予定地部分が全て竹で覆われ視界の見通しが立たないため、丘陵頂部とその斜面において、トレンチ設定予定地周辺の伐開から着手した。当初、弥生時代の高地性集落や古墳の存在が想定されたが、伐開作業と並行して実施した現地踏査の結果、古墳や山城の曲輪など現地表から存在の可能性を指摘し得る状況も確認されなかった（図版23）。また、周辺を含め現地表における遺物の散布も皆無である。

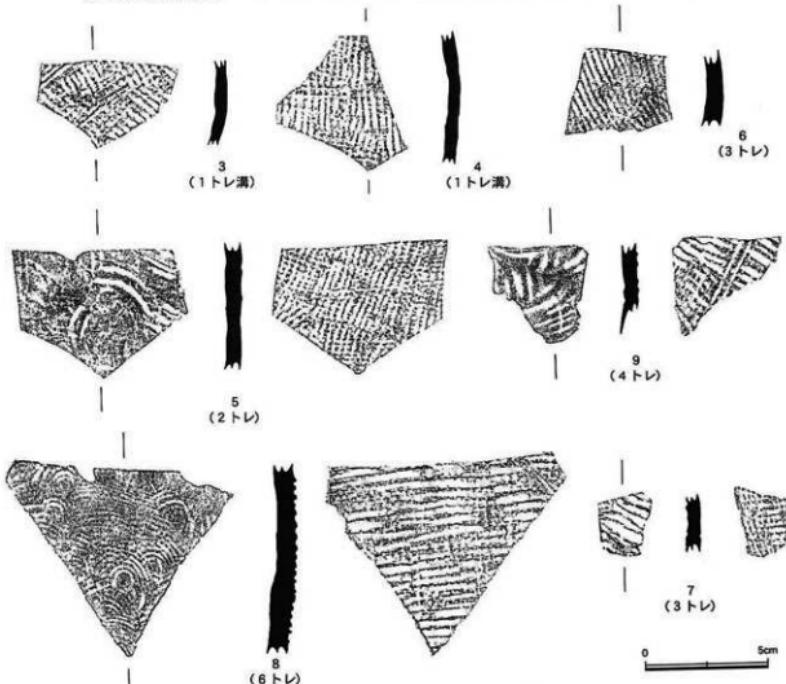
伐開後、丘陵最上部には二方向のトレンチ（1・2トレンチ）を設定し、丘陵最上部から北側の斜面にかけて斜面全域にトレンチ（3トレンチ）を設定した。また東西方向の傾斜にもトレンチ（4・5・6・7トレンチ）を設定した。トレンチの幅はいずれも2mである（第41図）。



第42図 打上遺跡 1トレンチ  
満1出土遺物実測図

引き続き、腐葉土と竹の根が這った部分や、明らかに竹林形成に伴う整地層を機械掘削した。以下の層を、各層ごとに人力で掘削した。

各層からの遺物を取り上げ、平面図と断面図を作成後、写真撮影を行い埋め戻しを行った。トレンチの位置は、単点測量を行い国土省標を地形図に落とし、トレンチの位置を明らかにしている。



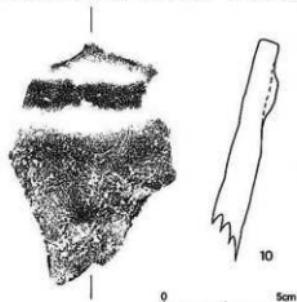
第43図 打上遺跡 1~4・6トレンチ出土遺物実測図

#### 4. 調査成果

道路予定地部分の太秦丘陵に、全7トレンチを設定して発掘調査を実施した。以下、各トレンチごとに報告する。

##### 1 トレンチ

丘陵最上部に幅2m、長さ23.2mの東西方向のトレンチを設定した(第41・46図)。腐葉土と現代耕作土(第1層)を約15cm掘削後、直下に溝を一条検出した(図版24-1~2)。溝はトレンチのほぼ中央に、南北方向に走る。幅4.8m、深さ0.4mを測る。溝の埋土は2層で、上層はオリーブ褐色砂混じりシルト、下層はオリーブ黒色砂混じりシルトである。溝の上部はかなり削平を受けている。溝の埋土下層より、須恵器壺身(2)と須恵器有蓋高壺の蓋(1)須恵器腹片(3・4)等が検出された(第42・43図、図版16-1・2-)。いずれも焼成は良好である。1は口径12.6cm、器高5.2cmを測る。口縁部はやや外反し、稜は短くやや退化気味である。つまみの部分は扁平で基部径2.5cmを測りシャープに欠けている。5世紀末~6世紀初の所産と考えられる。2は口径10.5cm、器高5.3cmを測る。



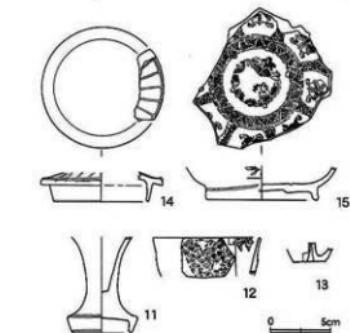
第44図 打上遺跡 3トレンチ出土遺物実測図

壺身の立ちあがりは比較的高く、若干内傾する。端部は段を有し底部はまだ丸みを残している。蓋高壺の蓋同様5世紀末~6世紀初の所産と考えられる。3、4は腹の破片で、外面に並行叩きが複数方向から施されており、内面はすり消されている。

確認の為トレンチを東方向に拡張したところ、地山面(第3層)から新たに南北方向の溝一条と不定形土坑一基を検出した。埋土はいずれもオリーブ黒色シルトである。確認調査としての目的から本造構の掘削は行わなかったため、埋土の詳細な状況や出土遺物等については未確認である。溝1と同一面で検出されたが、時代については明確にし得ていない。

##### 2 トレンチ

1トレンチの北西方向にあたる丘陵最頂部中央に、2トレンチを設定した。幅2m、長さ40.6mである。整地層(第2層)を掘削後、トレンチの北半分にはその直下で地山(第3層)が検出された。溝一条を検出したが、出土遺物はなく時代不明である。トレンチの南半分は、搅乱により造構は検出されず建築廃棄物等が埋められていた。トレンチ中央から南方向に向かって、地山面が急激に下降することを確認した。現状では廃棄物等によってなだらかな丘陵頂部となっているが、本来の地山面は南に傾斜していたことが確認された。最下層の灰オリーブシル



第45図 打上遺跡 1・3~5トレンチ出土遺物実測図

ト層から、須恵器壺片（5）が一点検出された（第43図）。外面に並行叩き、内面には同心円の叩きが施されている。

### 3 レンチ

丘陵の東斜面部分に設定したレンチである（第41・47図）。周辺の状況から古墳が点在することが想定されたため、それらの存在の有無を確認することを目的として斜面上端から下端まで連続したレンチを設定して調査を行った。幅2m、長さ93.5mを測る。

調査の結果、急峻な傾斜に整地層が認められた。丘陵上部を削平し、周辺の土を客土して形成した段が幾段も続き、旧地形は遺存しないことが明らかとなった。現表土や腐植土（第1層）と整地層（第2層）が段を形成し狭小な平坦部分を形成している。平坦面は全て近現代の竹林に伴うことが判明した。かつてこの地が竹の生産地であった頃（図版23-6参考）、大規模な造成を行い竹林を形成していた時の形状が軸所で認められる。素掘の井戸が一基検出されたが、現地表面から切り込んでおり、現代の井戸と考えられる。遺構は検出されなかったが、レンチ南西端から27m付近の落ち込みの最下層から埴輪片が一点検出された（第44図10）。埴輪片は摩耗が著しく、外面に刷毛調整が施されているかは確認できなかった。タガ幅2cmを測る。僅かに円形の透かしが認められる。推定孔径6cm。またレンチ南西端から53m付近の整地層から、須恵器壺片（6・7）と磁器片（12）が出土している。須恵器壺はいずれも小片であり、並行叩きが認められる。12は磁器碗である。近現代の所産と考えられる。

### 4 レンチ

3 レンチ南西端から20mの地点において直交する部分に、東南方向に向け設定したレンチである。幅2m、長さ29.6mである（第41・48図）。整地層（第2層）から近現代陶器（13）と現代瓦片、須恵器壺片（9）が出土した。整地層を掘削すると、遺構は認められず、レンチの全面に灰白色の砂層に至る。遺構、遺物ともに皆無で地山層と判断され調査を終了した。9は外内面に並行叩きが施されている。13は半陶器の乗燭である。

### 5 レンチ

3 レンチ南西端から40mの地点において直交する方向に、北西方に向け設定したレンチである。幅2m、長さ29.8mを測る（第41・48図）。耕作土層（第1層）から近現代磁器（14・15）と現代瓦片が出土した。第1層を掘削すると、西に緩やかな傾斜をみせる黄褐色シルトが全面に検出される。遺構、遺物ともに皆無であるため、地山層と判断され調査を終了した。14は土瓶の蓋、15は磁器碗底部である。14は近現代、15は近世末と考えられる。

### 6 レンチ

3 レンチ南西端から60mの地点において直交する部分に、東方向に設定したレンチである。幅2m、長さ29.4mを測る（第41・48）。現表土がすでに搅乱を受け、一部地山が露出していた。竹の整地をする際に削平され、遺存状態は極めて悪い。土山層を確認し調査を終了した。現代耕土（第1層）から須恵器壺（8）が認められた。外面に並行叩き、内面に同心円叩きが認められる。

### 7 レンチ

丘陵の裾部分にあたる平地に設定した、東西方向のレンチである。幅2m、長さ28.8mを測る（第41・48図）。整地層（第2層）の直下で地山層に至る。レンチの北部分では、一部に現代耕土が薄く認められるが、現代陶磁器片が包含されるのみである。遺構は認められない。地山を確認して調査を終了した。

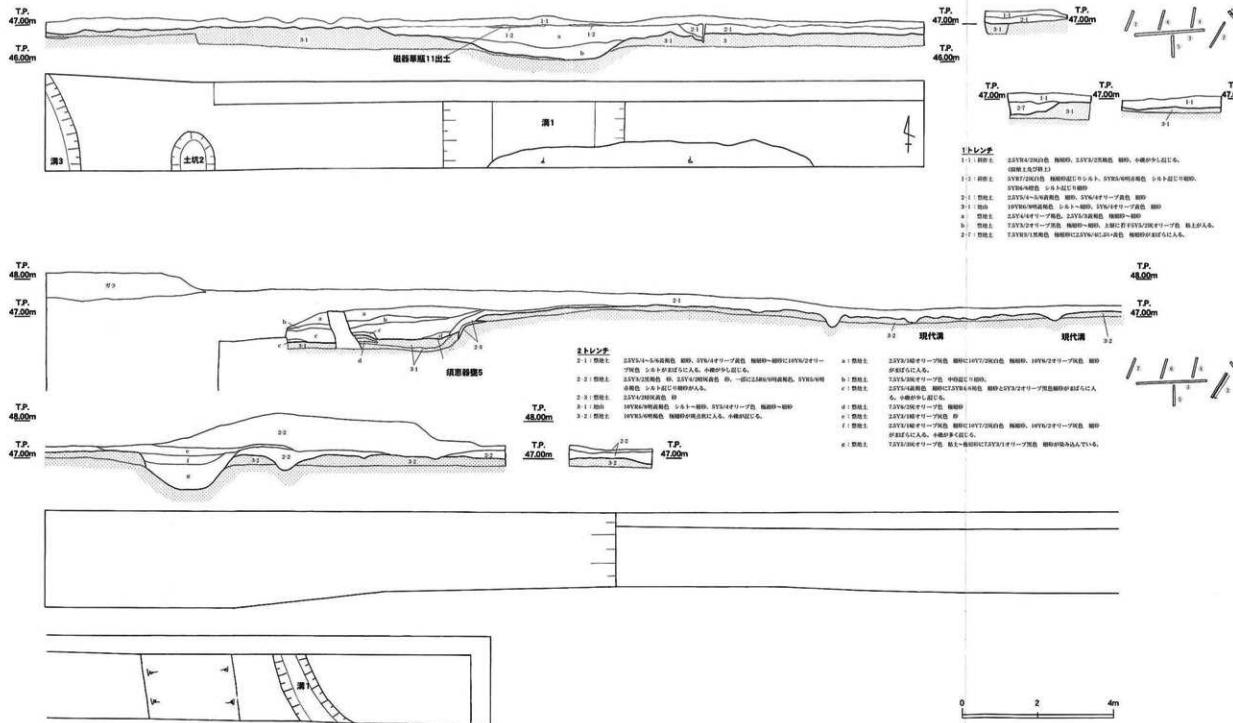
## 5. まとめ

今回打上地区では、7ヶ所のトレンチ調査を行った。1トレンチで検出された溝1は、古墳の周溝である可能性が高い。当初は円墳の周溝の一部と想定されたが、東側を拡張して調査したところ新たに同規模の溝が検出され、その位置関係から方墳の可能性が高いと考えられる。不定形土坑は、削平されてはいるものの主体部の一部である可能性が高く、現時点では木棺直葬と推定される。溝下層の出土遺物から、古墳時代中期の古墳群が丘陵上に展開している可能性が高い。3トレンチの埴輪や、2・3・6トレンチの須恵器片などの散布状態からも、この一帯は太秦古墳群の一支群ととらえて差し支えないであろう。

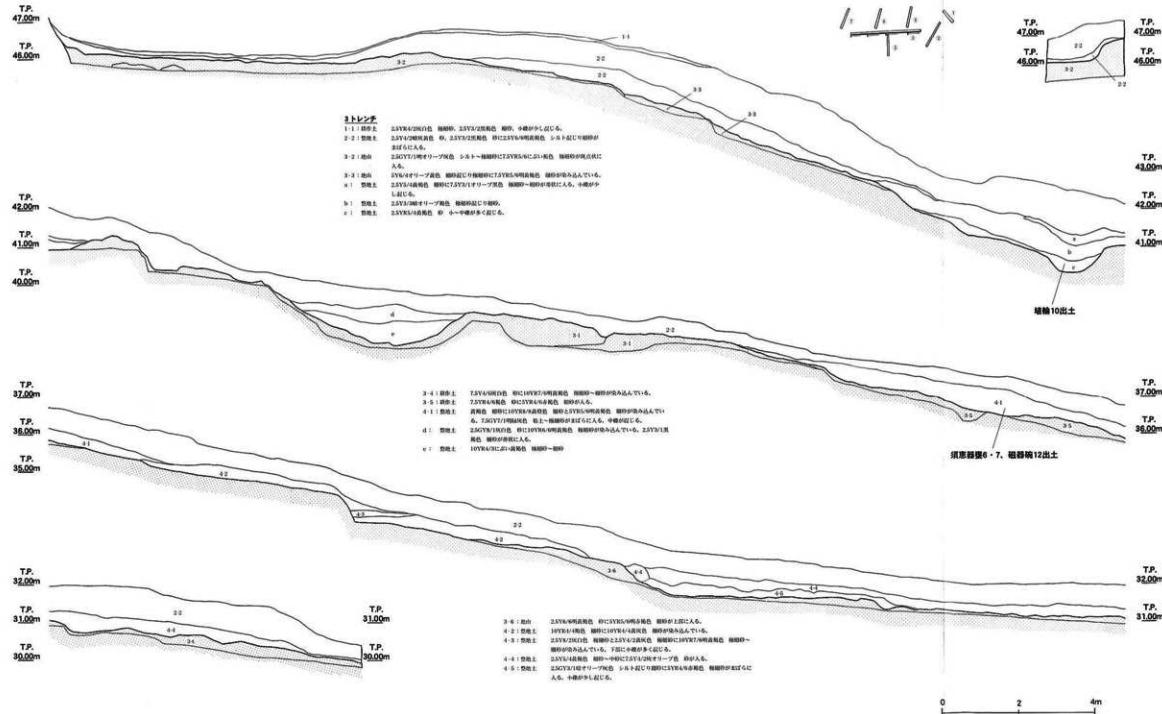
太秦古墳群は浄水場建設や戦後の開墾の際、大半の古墳が消滅した。古墳成立や範囲など実態には不明な点が多い古墳群である。周辺は古墳との関連が想定できる字名が多く遺存している。また、周辺からはそれらの古墳に伴ったであろう遺物が多量に認められ、かつては相当な規模で古墳が存在する地域であった事が窺われる。

今回の調査で検出された溝は、不明な点が多い太秦古墳群の成立時期がさらに遡る可能性を示唆する大変貴重な成果である。また、小破片で現位置を保つものではないものの、埴輪を伴う古墳の存在を指摘することが可能である。太秦元町遺跡においては、溝から大量の円筒埴輪や朝顔型埴輪の底部が出土している。太秦古墳群には、埴輪を伴う古墳が相当数存在したであろうことが窺われる。今回の調査で検出した埴輪は、太秦古墳群の東端部にあたり、太秦古墳群の範囲が一層広がることが判明した。

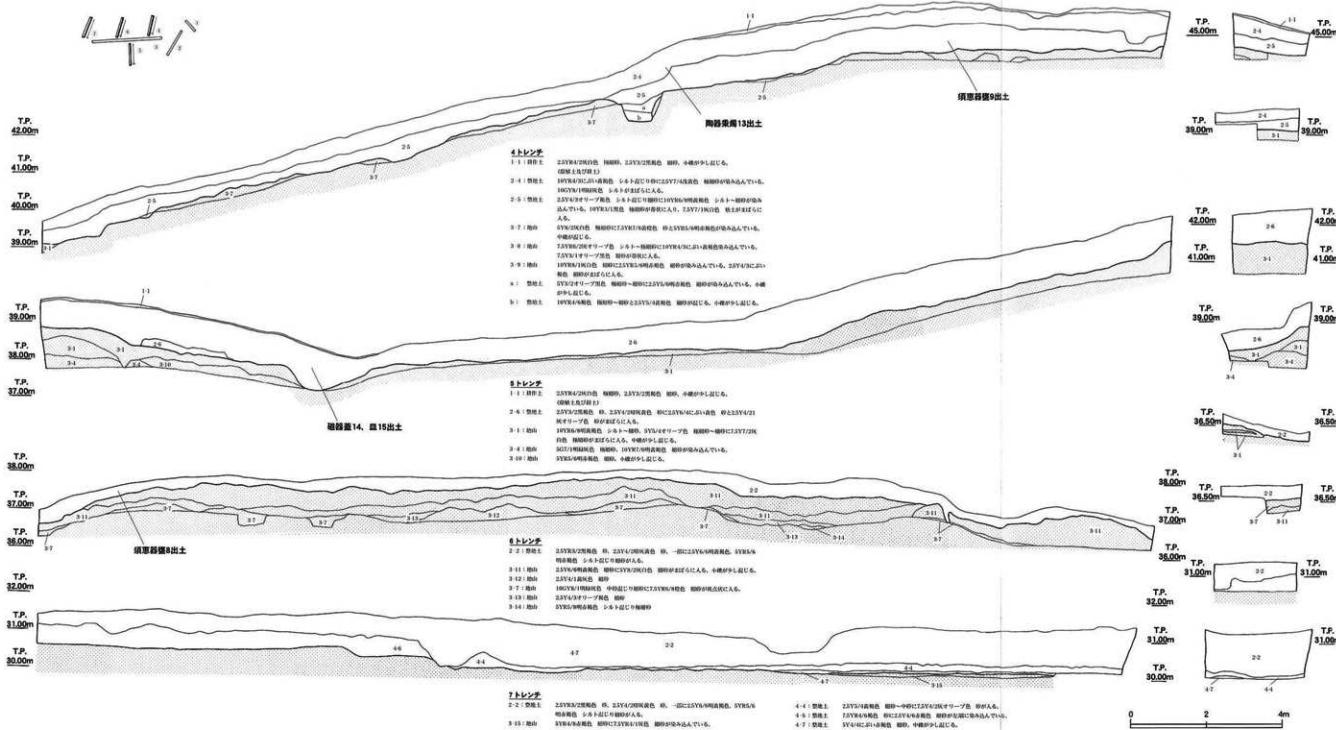
(服部)



第46図 打上遺跡 1・2トレンチ平・断面図



第47図 打上遺跡 3トレンチ断面図



第48図 打上遺跡 4～7 トレンチ断面図

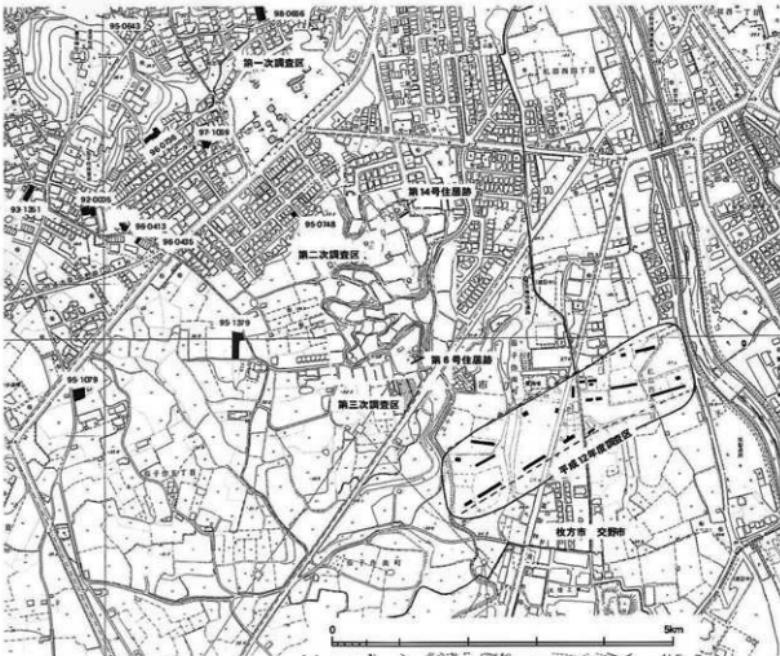
## 第4節 茄子作遺跡

### 1. 位置と環境

茄子作遺跡の調査対象地は、交野台地に続く茄子作台地から天野川側に並行する形で突出した小丘陵の一つを東西方向に横断する区間である。西は、弥生時代後期～古墳時代中期集落・墓地が検出された茄子作遺跡とは小谷を挟み、東は天野川の河川敷に続く。小丘陵上には旧東高野街道が、本区域ではほぼ南北方向に通じ、かつ、現在の市境になっている。西が枚方市、東が交野市である。枚方市側の茄子作集落は、茄子作台地の北半、さらに高所の台地上を中心としてあり、調査地西にあたる台地南半はこの集落の耕作地域である。交野市側の天野川までの地域も、右岸北東部の私部集落の耕作地域である。

以上のような集落と耕作地との関係は、近世期以降の本調査地には集落がなかったと考えられている。ただし、それ以前は、調査地北方に元享年間（1321年）の融通念佛宗中興法明上人ゆかりの「本尊掛松遺跡」が所在するように、東高野街道沿いの信仰や休憩所のような施設の存在は推測されていた。茄子作遺跡の西南部に隣接する茄子作下浦遺跡もそうである。下浦遺跡は、中世（15世紀含む）の掘立柱建物・土坑・溝などが検出されている。したがって、周辺部の今後については、茄子作台地を中心とした遺跡の立地、変遷などの再検討が望まれるところである。

なお、地形の関係上、調査地周辺の耕作地は、枚方市側、交野市側、ともに旧星田村の余水を利用す



第49図 茄子作遺跡周辺既往調査区位置図

る形にはなっている。したがって、調査地周辺部は、私部、茄子作、星田の取り合い地でもあったのだろう。当地は古代以降、渡来人、交野郡衙に関わる三宅（屯倉）山、朝廷の交野牧、石清水八幡宮領など周辺部の歴史も彩りが多い地域でもある。

(井藤)

表1 茄子作遺跡 調査一覧表

調査名	住所	期間	原因	面積	時代	遺構・遺物	文 獻
1 第1次調査	大字茄子作 607	S49.3~8	民間宅地造成	8,000m <sup>2</sup>	弥生後期～古墳時代初期 土塁跡 大堤 井戸状遺構	弥六式住居 14 方形周溝墓 1	枚方市文化財研究調査会「枚方市における遺跡調査概況」 1968年～1976年 1976.6 瀬川芳樹「弥生文化と農耕」「大阪府史」第一巻 1978 枚方市文化財研究調査会・枚方市文化局合編 『第四回枚方カンボジア』、「古代日本」学の参考 一冊内の古跡を探るために』 1980
						中世 遺跡状況込み 13世紀の遺物	枚方市教育委員会 「文化出版ハンドブック」枚方の遺跡と文化財」 1985
2 第2次調査	茄子作4丁目 1681	S52.6~ 53.3	民間宅地造成	38,000m <sup>2</sup>	弥生後期～古墳時代中期	弥六式住居 19 方形周溝墓	枚方市文化財研究調査会「枚方市文化財年報」 1980 枚方市文化財研究調査会 「枚方市における遺跡調査概況」 1976.6 宇治田和生「古跡をめぐる」第3号 1978 「地域文化収集まんじ」第4号 1978 宇治田和生「茄子作遺跡(2)」 「地域文化収集まんじ」第4号 1978 瀬川芳樹「枚方台地とその周辺」「大阪府史」第一巻 1978
						中世 遺物のみ	
3 第3次調査 (NS-3)	茄子作4丁目 395-1,他	S61.11~ 12	民間宅地造成	2,000m <sup>2</sup>	弥生後期	弥六式住居 1 圓筒埴輪 1 埴輪上部 式土壙破片 土師器・貝殻器	枚方市文化財研究調査会「枚方市文化財年報」 1987 枚方市文化財研究調査会「20年のあゆみ」 1998
4 GARD	茄子作4丁目 483,他	S61.11	共同住宅	996.3m <sup>2</sup>	弥生後期	弥生後期土器 埴輪のみ	枚方市文化財研究調査会「枚方市文化財年報」 1987
5 (立会) 61-0779	茄子作4丁目 4516	S62.4	個人住宅	323.64m <sup>2</sup>	即地山		枚方市文化財研究調査会「枚方市文化財年報」 1988
6 (立会) 61-0831	茄子作4丁目 665-127, 126	S62.4	個人住宅	70.62m <sup>2</sup>		~2m築り土内	枚方市文化財研究調査会「枚方市文化財年報」 1988
7 第5次調査 (NS-5)	茄子作3丁目 4607-3, 4625,他	S62.10~	宅地造成	/		谷地形のため 道構未検出	枚方市文化財研究調査会「枚方市文化財年報」 1988
8 (立会) 62-0573	茄子作4丁目 493-4	S62.11	個人住宅	52.25m <sup>2</sup>			枚方市文化財研究調査会「枚方市文化財年報」 1988
9 (立会) 62-0566	茄子作4丁目 490-64	S63.2	個人住宅	45.47m <sup>2</sup>		遺構・遺物なし	枚方市文化財研究調査会「枚方市文化財年報」 1988
10 第4次調査 (NS-4D)	茄子作4丁目 665-79	S63.4	民間宅地造成	665m <sup>2</sup>		遺構・遺物なし	枚方市文化財研究調査会「枚方市文化財年報」 1989
11 (踏査) 第二京阪道路 予定地茄子作、 津田原駅		S63.8					枚方市文化財研究調査会「枚方市文化財年報」 1989
12 (試掘) 88-0505	茄子作2丁目 134	S63.9	事務所付店舗	894m <sup>2</sup>		遺構・遺物なし	枚方市文化財研究調査会「枚方市文化財年報」 1989
13 NS91-19 91-0522	茄子作3丁目 4642,他	H3.9	個人住宅	5m <sup>2</sup>			枚方市教育委員会 「枚方市埋蔵文化財発掘調査概要1991」 1992 枚方市文化財調査報告第26号
14 (試掘・立会) NS-20 91-0563	茄子作4丁目 665-40,他	H3.12	個人住宅	478.8m <sup>2</sup>		遺構・遺物なし	枚方市文化財研究調査会 「枚方市文化財年報」 1994 枚方市文化財年報13 (1991年度分) 1994
15 (試掘・立会) NS-26 92-1288	茄子作4丁目 330-1, 331-1	H5.3	共同住宅	/		遺構・遺物なし	枚方市文化財研究調査会 「枚方市文化財年報」 1995 (1992年度分) 1995
16 NS93-29 91-1220(??)	茄子作1丁目 4612	H5.5	個人住宅	6m <sup>2</sup>			枚方市教育委員会 「枚方市埋蔵文化財発掘調査概要1993」 1994 枚方市文化財調査報告第28号
17 NS-30 93-0812	茄子作2丁目 H6.3	H5.12~	公共下水溝係 工事	/		遺構・遺物なし	枚方市文化財研究調査会 「枚方市文化財年報」 1995.12
18 NS95-40 95-0699	茄子作1丁目 4521	H7.10	個人住宅	1.60m <sup>2</sup>			枚方市教育委員会 「枚方市埋蔵文化財発掘調査概要1995」 1996 枚方市文化財調査報告第30集
19 NS95-41 95-0748	茄子作4丁目 499-73	H7.10	個人住宅	1.44m <sup>2</sup>			枚方市教育委員会 「枚方市埋蔵文化財発掘調査概要1995」 1996 枚方市文化財調査報告第30集
20 NS95-42 95-0643	茄子作1丁目 4521の一部	H7.11	個人住宅	3.01m <sup>2</sup>			枚方市教育委員会 「枚方市埋蔵文化財発掘調査概要1995」 1996 枚方市文化財調査報告第30集
21 NS96-46 96-0736	茄子作4丁目 665-124, 125	H8.10	個人住宅	1.5m <sup>2</sup>			枚方市教育委員会 「枚方市埋蔵文化財発掘調査概要1996」 1997 枚方市文化財調査報告第31集
22 NS97-48 96-1291(??)	茄子作4丁目 417	H9.9	個人住宅	7.3m <sup>2</sup>			枚方市教育委員会 「枚方市埋蔵文化財発掘調査概要1997」 1998 枚方市文化財調査報告第33集

No.	調査名稱	住 所	期 間	原 因	面 積	時 代	遺構・遺物	文 献
23	(NS-51) 98-0311	彦子作2丁目 H11.8~ H11.3		公共下水関係工事	/	绳文・弥生 中世	遺物のみ採集	牧方市文化財研究調査会 『牧方市文化財年報20(1998年度分)』1999.9
24	(NSS98-53) 97-1066(?)	彦子作4丁目 665-87	H10.10	個人住宅	21.71m <sup>2</sup>			牧方市教育委員会 『牧方市埋蔵文化財発掘調査概要1998』1999 牧方市文化財調査報告第34集
25	(NSS98-54) 98-0666	彦子作2丁目 4573-2, 4574-4	H10.12	個人住宅	29.12m <sup>2</sup>			牧方市教育委員会 『牧方市埋蔵文化財発掘調査概要1998』1999 牧方市文化財調査報告第34集
26	(NSS99-55) 98-1035	彦子作4丁目 499-8	H11.3	個人住宅	/			牧方市教育委員会 『牧方市埋蔵文化財発掘調査概要1999』2000 牧方市文化財調査報告第35集
27	( NSS-58, NSS-35) 99-0351	彦子作4丁目 H11.8~ H12.3		公共下水関係工事	/		遺構なし 遺物のみ採集	牧方市文化財研究調査会 『牧方市文化財年報21(1999年度分)』2000.7
28	(NSS99-60) 99-0909	彦子作4丁目 516-5,517	H12.2	個人住宅	2.0m <sup>2</sup>			牧方市教育委員会 『牧方市埋蔵文化財発掘調査概要2000』2001 牧方市文化財調査報告第37集

表2 茄子作下浦遺跡 調査一覧表

No.	調査名稱	住 所	期 間	原 因	面 積	時 代	遺構・遺物	文 献
1	(発掘)	彦子作3丁目 758-他	S59.1	民間宅地造成	1,702m <sup>2</sup>	中世のみ (14世紀) 一部に15世紀	土塁 溝 柱立柱建物 1 柱穴群	牧方市文化財研究調査会『牧方市文化財年報V』1984 牧方市文化財研究調査会『20年のあゆみ』1998
2	(立会)	彦子作5丁目 61-0736	S62.4	工場	431.79m <sup>2</sup>		幅60cmの深い U字溝	牧方市文化財研究調査会『牧方市文化財年報X』1988
3	(試掘)	彦子作3丁目 862-6	S62.5	個人住宅・鉄筋	/			牧方市文化財研究調査会『牧方市文化財年報X』1988
4	(試掘) (NSSU-87-1036)	彦子作3丁目 738-4	S63.6	共同住宅	589m <sup>2</sup>		遺構・遺物なし	牧方市文化財研究調査会『牧方市文化財年報X』1989
5	(試掘) (NSS)	彦子作3丁目 885-1-他	H1.12	共同住宅	/		遺構・遺物なし	牧方市文化財研究調査会『牧方市文化財年報11(1989年度分)』1992
6	(試掘) (NSS)	高田2丁目 1027-1	H2.2	個人住宅			遺構・遺物なし	牧方市文化財研究調査会『牧方市文化財年報11(1989年度分)』1992
7	(第7次) (NSS-7) 91-0237	彦子作4丁目 674-2	H3.8	民間分譲住宅	305m <sup>2</sup>	中世 (15世紀)	溝状遺構 土坑	牧方市文化財研究調査会 『牧方市文化財年報13(1991年度分)』1994 牧方市文化財研究調査会『20年のあゆみ』1998
8	(試掘・立会) (NSS-13) 92-0133	彦子作3丁目 746-4,5	H4.5	住宅開発	9m <sup>2</sup>		遺構・遺物なし	牧方市文化財研究調査会 『牧方市文化財年報14(1992年度分)』1995
9	(NSS92-15) 92-0005	彦子作4丁目 676-2	H4.6	個人住宅	31m <sup>2</sup>			牧方市教育委員会 『牧方市埋蔵文化財発掘調査概要1992』1993 牧方市文化財調査報告第27集
10	(試掘・立会) 第19次 (NSS-19) 92-0864(?)	高田2丁目 15-10	H5.12	クラブハウス建設	38.405m <sup>2</sup>		遺構・遺物なし	牧方市文化財研究調査会 『牧方市文化財年報15(1993年度分)』1995
11	(NSS94-21) 93-135	彦子作3丁目 2186-1, 2187-1	H6.4	個人住宅	4m <sup>2</sup>		遺構・遺物なし	牧方市教育委員会 『牧方市埋蔵文化財発掘調査概要1994』1995 牧方市文化財調査報告第29集
12	(NSS95-25) 93-1379(?)	彦子作5丁目 798,797-2	H7.6	個人住宅	60.96m <sup>2</sup>			牧方市教育委員会 『牧方市埋蔵文化財発掘調査概要1995』1996 牧方市文化財調査報告第30集
13	(NSS95-26) 95-1079	彦子作5丁目 990	H8.2	個人住宅	2.64m <sup>2</sup>		遺構・遺物なし	牧方市教育委員会 『牧方市埋蔵文化財発掘調査概要1995』1996 牧方市文化財調査報告第30集
14	(NSS96-28) 96-0435	彦子作3丁目 742-4	H8.7	個人住宅	2.3m <sup>2</sup>			牧方市教育委員会 『牧方市埋蔵文化財発掘調査概要1996』1997 牧方市文化財調査報告第31集
15	(NSS96-30) 96-0413	彦子作4丁目 665-146	H9.2	個人住宅	2.9m <sup>2</sup>			牧方市教育委員会 『牧方市埋蔵文化財発掘調査概要1996』1997 牧方市文化財調査報告第31集
16	(確認・立会) (NSS-32) 97-0575	彦子作5丁目	H9.11~ H10.1	木造配水管 敷設工事	(190m <sup>2</sup> )		溝状遺構	牧方市文化財研究調査会 『牧方市文化財年報19(1997年度分)』1998.7
17	(NSS-36) 99-0642	彦子作3丁目 H11.1~ H12.3		公共下水関係工事	/		遺構・遺物 候出されず	牧方市文化財研究調査会 『牧方市文化財年報21(1999年度分)』2000.7
18	(NSS00-41) 00-0060	彦子作3丁目 2195-1,7,8	H12.7	個人住宅	/			牧方市教育委員会 『牧方市埋蔵文化財発掘調査概要2000』2001 牧方市文化財調査報告第37集

## 2. 調査成果

今回の調査は道路予定地が東西方向にあることから、基本的には予定地に併行して幅2mのトレンチを東西方向に14本計画した。結果として、トレンチの拡張などで計21本となった。なお、増設したトレンチ箇所はアルファベットで枝名をつけた。

### 東端部（第54図）

天野川沿いの調査対象地東端部には、あわせて4本のトレンチを設定した。うち、1・2のトレンチは天野川に伴った流水堆積層のみを検出したにすぎないが、3・4のトレンチではいずれもその西側において洪積層が浅い位置で検出でき、河道の範囲を押さえることができた。とともに、洪積層上面では弥生時代前期ないしは縄文時代晩期と考えることのできる遺構検出もできた。

#### 1 トレンチ

最深部で1.8mの深さまで掘削したが、耕土の下はすべて近世以降の流水堆積層である。

層序は上から0.2m耕土、0.1m明赤褐色砂、0.3m淡褐色砂～黒灰色細砂、0.5m赤褐色粗砂～淡灰白色細砂、0.3m赤褐色粗砂～青味淡灰褐色粘質シルト、0.2m以上灰色粘質シルトと続く。

出土遺物には、瓦器、すり鉢（中世）、杭、鉄製品、瓦、陶磁器（近世）がある。

#### 2 トレンチ

こちらは流水堆積の厚みを知るために深く掘れるように方形に調査区を設定し2.8mを掘削したが、土層の変化を得ることができなかった。ボーリングデータからは川近くにおいて最大で8mの厚みを見積もることができそうだ。

層序は、上から0.2m耕土、0.1m淡褐色砂、0.1m赤褐色砂、0.3m淡褐色砂、0.5m淡茶灰色砂質シルト～明赤褐色粗砂、0.3m明赤褐色～茶灰色粗砂、0.4m明茶褐色砂質シルト～オリーブ味淡灰色粘質シルト、0.7m灰色細砂・粘質シルト（瓦）、0.2m以上の淡茶灰色粗砂という順であった。

出土遺物は、下層部で杭、瓦器、須恵器、丸瓦が出土した。

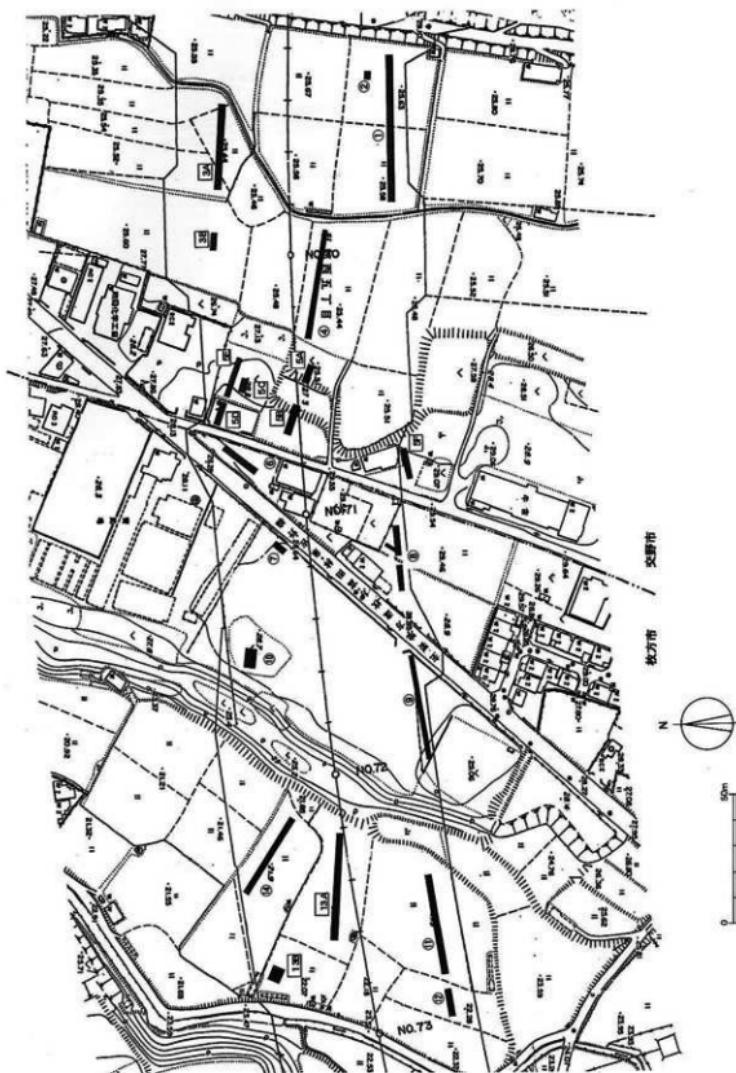
#### 3 A トレンチ（図版28-1、第58図、土層断面図参照）

このトレンチでは西側6mの範囲、深さ0.7mで洪積層の地山が検出でき（T.P.24.8m）、これによって河道の肩も捕まえることができた。地山である西端の洪積層直上に黒味茶褐色砂が残り、最も西端では径30～40cmのビットを検出した。土器細片が出土するとともに、埋土が黒灰色砂質シルトであることから、縄文時代晩期ないしは弥生時代前期の時期の可能性がある。河道の肩より東側は1.7m以上の流水堆積があった。なお、西側の耕土直下の床土に用いた暗茶褐色粘質シルト、明赤褐色砂質シルトにはサヌカイト剥片、縄文ないしは弥生土器片、須恵器などの遺物が多く含まれたことから、当該期の遺物包含層が調査区西側に発達していたことが判る。

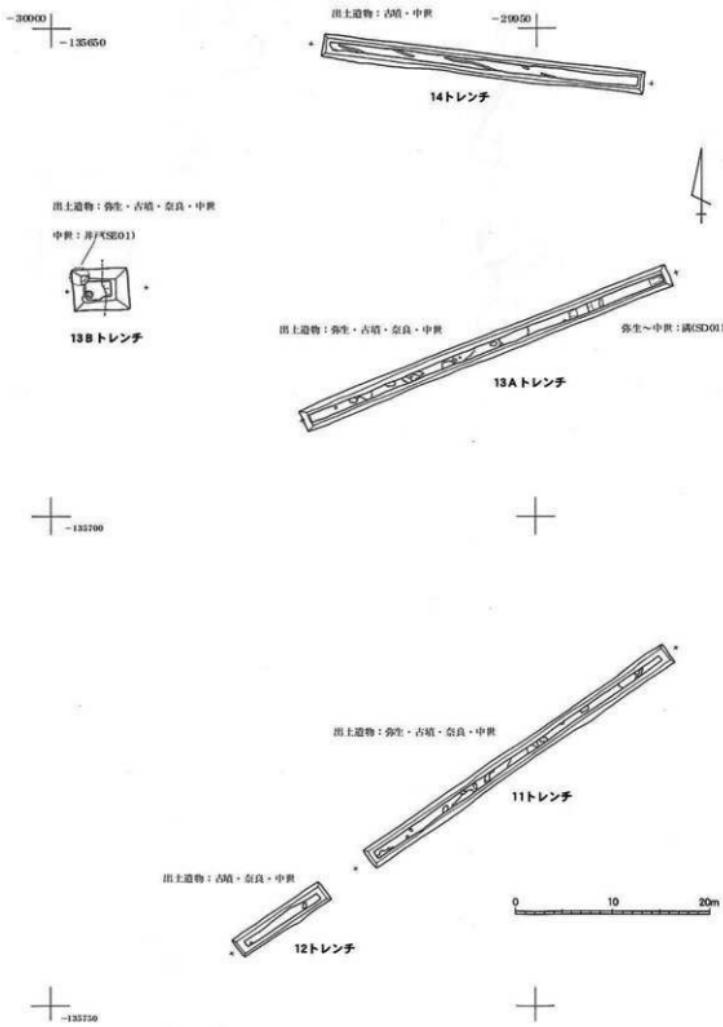
出土遺物には上記のほか、陶質土器？、土師器、瓦器、陶磁器、瓦がある。

#### 3 B トレンチ（図版28-2、第57図、土層断面図参照）

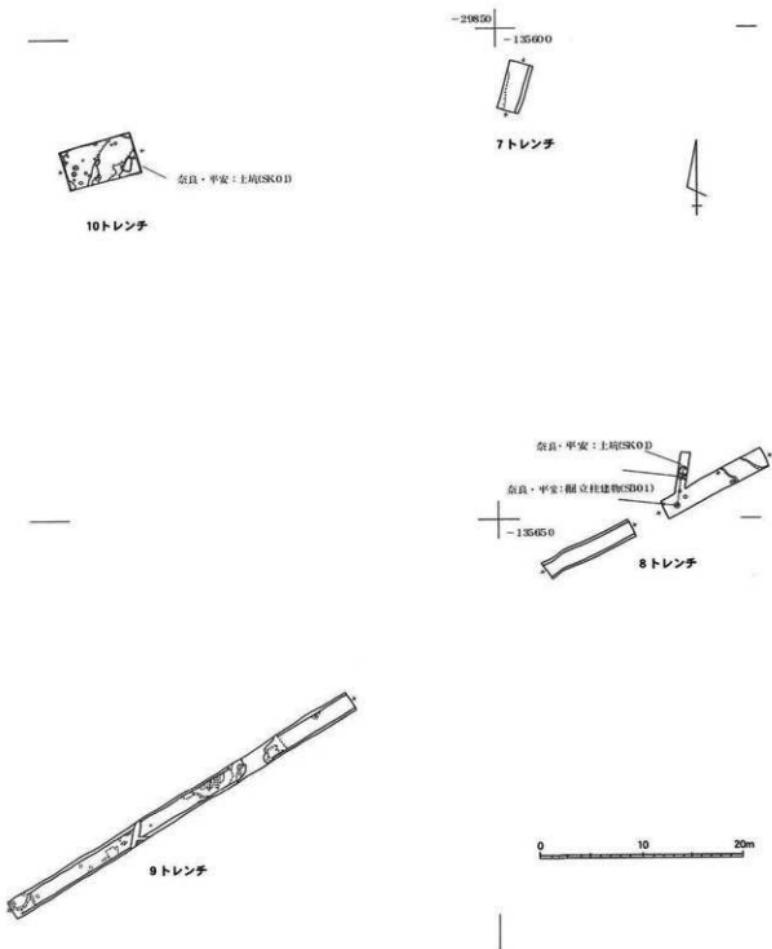
3 A トレンチ西側の状況と似るが、流水堆積層はより薄くなっている。下部に遺構面が2面あり、上面では灰色砂を埋土とする南北方向の溝。0.5m深い下面では、黒色粘質シルトを埋土とする径0.15mのビット、幅0.3mほどの溝状長方形土坑を検出した。他に茶褐色、茶灰色シルトを埋土とする落ち込みもある。出土遺物や埋土から、前者は弥生時代前期頃、後者は奈良・平安時代に属するだろう。地山



第4節 茄子作遺跡

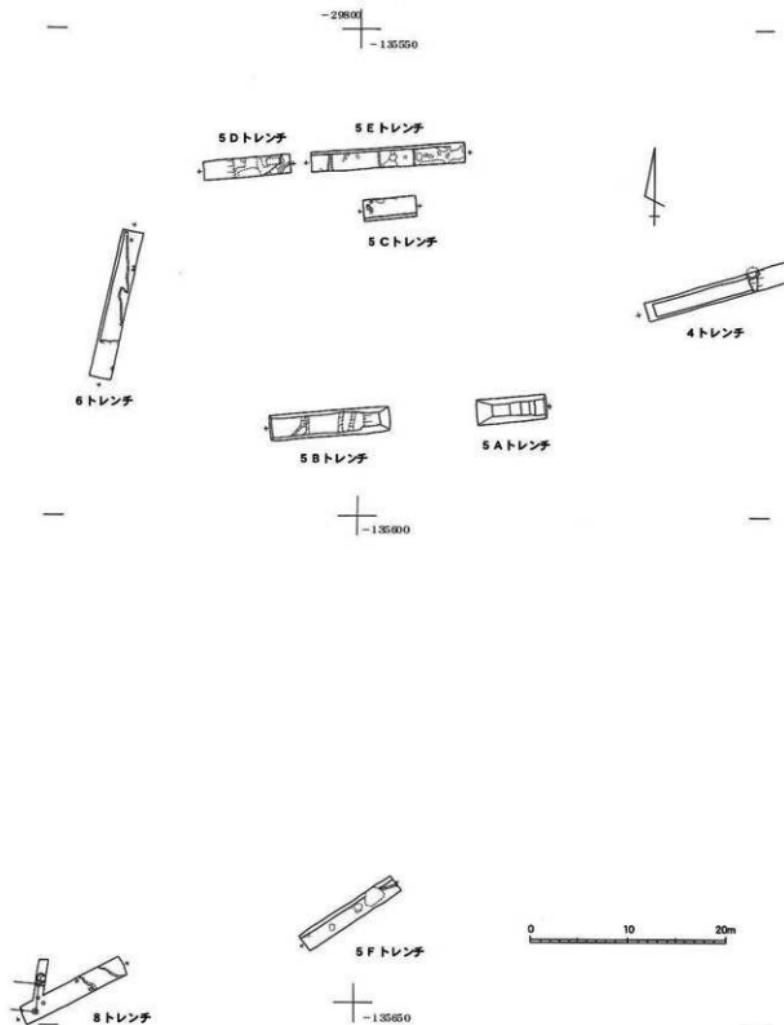


第51図 茄子作遺跡 西端部平面図

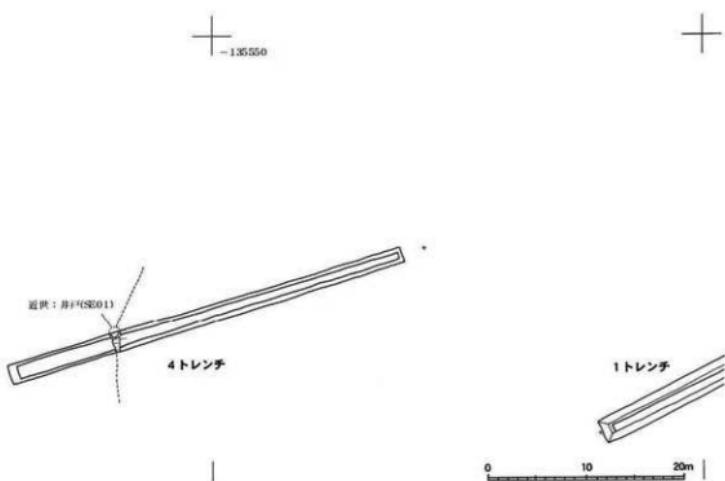
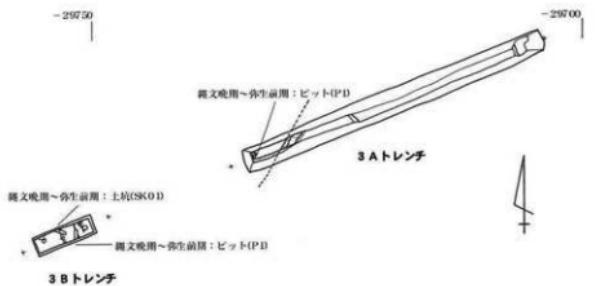


第52図 茄子作遺跡 中央西半部平面図 (破線: 推定)

第4節 茄子作道跡



第53図 茄子作道跡 中央東半部平面図



第54図 茄子作遺跡 東端部平面図

は明茶灰色砂質シルトでT.P.25.15mが最も高い。

出土遺物には、須恵器・土師器、瓦、近世陶磁器がある。

#### 4 トレンチ（第58図、土層断面図参照）

西端に顕著な流水堆積層は見当たらない。その西端より東側に向かって12mで河道の肩を検出した。地山は西端でねばねばの淡黄灰色粘土が赤味淡黄褐色砂礫の上にのる。T.P.25.0mが最も高い。流水堆積は西側ほどシルト主体であり、それらは東側に向かって下降する。検出できた下層のオリーブ味灰色粘質シルト（泥土状）中に極めて小規模な噴砂状の痕跡があり、1859年の南海地震に伴う可能性がありそうだ。

遺物は地山の粘土を削り巻き込んで盛られた客土であろう淡黄灰色粘土ブロック茶灰色砂質シルトから中世陶磁器、瓦、須恵器が出土した。

#### 中央東半部（第52・53図）

中央東半部は台地上で地山が高いことに加え、東高野街道沿いにバック・ホーによる現代の搅乱と削平が著しく、調査地点を評価するためにトレンチ数が増え、計8本となった。その結果、南側の5F・8トレンチで削平をまぬがれ奈良・平安時代の建物の柱跡や溝が残っていることが分った。また、8トレンチの遺構から出た土器の中には、弥生時代中期のものも混ざることから、当該期の遺構が遺存する可能性を示唆した。

#### 5 A トレンチ

旧地形図から見れば深さ3.5m程で旧地表面のはずだが、3.85mを機械掘削したにもかかわらず、すべて産業廃棄物中心の盛土であった。

#### 5 B トレンチ

このトレンチも搅乱坑が地山まで及ぶ。地山の黄褐色・灰褐色砂礫にはバック・ホーの爪あとが残る。地山の残存は最も高所でT.P.28.4m。これより上に、およそ1.2mの盛土がかぶる。

#### 5 C トレンチ

0.2mの耕土、0.05m暗赤黄褐色砂礫の下には現代と考えられるピット、落込みが見られるだけである。地山は明赤黄褐色砂礫で、最高所はT.P.28.45mである。出土遺物は近現代の瓦と陶磁器のみである。

#### 5 D トレンチ

西側の道際で搅乱坑が1.0m以上に及ぶ部分もある。部分的に残ったところの所見からは、0.2mの耕土下は明赤褐色粘質シルト・淡赤褐色砂礫の地山になる。前者の最高所はT.P.29.2m、後者はT.P.28.9mである。出土遺物はない。

#### 5 E トレンチ

0.2mの耕土下は西半が淡赤褐色砂礫、東半が明赤褐色砂質シルトの地山になる。南北方向の溝や段、不安定な落ち込みがあるが、すべて現代のものである。地山はT.P.28.9mから28.0mまで、東側に向かって緩やかに下降する。出土遺物はない。

#### 5 F トレンチ

ここでもバック・ホーの爪あとが残る搅乱坑があり、シャベルの幅分が1.0m下まで及ぶ。

基本的な層序は、0.5m盛土、0.2m耕土・床土、地山が明赤黄褐色粘質シルト（T.P.28.5m）となる。

トレンチ東端には断面コの字形、幅0.2mの東西方向の溝があり、埋上が暗赤黄褐色粘質シルトであることや土師器細片が出土することから奈良・平安時代に属する。

#### 6 トレンチ

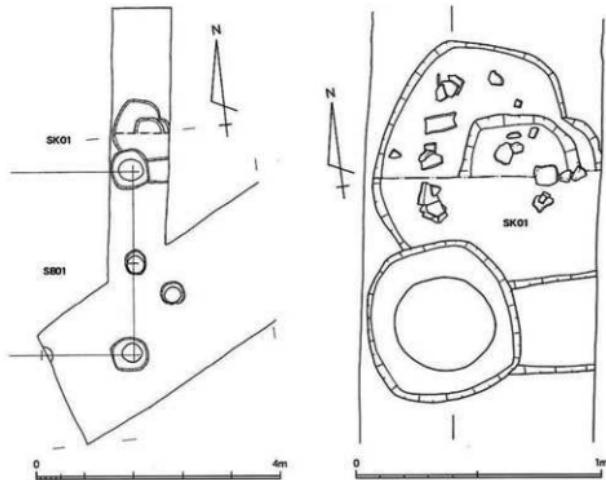
溝、落込み、ピットが全面にわたって見られたが、いずれも近現代のものだろう。層序は、0.15mの耕土下は西半がすぐに地山、東半は0.1mの暗灰褐色砂質シルトがはさむ。地山は西側に明赤黄褐色粘質シルトがのり、下は明赤褐色砂礫である。地山の残存は最も高所でT.P.29.15mである。

出土遺物には、瓦器と土師器もしくは弥生土器片と考えられるものがある。

#### 8 トレンチ（図版28-3・4、29-1、第52・53図、平面図・土層断面図参照）

西側の棚田が一段下がったところは碎石の下がすぐに赤黄褐色粘質シルトの地山となる。東側高台には掘立柱（一辺60cm）が削られ残り、東西方向に3個が並ぶ。埋土は赤褐色ブロック混じりの茶褐色粘質シルトで炭や土師器片を含む。また、両端の柱掘方が大きいことから、隅柱にあたろう。この状況から奈良・平安時代の梁行2間の掘立柱建物東西棟と考えることができる。柱間は1.5mで、梁軸はN-7°-Eにふれる。検出高はT.P.29.3mである。

層序は0.2m耕土・床土の下に0.05mの砂混じり赤黄灰色土がはさまり、淡赤黄褐色粘質シルトの地山となる。他に遺構は溝、ピット、土坑がある。うち、土坑は先の掘立柱建物に切られることから、先行する存在で、土師器の变形土器を中心に、外黒の黒色土器甕などが出土する。土器は奈良時代でも新しい時期のもので、建物はこれより後出すことになる。また、この土坑の出土した土器の中にはⅡ様式の弥生土器片も含まれており、かつてこの土坑付近に弥生土器を伴った遺構が存在したことが分る。



第55図 茄子作遺跡 8 トレンチ掘立柱建物検出状況（左）及び土坑SK01出土状況（右）

#### 中央西半部（第52図）

中央西半部に3本のトレンチを設定した。この地点も台地上で地山が高いことに加え、工場造成時に

バック・ホーで旧耕土が均質にすきとられていることがわかる。しかしながら、10トレンチのように、旧地形が下降するところでは安定した中世、奈良・平安時代の遺構面を確認することができた。また、摩滅をほとんど受けない旧石器のサヌカイト剥片の出土もあった。

#### 7 トレンチ

地山表面を削った淡黄褐色粘土ブロック土によって表面が0.4m盛られていた。顯著な遺構と遺物はなく、地山は淡黄灰色砂質シルトで、最高所はT.P.28.1mとなる。6トレンチの成果からすれば、1mは削られていることになるが、シルト層が露出することから、旧地形そのものが現在の南北道に沿って一段低くなっていた可能性のほうが強い。

#### 9 トレンチ

盛土が0.05~0.4mあり、現代の建物基礎やコンクリート道などの攪乱が地山に及び、顯著な遺構・遺物はなかった。地山はほとんどが淡赤黄褐色砂礫であったが、最も東側で明赤黄褐色粘質シルトが東に傾いて厚く被っているが、トレンチ全体の地山検出高はT.P.28.8m前後でほぼフラットである。

#### 10 トレンチ（図版29-2、第57図、土層断面図参照）

この地点は西側の谷部に向けて地山がT.P.28.0m~27.3mと南西から北東にかけて比較的強い傾斜をもつ。下降するにしたがって0.3~1.0mの層厚で中世、奈良・平安時代の遺物包含層が顯著に確認できた。

上面の中世遺構面ではピットと円形の落ち込みがあった。下面の奈良・平安遺構面ではピット・土坑・落ち込みを多数検出した。そのうちの南東隅にある土坑からは、摩滅を受けない旧石器の風化面をもつサヌカイト製の縦長と横長の剥片2点が出土した。このことで付近に、プライマリーな石器ユニットが存在することが分かる。

ほかの出土遺物としては绳文土器の可能性のあるものや須恵器、土師器、瓦器、土師器がある。

#### 西端部（第51図）

西端部の谷部分は、枚方市文化財研究調査会が弥生・古墳時代の19棟の竪穴住居、数棟の高床式建物、方形周溝墓などを発掘調査した台地と北西側で接する。谷部を中心に5本のトレンチを設定した。上部は近世からの水田面が重なり、下部は中世面が安定してあり、遺構・遺物からやや高くなった谷部南半の11と13Aトレンチを中心としたあたりで建物群が存在する一方、北側の14トレンチあたりで耕作地が展開するようである。こういった遺構・遺物のまとまりは南東方向にみられる段丘崖裾のえぐりと無関係とは考えにくく、南北100m、東西80mほどの規模で館跡的な施設の存在も考えられるかもしれない。またその面と接して、奈良時代の遺構や古墳時代の流路、弥生時代中期前半の溝などといった遺構が錯綜する。詳細は以下に記すとおりである。

#### 11 トレンチ（第58図、土層断面図参照）

上部に近世・近代の水田面が少なくとも3面確認でき、畔、溝があった。その下面では古墳～中世の遺物を多く含む斑点混じり暗灰色粘質シルト・黒味暗灰色粘・砂質シルトの包含層があり、下に行くほど遺物の出方は多い。砂層をベースにした遺構面では溝、落込み、土坑、ピットを検出した。その砂層全体を取り除くと灰白色粘質シルトの地山となる（T.P.21.2m）。

出土遺物には、サヌカイト剥片（弥生）、鉄製品、須恵器・土師器（奈良・平安）、瓦器、土師器、土釜、陶磁器（中世）、陶磁器（近世・近代）がある。

## 12トレンチ（第57図、土層断面図参照）

11トレンチと同様な状況を示す。下面の遺構面では落込み、ピットを検出した。これより下部はこの遺構を避けて中央を掘り下げ、T.P.20.9mで明灰白色砂質シルトの地山を確認した。

出土遺物には、須恵器・土師器（奈良・平安）、瓦器、陶磁器・青磁（中世）がある。

## 13Aトレンチ（図版29-3・4、第58図、平面図・土層断面図参照）

これも11トレンチの状況と同様であるが、東端で幅6mの中世の落ち込みとその下面に弥生土器を東側法面で多く含む断面逆台形状、幅9m、深さ0.6mの溝を検出した。その埋土は黒味暗灰色粘質シルトで、出土弥生土器は斐形土器などⅡ様式のものが中心である。東端の肩部では明灰白色砂の地山をT.P.21.2mで確認している。その直上には黒色粘土層がへばりつく。トレンチ西端の下面遺構を避けて掘りおろした地点でも同様な層順で、地山をT.P.20.2mのレベルで確認でき、全体に西に下降する。

出土遺物には他に、須恵器・土師器（奈良・平安）、瓦器、土師器（中世）がある。

## 13Bトレンチ（第57図、土層断面図参照）

このトレンチは地山が深い場合に、幅2mではその位置を確認できないので方形に設定した。これも上部に水田面があり、砂礫の間層含み足跡状の凹凸が多く認められる。これより下面の北東隅で中世と考える径2mの井戸を検出した。その下にある灰白色細砂と粗砂で構成される地山は、T.P.20.5m～20.3mと東側に向かって緩やかに下降する。このことにより、谷最深部はこのトレンチよりやや東になりそうである。

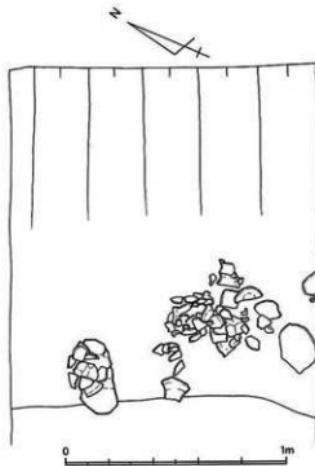
出土遺物には、弥生土器、須恵器・陶質土器？（古墳）、土師器（奈良・平安）、瓦器・土師器（中世）などがある。

## 14トレンチ（第57図、土層断面図参照）

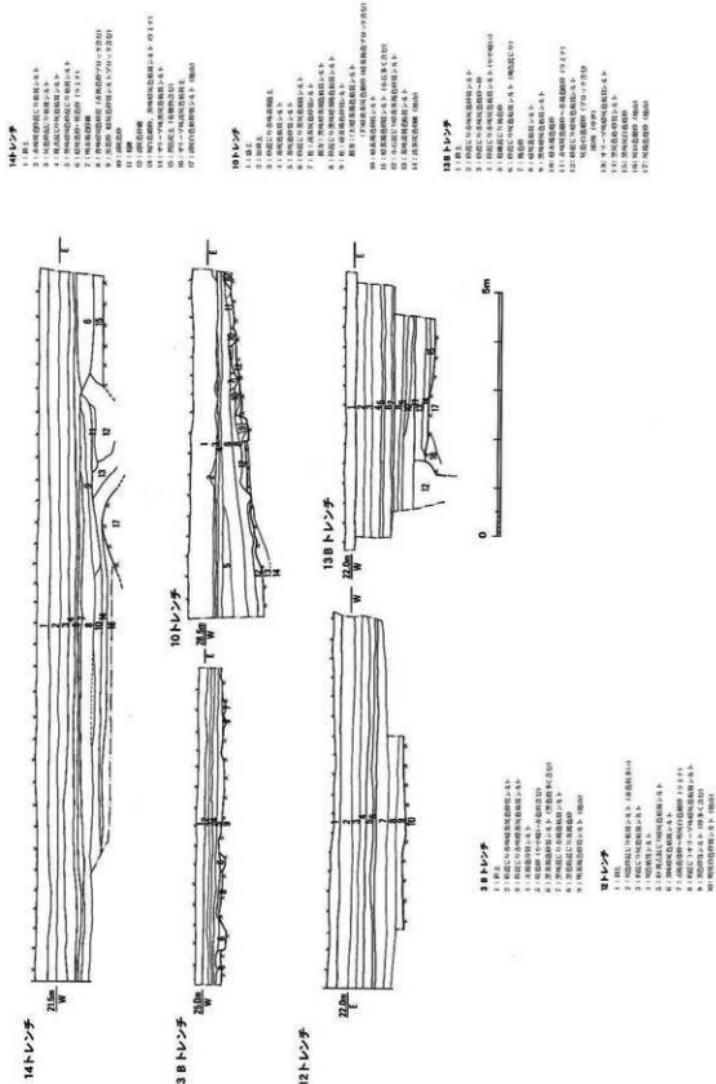
基本的には11トレンチの状況と変わらない。ただし、下面遺構面は併行して走る小溝群と一部、落込みが見られる程度である。小溝群は中世の耕作面と考えられる。本調査ではこれら遺構が存在することからこの面で掘削を中止した。ただし、部分的に掘り下げたところで13Aトレンチで確認した弥生時代の溝の続きが顯著に見当たらぬことや側溝から下の砂層で出土した古墳時代の陶質土器状の破片が出土することから、小溝群を検出した下層の砂層は古墳・弥生時代の流路の切り合いがはげしかった可能性がある。地山面は東端T.P.20.8mの高さで灰白色粘質シルトを確認しているが、西側に向かって比較的に強く下降する。

出土遺物には他に、須恵器・土師器（奈良・平安）、瓦器・土釜・陶磁器・瓦（中世）、陶磁器（近世）がある。

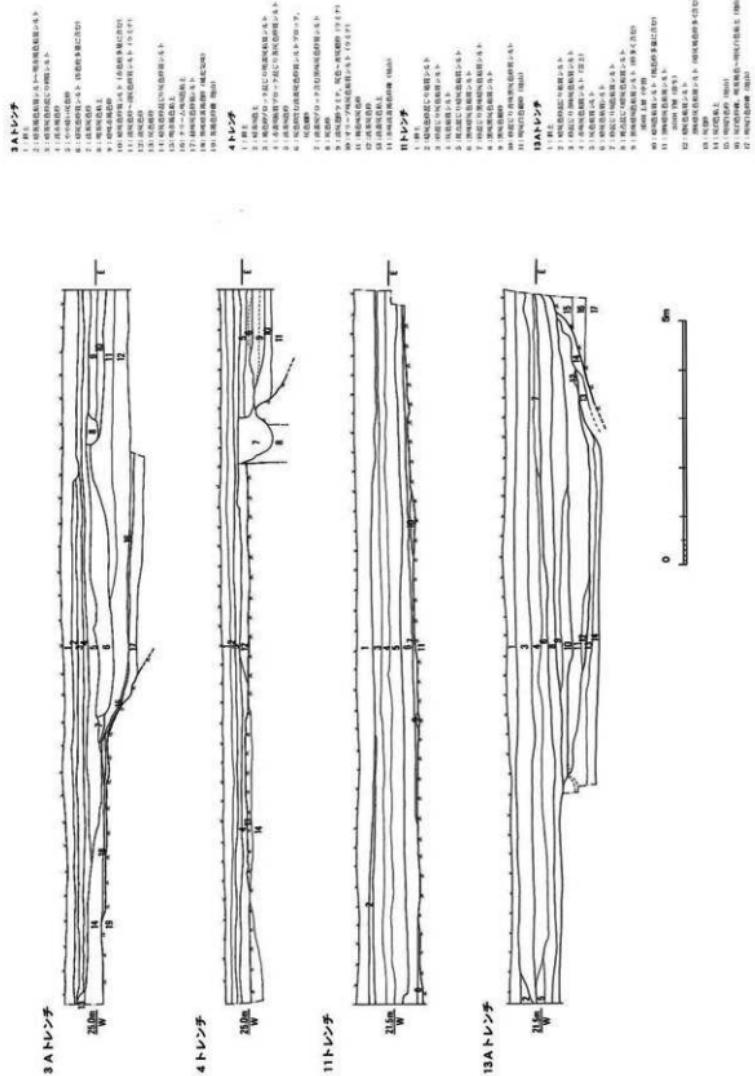
（一瀬・井藤）



第56図 茄子作遺跡 13Aトレンチ大溝東側法面  
遺物出土状況図



第57図 茄子作遺跡 3B・10・12・13B・14トレンチ土層断面図



第58図 茄子作遺跡 3 A・4・11・13A トレンチ土壌断面図

### 3. 出土遺物

遺物の出土量はコンテナにして全体で約8箱分である。出土遺物は、8トレンチと13トレンチの各遺構出土の遺物と、1~14トレンチの各々の包含層出土のものがある。前者については各遺構ごとにまとめて、後者については全トレンチを一括して各時代ごとにまとめ、さらに土製品と石製品に分別し記述した。各遺物は可能なかぎり器種・器形の判別を行ない、それに従い記述した。また、それぞれの出土地点および層位などの情報については付載の観察表に示したので参照されたい。

#### 遺構出土遺物（1～26, 55～61）

##### 13Aトレンチ大溝SD01（1～20, 55～61）

出土遺物はコンテナにして約3箱分で、いずれも摩滅した破片の資料である。遺物は下層から出土した弥生土器が大半を占める。出土した弥生土器（1～20）には、壺（1～5）と、甕（6～13）、底部（14～18）、そして胴部（19, 20, 55～61）がある。

1～4は頸部上半からなだらかに外反した口縁部を呈する広口壺で、ハケにより外面は縦方向の、内面には横方向の調整を施す。3は粗い目のハケを用いている。4は口縁端部下端にヘラでキザミを施し口縁部内面に波状の櫛描文を描く。5は短頸壺で、縦方向のハケ調整を施したのち、横方向のナデを加えている。

6～11は口縁部内面で丸みをもって外反し、体部にふくらみをもつ甕である。外面には縦方向のハケ調整を施したのち端部に横方向のナデを加えている。8は粗い目のハケを用いている。9は口縁部内面に弱い稜をもって外反する。

14, 16は底面にくぼみをもつ底部で、14には外面は縦方向の、内面には横方向のハケ調整を施している。18は底面直上でくびれをもって立ち上がる底部である。19は18と同一個体と思われる胴部片で、他の破片と比較して粗く大粒の胎土をしている。55～61は外面に波状や直線の櫛描文を描いている。

いずれの土器片もその特徴からⅡ様式に比定できる。

##### 8トレンチ土坑SK01（21～26）

出土遺物はコンテナにして1箱分である。SD01同様に摩滅した資料が目立つ。弥生土器（24～26）と土師器（21～23）が出土した。

土師器（21～23）はいずれも強く外反する口縁部を呈する甕で、内外面ともに摩滅が激しく調整方法は観察しがたい。

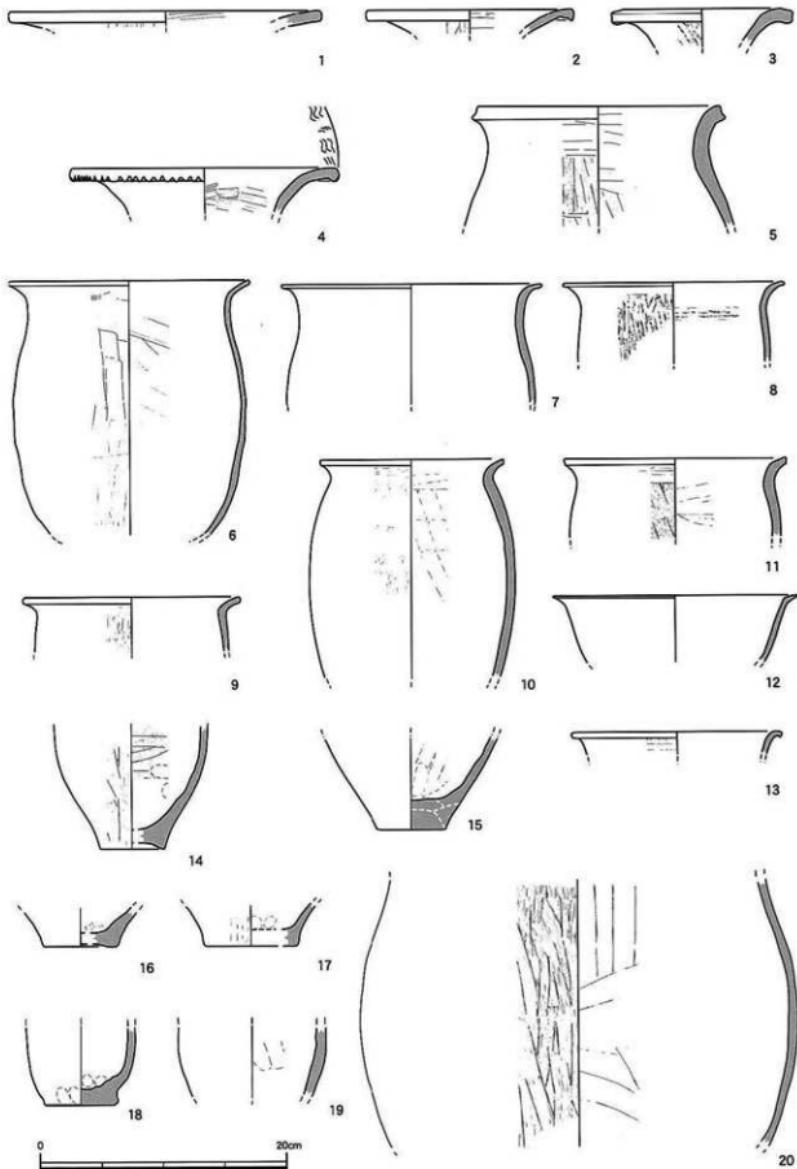
弥生土器は壺（24）と底部（25, 26）がある。24は頸部上半よりゆるやかに外反する口縁部を呈し、口縁部にヘラでキザミを施している。25は底面にくぼみをもち、外面は底面より指頭でナデあげる。26は外面に縦方向のハケ調整を施し、端部には成形時にできたと推定するへこみの痕が残る。

弥生土器はその特徴からⅡ様式に、土師器は奈良時代に比定できる。

#### 包含層出土遺物（27～54, 62～72）

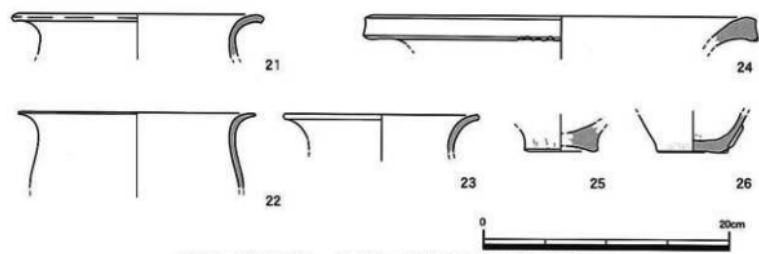
##### 土器類（27～65）

各トレンチの包含層からは縄文～近世にかけての遺物が出土した。いずれも細片であるが、その帰属時期については可能なかぎり判別を試みた。

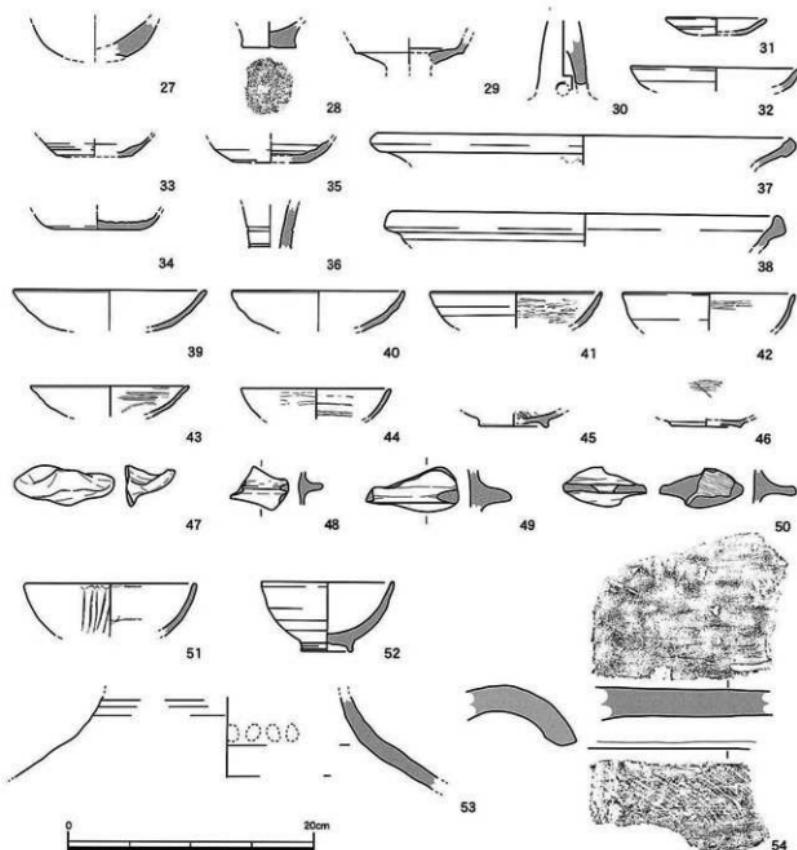


第59図 茄子作遺跡 13A トレンチ大溝SD01出土土器実測図

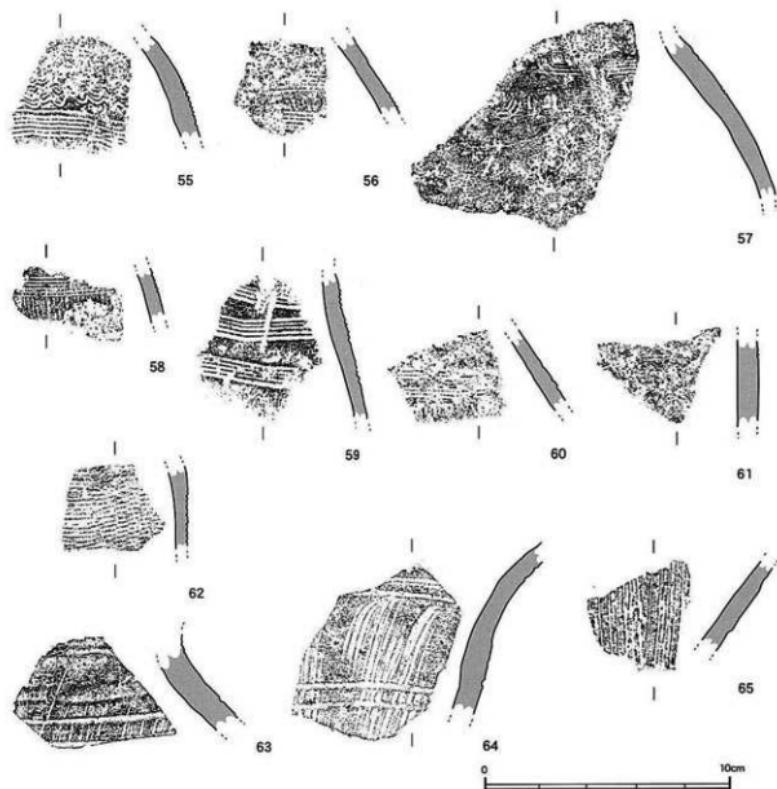
第4節 茄子作遺跡



第60図 茄子作遺跡 8トレンチ土坑SK01出土遺物実測図



第61図 茄子作遺跡 トレンチ出土遺物実測図（1）



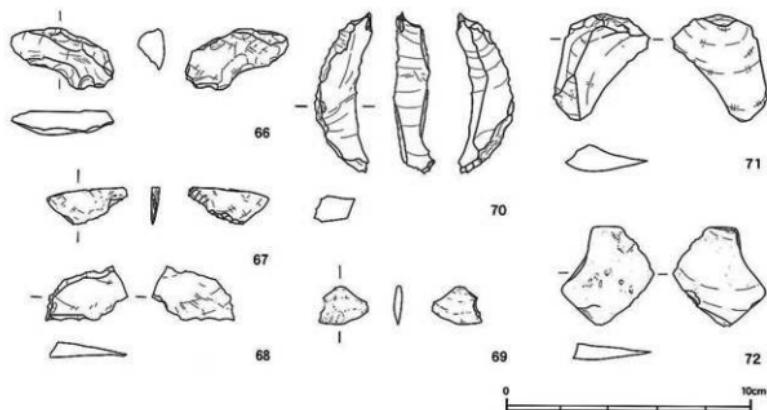
第62図 茄子作遺跡 トレンチ出土遺物実測図（2）

27は縄文土器であろう丸底を呈する底部片である。また、弥生土器（28）は底部片で、底面に木の葉圧痕をとどめている。

土師器（29～32, 47）には高坏（29, 30）と皿（31, 32）、妻（47）がある。29は坏部にあたる破片で口縁部に向かって外反し、底部との接合で段を有する。30は脚部にあたる破片で、裾部との境と推定するところに穿孔する。31, 32は外面の胴部付近に段を有する底の浅い皿である。いずれも内外面には回転力をえたナデを加える。47は牛耳形を呈する把手の破片である。以上それぞれはその特徴から、29, 30は4世紀、31, 32は12～13世紀、47は7世紀のものと判断できよう。

陶質土器（62）は胴部にあたる小片である。外面には斜格子状のタタキ目痕がある。

須恵器（33～38, 63, 64）には坪（33～35）と皿（36）、妻（37, 63, 64）、鉢（38）がある。33～35は杯身の破片である。底部にはヘラ切り痕をとどめる。36は長頸壺の頸部にあたる破片で内外面に横方向のナデを施す。37, 63, 64はそれぞれ妻の頸部から口縁にかけての破片で、外面に粗い目の獣描文を描く。38は口縁端部が断面三角形に肥厚し、口縁部が外反するいわゆる東播系の鉢である。



第63図 茄子作遺跡 トレンチ出土遺物実測図(3)

瓦器（39～46、48～50）には椀（39～46）と土釜（48～50）がある。41～44は内面に間隔をあけた幅の細い暗文が、外面には体部から口縁部にかけて指頭圧痕やヨコナデがみられる。45、46は高台のつく底部片であり、45は断面が台形を、46は三角形を呈する。土釜には頸部の断面形が方形を呈するもの48、50と三角形を呈するもの49があり、50は内面にハケ調整を施す。以上これらはその特徴から12～14世紀初のものと判断できよう。

陶磁器（51～53、65）には椀（51、52）と甕（53）、擂鉢（65）がある。51、52はいづれも高台から胴部に向け緩やかに湾曲して口縁部で立ち上がる器形を呈する。51は外面に蓮弁文を描く青磁椀である。52の高台脇のケズリは明瞭な陵を作るほどしっかりと成している。53は内面に指頭圧痕をとどめる。

瓦（54）は凸面にヘラでミガキを施し、凹面には鉄線あるいは糸によるコビキの痕を残す。以上、51～54、65は16～17世紀のものとなろう。

#### 石製品（66～72）

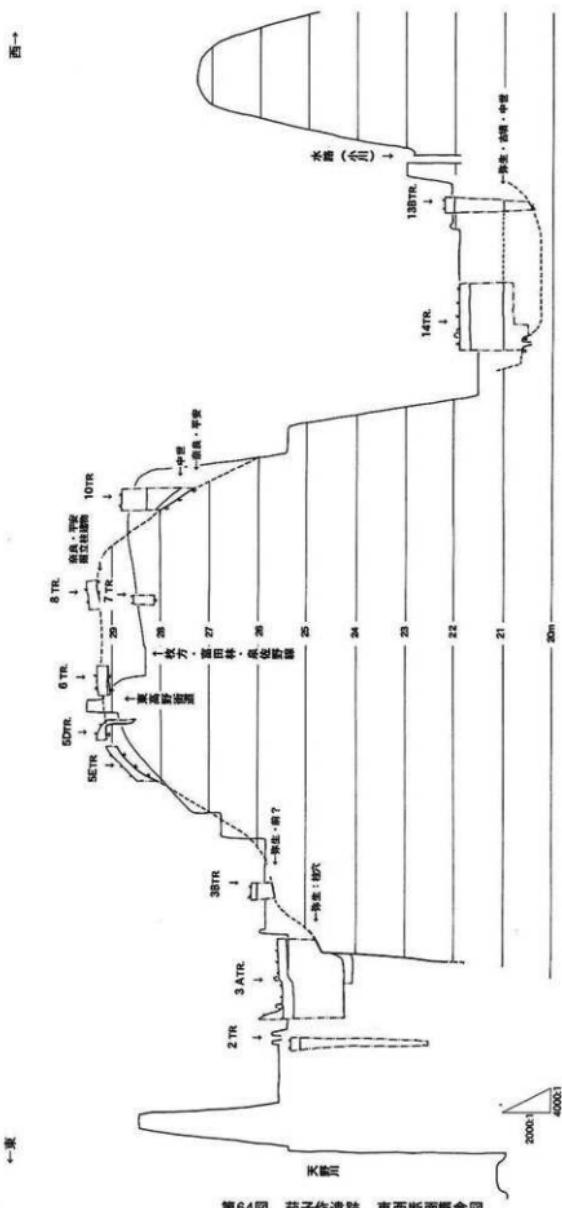
今回の調査では3A、10、11トレンチの包含層より、いづれもサヌカイト製の剥片を7点採集した。石材は肉眼の観察により全て二上山産と思われる。

66は打面をすりつぶし調整を施している。67の縁辺には二次加工と推定する細かな剥離痕がある。70は背面に原礫面を残し、バルブが発達しない両極打法による剥離と推定できる。71は背面に不整方向から何度も行ってできた剥離の切り合いがある。

帰属時期については、出土状況や摩滅、風化の度合いなどから、66、70は旧石器、67～69、71、72は弥生時代と判断できよう。(松尾)

以上、今回の調査において出土した遺物は旧石器、弥生土器・石器をはじめ、縄文・古墳・古代・中世のものも認められた。中でも、目立つのは畿内第Ⅱ様式壙の弥生土器であり、当該調査地にまんべんなく出土する可能性をもつ。





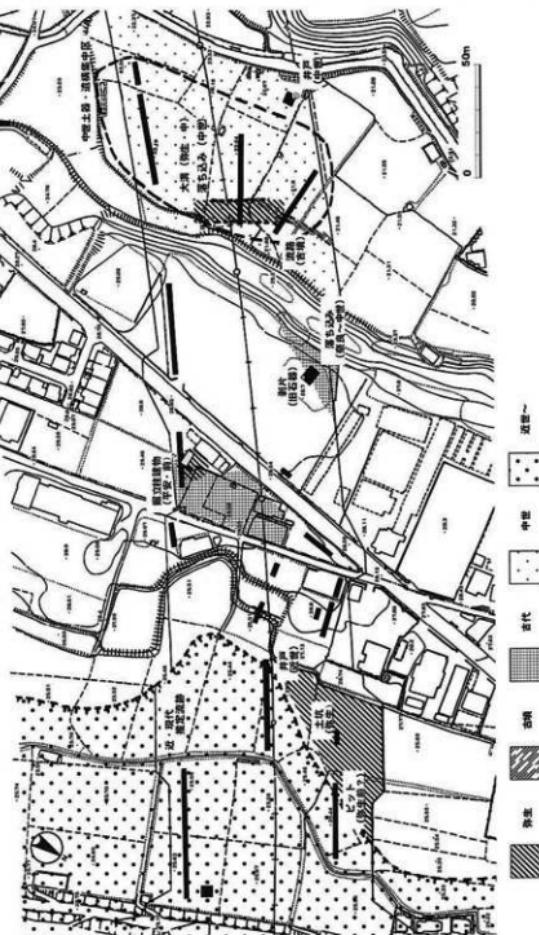
第64図 茄子作道跡 東西断面概念図

#### 4.まとめ

本調査対象地は、中央部の高い部分が中位段丘面（tm）、低い東西の部分が低位段丘面（tl）と考えられている。調査の結果、特に東西部分の上層を覆った砂層を取り除くことで tl 面を明確に検出することができた。この面では、枚方丘陵・交野台地では希少な弥生時代前期・中期集落の一端を検出し得た。今後、北河内ではこうした低位段丘面やその上部に至る斜面地などを中心として、集落跡が展開する可能性を示唆するとともに、從来から指摘される谷水田の存在や中期後半を中心とした高地性集落傾向のみならず、当該地の自然環境変化を考えてみる必要がありそうである。また、特に西側では、中世の遺構・遺物の濃密さから館跡の存在が感じられることや北西の茄子作遺跡で検出される古墳時代集落の広がりの可能性が想起される。以上の事柄はこれまで調査機会の少なかった tl 面での良好な資料を得ることができるとともに相当な課題を提示していると考えられる。

中央の tm 面では、東高野街道沿いに発達する奈良時代から中世にかけての集落跡や旧石器の原位置をとどめた出土の可能性を示唆している。

なお遺構・遺物の検出・出土の成果として、tl 面が残る部分を中心として独立丘陵状を形成することから、これを中心に周囲下の tm 面を含め天の川氾濫原を東限とし、谷状地形を西限として、新規発見の「上の山」遺跡とし、把握することになった。



第65図 茄子作遺跡 各時代主要遺構・遺物分布図

**A トレンチ**

標高約82m付近で、5m×5mのトレンチを二段堀によってGLより約2mまで掘削した。約25cmの表土・床土と約20cmの中砂を多く含む粘質土(整地土と思われる)が堆積し、以下は川に向かって西から東方向に緩やかに傾斜する流水堆積(シルト、砂礫が緩やかに傾斜しながら堆積)が確認され、下部では植物遺体が堆積している部分も見られた。

遺物はGLより約1.8m下の植物遺体を含むシルト層内より須恵器の小片が1点出土している。

**B トレンチ**

西側の丘陵から東側の貴谷川に向かう谷筋に対して縦断方向に幅2m、長さ約30mのトレンチを設定した。標高は約82~83mの地点で、約1mの段差がある休耕田内で約2mまで掘削した。

厚さ約20cmの旧耕作土を除去すると、東側に向かって緩やかに傾斜する砂、粘土、シルト、砂礫の流水堆積が確認された。トレンチの東端部で貴谷川の氾濫による堆積が認められ、中央部で棚田の造成が確認されたが、遺物の出土はなかった。

**C トレンチ**

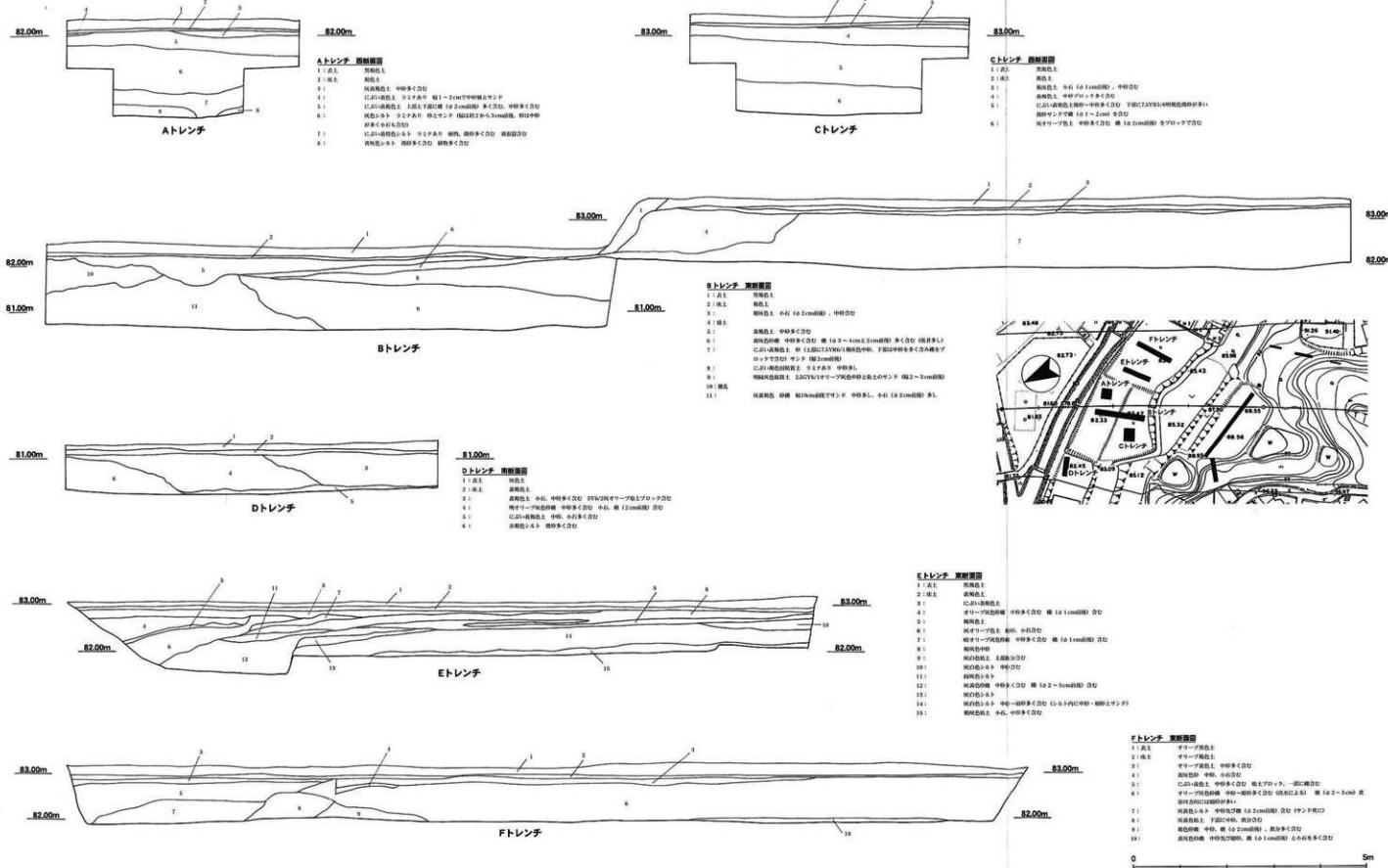
Cトレンチは標高約83m付近で、6m×6mのトレンチを二段堀によってGLより約2mまで掘削した。トレンチ内の堆積状況は他のトレンチとほぼ同じで、貴谷川に向かって緩やかに傾斜しながら堆積する流水堆積が確認されたが、遺物の出土はなかった。

**D トレンチ**

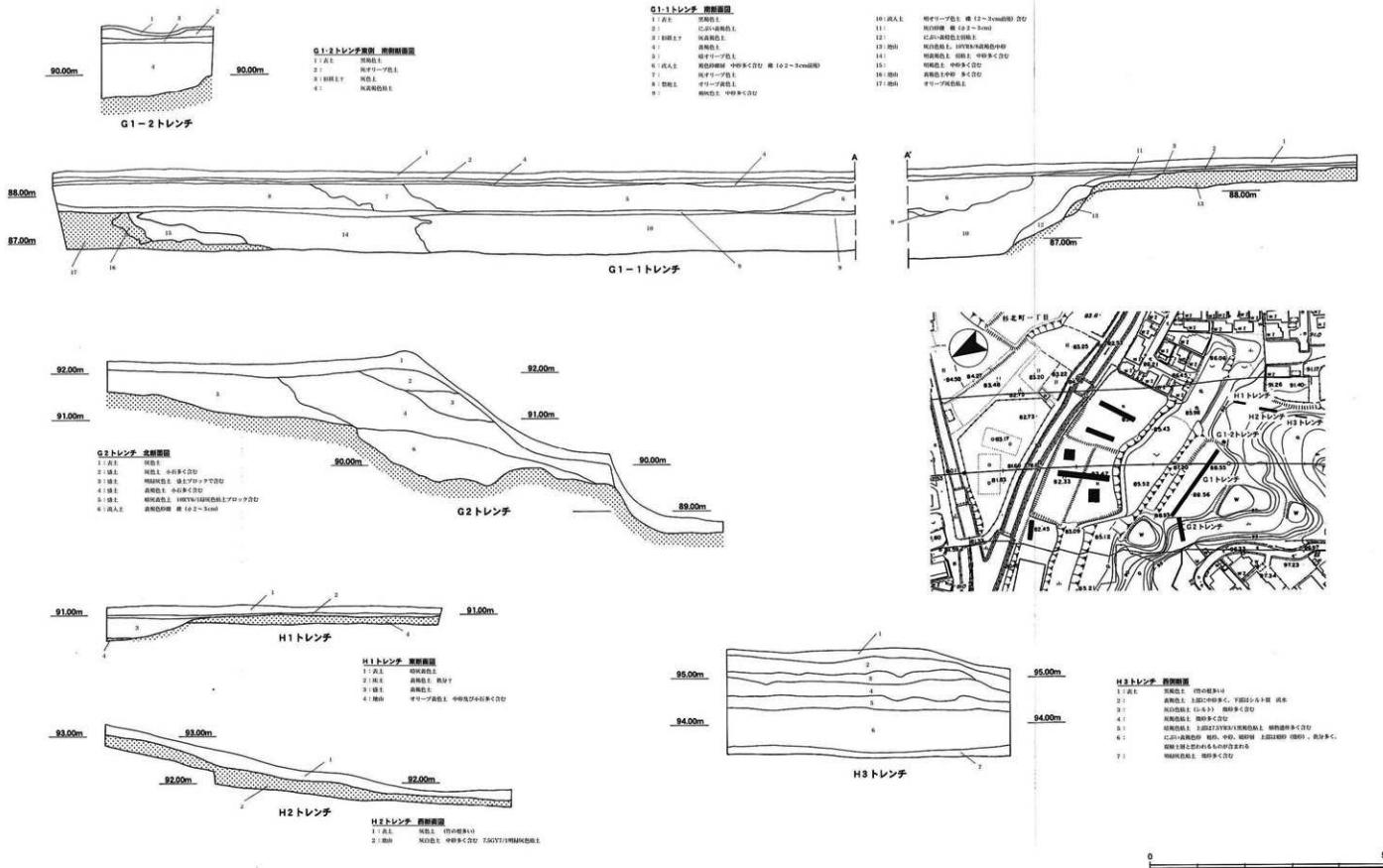
Dトレンチは調査地の北端で、標高約80m付近に位置する。調査地の西側に高さ約6mの盛土があったため、盛土の北側を約5m除去後に1m×10mのトレンチを貴谷川と平行して設定し、旧地表面と思われる高さから約1mまで掘削した。盛土はコンクリート片を多く含む残土で、トレンチの北側では擾乱が多く見られた。

擾乱層を除去すると約20cm前後の厚さで旧耕作土と床土が確認され、以下は粗砂、中砂及び微砂を多く含むシルトと砂礫層が南から北方向に傾斜しながら堆積しているのが確認された。この堆積は粗い砂や礫を多く含み、シルト層も厚く見られることから貴谷川の氾濫による堆積と思われる。砂礫層及びシルト層内から遺物の出土はなかった。





第68図 藤阪大龜谷遺跡・長尾窯跡群 A～F トレーンチ断面図 (S=1/80)



第69図 藤阪大龜谷遺跡・長尾窯跡群 G～H トレンチ断面図 (S=1/80)

### E レンチ

前回調査したAレンチの南側で、標高約83m付近に2m×15mのレンチを西側の谷筋に対して縦断するように設定し、GLより約1.2mまで掘削した。

厚さ約15cmの旧耕作土、床土を除去すると、前回のレンチと同様に西側の谷筋よりの流水堆積と思われる砂礫、粘土、シルトが堆積しているのが確認された。レンチの東側では貴谷川の氾濫堆積による砂礫層がやや厚みを持って確認された。この断面観察から時期は不明であるが、貴谷川の氾濫と谷筋からの流水堆積の切り合いが2回見られる。いずれの層からも遺物の出土はなかった。

### F レンチ

E レンチの約12m南側に2×20mのレンチを設定し、GLより約1.3mまで掘削した。レンチ内の堆積状況はE レンチとほぼ同じ状況で、谷筋から貴谷川の方向に向かっての緩やかな傾斜を持つ堆積である。GLより約1.1m付近まで掘削すると流水堆積（砂礫層）内から多くの湧水があり、レンチの東側では貴谷川の氾濫によるやや厚く堆積した砂礫層が確認された。

出土遺物は旧耕作土内と、約30cm下の砂礫層内より須恵器片が数点出土した。旧耕作土内より出土した須恵器は摩滅した器種不明のもので、砂礫層内より出土した須恵器は杯蓋で歪みが大きく図示できなかった。

### G 1-1・2 レンチ

G 1-1 レンチは標高約88m付近の休耕田内に2×43mのレンチを、谷筋に対して横断方向に設定した。また、G 1-2 レンチは東方向にのびる丘陵縁辺の標高約91m付近で、G 1-1 レンチの延長線上に2×2mのレンチを設定した。いずれのレンチもGLより約1.8mまで掘削した。

G 1-1 レンチは約15cmの旧耕作土を除去すると2~3層の床土が認められ、床土の張り直しが実施されていることが観察された。床土の下には棚田の拡張に伴うと思われる整地土が約60cmの厚さで検出され、その下部に一定のレベルをもった旧の床土と思われる層が確認された。この旧の床土と思われる層以下は他のレンチと同様に、西側の谷筋よりの流水堆積と思われる砂礫、粘土、シルトが堆積し、これらの各層も一定の高さで整地し平坦面が作られ棚田として利用されていたと思われる。

出土遺物は上層の整地土内より須恵器、土瓶器、チャートなどが数点出土した。須恵器は杯身の底部が出土したが、小片で歪んでいたため図示できなかった。

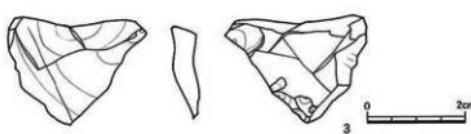
1は土師器の鍋で、外面には煤が付着している。2は口径15cm前後の土師器の焙烙と思われ、外面には煤が付着している。3は緑灰色のチャート剥片で重さ3.22gを測る。



G 1-2 レンチ付近は棚田として利用されていたと思われる地点で、約20cmの表土を除去すると旧耕作土が確認された。以下は約1m前後の盛土（整地層）を除去すると、やや南側に傾斜する地山層に達した。遺構・遺物は確認されなかった。

### G 2 レンチ

レンチは道路予定地の西側に造



第70図 藤阪大龜遺跡・長尾窯跡群 G 1-1 レンチ  
出土遺物実測図 (S=1/4・1/1)

成されている日生長尾台住宅の北東側に位置する。この造成された住宅西側の平坦面から斜面上（標高92~89m）に2×10mのトレンチを設定した。約20cmの表土を除去すると住宅開発に伴う造成時の盛土が、約1.5mの厚さで確認されたが盛土内には多くのコンクリート片が含まれていた。この盛土層を除去すると地山層に達するが、遺構・遺物は確認されなかった。

#### H 1 トレンチ

西側に延びる丘陵縁辺の標高約91m付近に、1×7mのトレンチを設定した。約15cmの表土を除去した段階で地山面を検出したが、トレンチの東側で棚田に伴う整地土が確認された。遺構・遺物は確認されなかった。

#### H 2 トレンチ

H 1 トレンチの約10m西側の延長上に1×9mのトレンチを設定した。約20cmの表土下はすぐ地山面で遺構・遺物は確認されなかった。

#### H 3 トレンチ

ごく最近の土取りによって削平された斜面にて断面観察をおこなった。幅6m、高さ2.4m分を精査したが遺構・遺物などは確認されず、大阪層群と呼称されている古い地層（東側に緩やかに傾斜する海成粘土の堆積）が観察された。

### 3.まとめ

今回の調査地は貴谷川の左岸で、西から東方向に延びる丘陵の谷筋に作られた棚田と、貴谷川の氾濫原上に位置する。

調査地（道路予定地）周辺の地形は近年の宅地開発に伴う造成が両側でおこなわれ、南北方向にのびていたと思われる丘陵の外観はない。しかし、道路予定地内中央に残る丘陵（標高T.P.105m前後）が唯一、丘陵地形の外観を残しているのであろう。

今回の調査地点は丘陵先端の大きな谷筋部分で、G 1-1 トレンチ付近では約45m前後（北西～南東方向）の幅をもち、洪水による流水堆積や貴谷川の氾濫による河川堆積が谷筋の先端部分で繰り返し起こっていたことが確認された。今回の調査で遺構を確認することはできなかったが、調査区東側に設定したA・F トレンチ内の下部と、谷筋の中央部と思われる地点に設定したG 1-1 トレンチ内の流水堆積層内から、少量だが盆地奈良時代の須恵器や土師器などが出土している。調査地の南側で窯跡が確認されていることを考えると、これらの遺物は洪水等によって流れ込んだと思われるが、隣に別の窯跡などの遺構が存在する可能性も十分に考えられる。

（田中）

## 第6節 長尾東地区

### 1. 位置と調査方法

長尾東地区の確認調査は、大阪府枚方市と京都府八幡市にまたがって南北方向に延びる丘陵の西側斜面に位置する。

平成12年度の調査地の標高は約100m前後で、3ヶ所の（A～C）トレーニングを丘陵の尾根部分と谷筋を横断するように設定した。なお、道路予定地の東側はゴルフ場、西側は宅地開発によって削平されているため付近の地形は不明な点が多いが、調査地周辺が標高の一番高い部分であると思われる。

平成13年度の調査地は、平成12年度の調査地の南側に位置する。長尾丘陵を開析する船橋川支流の八田川に向かって北から南へと下降する段丘の縁辺部に立地し、段丘の張り出し部（枝尾根）に3ヶ所の（①～③）トレーニングを設定した。調査地の標高は90～98mである。

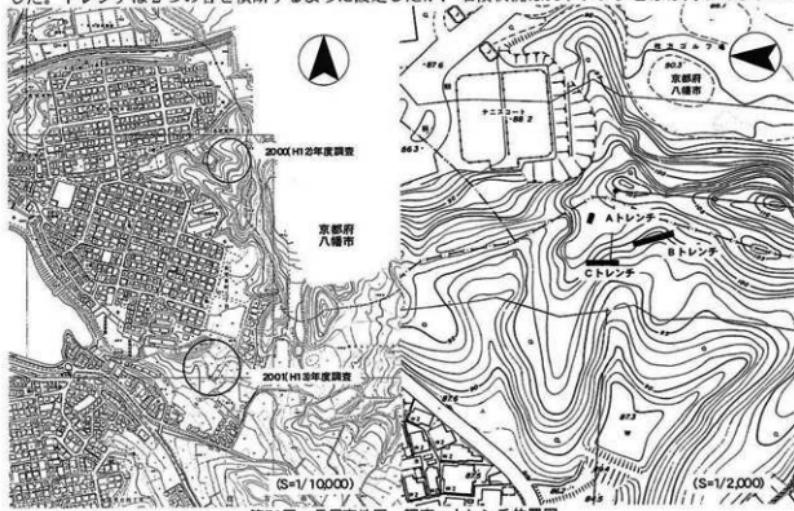
### 2. 2000年度の調査成果

#### A トレーニング

A トレーニングは尾根間を横断するように幅1m、長さ約6mのトレーニングを設定し、約80cmを掘削した。トレーニングの両端は尾根先端に向かって急に立ちあがり、表土は約5cm、下層は砂礫混じりの土と崩落した粘土が流入し相互に堆積する。約70～80cmの掘削で岩盤層の地山になる。

#### B トレーニング

B トレーニングは丘陵より西側に派生する谷に幅1m、長さ約17mのトレーニングを設定し、約1mを掘削した。トレーニングは2つの谷を横断するように設定したが、堆積状況はA トレーニングとほぼ同じであるが、

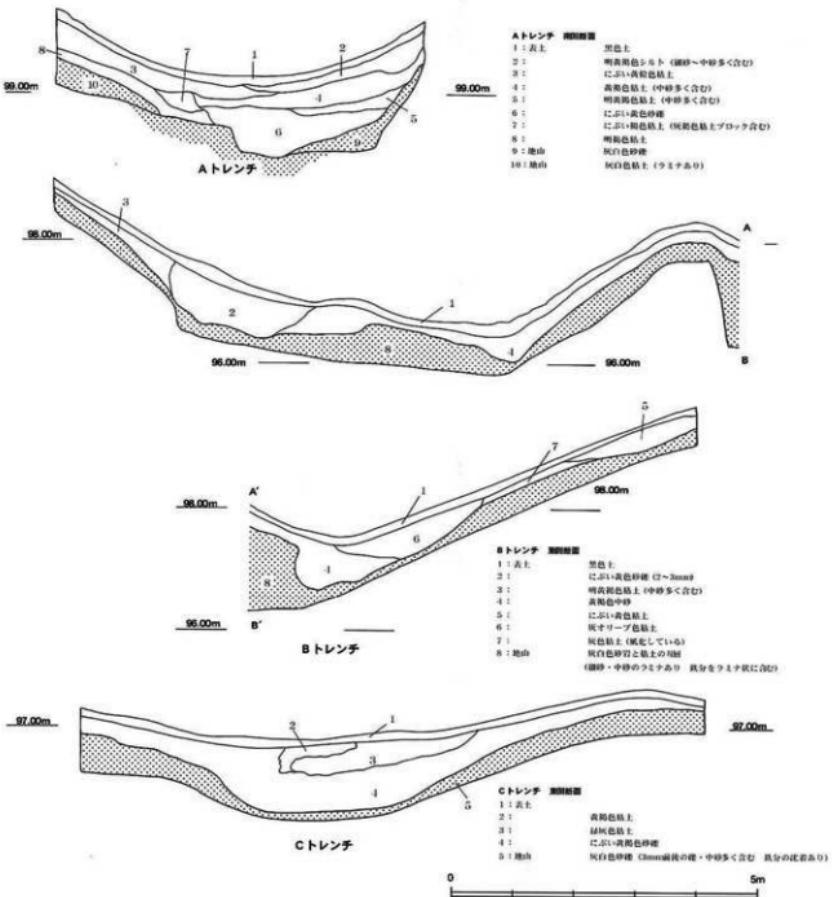


第71図 長尾東地区 調査・トレーニング位置図

東側は粘土層が全体的に多く見られた。

### C トレンチ

調査地区の丘陵より東側に延びる尾根脇部分のやや平坦な地点に幅1m、長さ約10mのトレンチを設定し、約80cmを掘削した。堆積状況は他のトレンチとほぼ同じ状況であるが、地山崩落によるやや大きめの礫を多く含む砂礫が中央部分に堆積している。



第72図 長尾東地区 トレンチ断面図 (S=1/80)

### 3. 2001年度の調査成果

#### ①トレンチ

段丘の張り出し部に全長33m、幅2mのトレンチを設定した。標高はT.P.98m前後である。地表面より草木の根を含む表土が5~20cm堆積していた。トレンチの2、3箇所で深さ60cm程度の落ち込みが断面観察時にみられたが、埋土は表土と同じであり、樹木の根の部分に当たると考えられる。表土を除去すると基盤層が現われた。基盤層は砂と粘土の互層であり、北側に向かって斜方向に下降する。

この付近の基盤層は大阪層群の精華累層と考えられ、砂礫と海成粘土の互層である。この辺り一帯は長尾捲曲と呼ばれており、捲曲部の大坂層群は北西方向に30~50°の傾斜を呈している。この地点のトレンチ断面では10~30°北に傾いていた。

#### ②トレンチ

尾根先に全長40m、幅2mのトレンチを設定した。標高はT.P.95m前後である。地形は北から34mの地点で南方向に60cmの比高差をもって段落ちする。それよりも南側は、段丘平坦面の張り出し部に向かって平坦にのびている。

段落ちの上の部分では畑の畝と畝間溝が残存していた。段落ちの下の部分の表土は草木の根を多く含んでいた。ともに地表面より表土が20~40cm堆積し、その下は基盤層である。

基盤層は①トレンチと同様の状況を示すが、南端では褐灰色の比較的締りのよい粘土層が砂層を挟んで2層、斜方向に下降していた。また、トレンチ中央部では、基盤層は浅いV字状の落ち込みに中砂と粗砂が互層となって堆積していた。これは杉中貴谷遺跡でもみられたように、大阪層群の軟らかい部分が浸食を受け、自然に崩壊した部分に土砂が流入したものと考えられる。

#### ③トレンチ

尾根先に全長32m、幅2mのトレンチを設定した。標高はT.P.90m前後である。地形は北から1mの地点で南方向に1mの比高差をもって段落ちし、20mの地点で再び南方向に30cmの比高差をもって段落ちする。地表面には畑の畝と畝間溝が残存していた。

トレンチの北端では地表面より1.7mの盛土と、厚さ10~20cmの旧表土が堆積していた。トレンチ中央部では地表面より80cmの盛土と、厚さ40cmの旧表土が堆積していた。トレンチ南半部では地表面より20~30cmの表土が堆積していた。いずれも、その下は基盤層である。基盤層は①・②トレンチと同様の状況を示す。

盛土を観察すると周辺の基盤層がブロック状に入っていることから、北の高い部分を削平して、その土を南の低い部分に盛土して平坦面を形成し、畑として利用したと考えられる。③トレンチ北端では、このブロック土を含む盛土上にアスファルト片等を含む山土が堆積しており、これは他地域の土を客土したものと考えられる。

### 4. まとめ

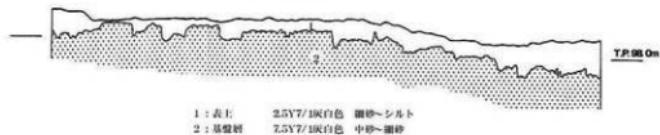
長尾東地区では平成12年度に3ヶ所のトレンチを設定して調査を実施したが、いずれのトレンチからも遺構・遺物は検出されなかった。平成13年度には、その南側に3ヶ所のトレンチを設定して調査を実施したが、表土を除去すると基盤層が現われ、いずれも遺構・遺物は見あたらなかった。

(田中・河端)



第73図 長尾東地区 トレンチ位置図 (S=1/2000)

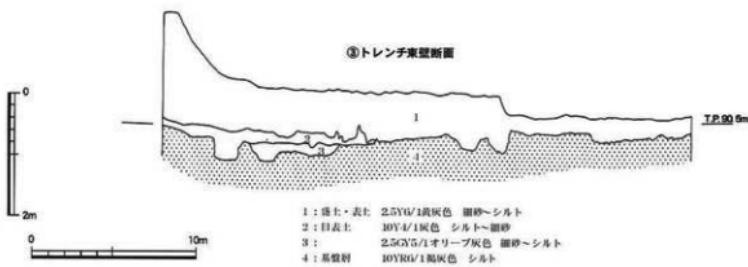
①トレンチ東壁断面



②トレンチ東壁断面



③トレンチ東壁断面



第74図 長尾東地区 トレンチ断面図 (縦:S=1/80・横:S=1/300)

## 第3章 分析・検討

### 第1節 讀良郡条里について－寝屋川市域の讀良形条里の再確認－

条里制は、大宝律令（大宝元年（701））を基とする古代律令国家の土地制度である。戸籍に登録された農民に口分田を与える班田制の実施に伴い、土地区画と表示の方法も規格化された。一辺が1町（約109m）の方形区画を1坪とし、 $6 \times 6$ 坪を1里として数えた碁盤目上に繋がる区画を基に、一方の並びを条とすれば他方の並びを里とし、何条何里何坪、またそれ以下の単位で区画の位置表示ができるものである。

寝屋川市・四条畷市・大東市にかけての地域は、生駒山麓から流れ出す讀良川をはじめとして、楠根川、岡部川、清滝川、江蟬川、谷田川など、一定区間は西への正方向に流れる川が多い。これらは古代条里制水田の里界・坪界を流れていたものではないかと予測がつきやすい状況にある。周辺部は現在、主要地方道八尾枚方線、国道170号（大阪外環状線）が縦断し工場や住宅地の開発が進行しつつある。しかし、この条里制に起源をもつとされる正方位の方形区画が山麓沿いに整然として続くことが地域的な特徴となっている。「讀良郡条里遺跡」（大阪府教育委員会、寝屋川市教育委員会）、「讀良郡条里構造」（四条畷市教育委員会）として文化財分布図に掲げられる所以である。

本稿では、本地域の区画水田を“条里形区画水田”として捉え、まず、本地域の水田景観が古代讀良郡の条里制構造であるとされた研究史を通じて、郡内の施工単位を捉えることからはじめたい。いずれは、水利などの歴史関連調査、また、埋蔵文化財調査の成果などによって、これらの成立過程を探りたいものである。

#### 1. 研究史

条里制に関する服部昌之氏（大阪市立大学教授）の指摘がある。条里制の地番法が確立されたのは8世紀中葉であり、大阪府下での分布状況を見れば、近接した地区にあっても施工単位や施工時期に相違があると考えられている。また、坪の数詞地名があっても、「古代のままの遺存とみるのは不自然であり、後世になってから条里の坪地番に準拠して地名を再編したものと思われる」と推測された例さえある（服部；1990）。しかし、その坪名再編過程を歴史的に追求された調査・研究例はほとんど知られていないのが実状ではあるが。

本地域では寝屋川市から大東市にかけて見事に1町間隔の区画水田が並んでしまった結果、古代の条里制としての評価が変わることはなかった。現況の方形区画を河内国の条里制造存と認識した研究については幾人かの先駆があり、ここでは讀良郡について直接的に言及されたものののみを挙げる。讀良郡とは、北河内地方の古代から存する郡の一つで、現寝屋川市～大東市に及ぶ範囲である。明治29年に交野・茨田・讀良の3郡が合併し北河内郡となるまで続いた行政界である。茨田郡は讀良郡の北に接し、これは讀良郡との関係で後に触れるところがある。

#### 本地域の条里制研究のはじめ

本地域の耕作地域に残る方形区画が条里遺制とされたのは、大正11年、井上正雄氏が豊野村（寝屋

川市) 大字秦に、「四の坪・五の坪・六の坪・八の坪といへる小字は、條里制当時の遺構なるべし」と記されたのがはじめである(井上; 1922)。

井上氏は他に四條村(大東市) 大字北條・大字野崎、甲可村(四条畷市) 大字岡山・大字南野・大字中野の項で条里制の存在を指摘されている。また、井上氏の甲可村大字岡山の項には、平尾兵吾氏(大阪府史蹟調査委員、四条畷中学校教諭)の現四条畷市「南野・中野・北野が条里制当時の6・7・8条にあたる」との教示を紹介されている。平尾氏がすでに大正年代から条里制調査にも着手されていたこと、さらに、提示された四条畷市の条数も讀良郡条里として妥当性があり、讀良郡とその南に続く河内郡との都界が今に生きると認識されていたことがわかる。平尾氏は、昭和6年刊の『北河内史蹟史話』に条里制について少し記述されるが、抄書のため体系的な内容ではない。しかし、「讀良郡の旧条里制」として捉えられた。平尾氏の条里制に関する成果は、昭和31年版『寝屋川市誌』の刊行まで待つことになる。

次いで、昭和10年、天坊幸彦氏(浪速高等学校講師)は、大阪府下の条里制研究のもと、讀良郡条里についても触れられた。まず、河内国の条里の条は数字で、里は土地の名によって示すものであると指摘された上で、北河内郡の項に「旧讀良郡に属する遺制」として井上氏が掲げた秦里的坪名をあげている。以後、昭和30年代はじめまで、秦里は高宮・小路里とともに讀良郡では坪名がよく遺存した里として紹介されることになる。天坊によれば、秦里の八ノ坪は二十八ノ坪の二十が消失したもの、五ノ坪、六ノ坪は十五ノ坪、十六ノ坪の十が消失したものであり、本地域の坪並は東南隅からはじめ北へ上の千鳥式に數えたもの(後述する讀良形)であること、また、野崎の北の四條の地を基準とし南へ逆に数えると、一条が河内郡との境に相当するとの記述もある(天坊; 1935)。天坊氏は、昭和22年、この内容に少し追加された形で改訂版を発表されている(天坊; 1947)。秦里の坪割も「寝屋川附近條里圖」として図示された(第75図)。すなわち、地元研究者である平尾氏の体系的な発表文がなかったために、讀良郡条里研究の基は天坊氏によって敷かれたことになる。

なお、天坊氏は、現在の大東市北条、南条の呼称が讀良郡の南北に対応すると考え、位置的に疑問にされているが(天坊; 1947)、これについては大越勝秋、東 宏両氏をはじめ、地域的呼称とされている(東 宏氏の説については後述)。

昭和15年に島 之夫氏が大阪府下の条里制を紹介された(島; 1940)。四条畷の四条に注目し周辺部条里の範囲を記述されるが、郡単位の条里制として捉えられたものではなかった。

大越勝秋氏(大阪府立岸和田高等学校教諭)も昭和20~40年代にかけて大阪府下の条里制関係史料・資料を收集し、体系的な条里制研究を目指された。具体的には、①土地台帳・地籍図調査、②地形図調査、③古記録の文献調査・伝承地名の民俗調査など、条里制に関わる基礎調査を実施された。河内国の条里制については、昭和27年度文部省科学研究奨励金による「河内國の條里制」をはじめに、これを改訂する形で『地理學報』を、次ぎに『學報』の改訂版として『社會科研究』に成果を順次発表されていった(大越; 1952~1957、1966~1971)。うち、讀良郡に関しては、『地理學報』4・5(1953・1954)、『社會科研究』第10号(1967)に詳しい。

大越氏は、河内での条里坪名遺存地域は東高野街道沿線と大和川流域の2地域に多いと指摘されている。讀良郡条里復原図の作成は、大越氏の『河内國の條里制調査』に全体図2葉が掲載されたのがはじめてである(孔版)。また、河内国の条里制復原図は、『社會科研究』第9号に掲載された(大越; 1966)。本稿では、『社會科研究』第10号に掲載された讀良郡条里復原図を示す(第76図)。なお、讀良郡の条

数について大越氏は「南の河内郡界から北に條を数え、茨田郡との境界まで12條となる」と記述される（大越；1954・1967）。

また、大越氏は、歴史史料の中の条里名称に関する調査などをされているが、茨田郡・讚良郡にはそれがまだ見つかっていないということも指摘されている（大越；1957）（注1）。

#### 讚良郡条里制研究の新展開

しかしながら、大越氏の成果が『地理學報』でまとめられつつある最終段階の頃、平尾兵吾氏は昭和31年に刊行された『寝屋川市誌』の高宮庵寺の項で「条里制と高宮庵寺」を加え、成果をまとめられた。これは、昭和41年に刊行された『寝屋川市誌』に改訂を加えない形で再録された。すなわち、『寝屋川市誌』は、まず、昭和31年版が刊行され、次いで寝屋川市への1村幅に入合わせ、内容が多少異なる同名の昭和41年版が刊行された。現在販売されているのは、昭和41年版の方である。

昭和31年版の条里制の項は、東・光治氏が短くまとめられ、從来の研究の延長上有る。しかし、高宮庵寺項の平尾氏の記述は、讚良郡条里制研究にとってはまったく新しいものであった。昭和41年版の「条里制」の項は、平尾氏の内容にさらに新らしい史料を加え寺前治一氏がまとめ直され、茨田郡との境らしきものを明確にした寝屋川市域内の条里復原図が作成されることになった（第77図）。

平尾氏が歴史史料と共に検討された内容は、若き日の寺前氏の小字名調査に触発されたものであったようである。かつての井上氏、平尾氏の関係を彷彿させられる。平尾氏は、条名称が讚良郡は南から、茨田郡では北からと「その地の主流河川の流向によって決せられる」と指摘された。南からの流れは旧大和川、北からの流れは淀川のことである。坪名称も同様に、讚良郡は東南隅から、茨田郡は東北隅から南北軸方向に千鳥式に数え、寺前氏は41年版でこれらを「讚良形」、「茨田形」と区別された。平尾氏は、秦里と高宮以南の里的坪並の違いが「これは一面讚良、茨田両郡の昔の境界にふれうるかも知れぬ（高宮、秦の坪の数え方は寺前治一君の調査報告による）」と、昭和31年版『市誌』で、すでに指摘されていたのである。

新説の根拠になった秦里については、井上氏が記述された坪名称には変化はない。しかし、秦里全体の地形図に対応した位置関係は天坊氏、寺前氏で全く同じであるのに対し、坪名の置き方は全く違うものとなっている（第84図参照）。寺前氏は、4はもとの14坪、5はそのまま、6はもとの16坪、8は天坊氏と同じく20を失っているが場所は違う、「北後」は「北の五=25」、また、草書体「廿」を「北」に、「五」を「後」に転書した「廿五」の意ということで、秦里の坪並は讚良形ではなくて、実は、茨田形に無理なく数えるものであることを平尾氏に追記された（注2）。

さらに、平尾・寺前両氏は、坪並の違いは所属郡の違いによるのではないかということを史料でも検討された。秦が讚良郡ではなくて茨田郡に含まれるという提示史料は、次のものである（史料②、③については末尾の参考資料参照）。

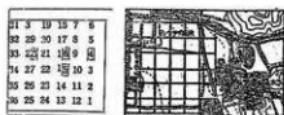
平尾氏…①「小松寺縁起」の保延五年（1139）奉加帳銀分、久安元年（1145）寄付諸郷名中の2史料  
によれば、秦は高宮庵の所属郷とは別で、その他の諸郷に入っている。

寺前氏…②「倭名類聚抄」（A.D.930年代）では秦が茨田郡に属していた。

③「延喜式神名帳」（A.D.905）では秦の神社である細屋神社が茨田郡の項に含まれる。

現在にみる寝屋川と秦集落は後世に移動したものであるかどうかを、将来、検討する必要はある。しかし、以上の史料からみれば、少なくとも平安時代の10世紀前半はもとより、12世紀中葉においても

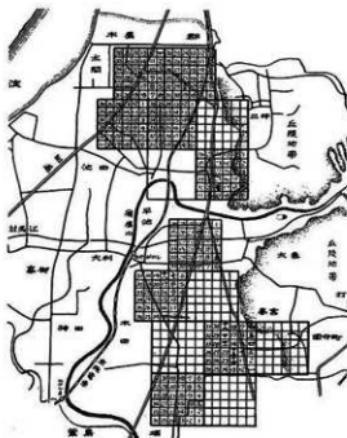
第1節 調良郡条里について—寝屋川市域の調良形条里の再確認—



第75図 寝屋川付近条里図(天井:1947)



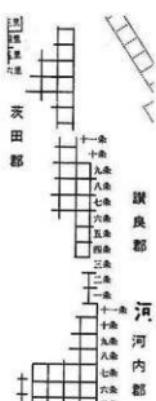
第76図 調良郡の条里復原図(大屋:1967)



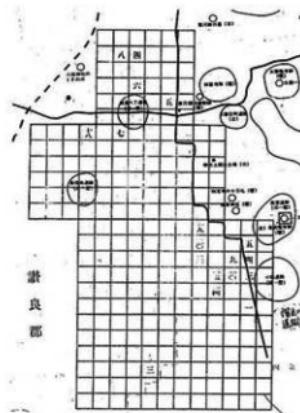
第77図 条里制度原図(寝屋川市役所:1966)



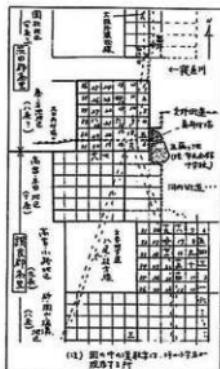
第78図 条里制度原図(四条畷市役所:1972)



第79図 大阪府下の条里制(大阪府:1990)



第80図 寝屋川市文化財分布図(寝屋川市役所:1987)



第81図 条里復原図(小島:1998)

秦が茨田郡に含まれていたことは確実である。そして、以上の史料が意味するところが、現況の地割を坪名の数え方で区別し、讃良形、茨田形の2種に分類できる結果と一致する点が平尾氏、あわせて寺前氏によって指摘されたのである。これによって、坪の数え方が全く逆になって揃う高宮以南が一つのまとまりであり、これが讃良郡条里の範囲として古代・中世にも生きていた可能性は高いと考えられたのである。讃良郡条里は、成立時期は不明であるが、10条であったことがまず平尾氏、次いで寺前氏によって認識されたことになる。

対して秦里を茨田郡条里とすると、秦里の次は、寝屋川を挟んで約200m北に国松の条里が続く。この間隔は往古の寝屋川の川幅を物語るものではないかと寺前氏は推測されている。なお、これら北に続く茨田郡条里は、明確な坪名遺存がないために詳細が知られていない。今後は、讃良郡条里と周辺部条里との比較研究・調査が望まれる。また、高宮・小路里の一坪分東の坪境の南北道は、式内社である高宮大社御祖神社へのおそらく参詣路となっていたものとの紹介もすでに平尾氏は指摘されている。  
おおもりみねや

以上の結果は、『市史』が担う地域に密着した考証の重要性を再認識させるものであった。

### その後の讃良郡条里制研究

双方の『寝屋川市誌』のあと、『四条畷市史』(昭和47年)、『大東市史』(昭和48年)、寝屋川市教育委員会作成『寝屋川市文化財分布図』(昭和62年度)、『大阪府史』(平成2年)と続き、本地域の条里制が紹介され、復原案が提示されている。いずれも「讃良郡条里は大東市中垣内を第一条目とする」という共通認識はある。しかし、復原された南北方向の並びを決める条の数に相変わらず各説あり、さらには東西方向の並びを示す里境の位置が微妙に食い違っているのが疑問としてあげられる。

**条数** まず、讃良郡条里の復原条数の違いから述べる。山口 博・近藤 寿両氏は『四条畷市史』において讃良郡条里の区画割を11条と數えている(四条畷市役所; 1972, 第78図)。近藤氏は、「大越勝秋氏の研究による」と明記されている。山口氏も「条里制研究家大越説によれば」の記述が見られ、いずれも大越氏の研究が踏襲されていることがわかる。山口氏は讃良郡の範囲について、「条里を冠する地域は、明治以降の村落、或は大字地区を意味すると考えて間違いない」と記述もされている。大越氏と同意見である。ただし、大越氏は先に述べたように明確に12条とされてはいたが。

『大東市史』の条里制は、津謙俊文氏(当時・愛泉女子短期大学)監修のもと、東 宏氏(当時・南郷中学校教頭)が担当されている。讃良郡条里は中垣内を基点とし、「寝屋川は八条が四条畷市と並び、九条・十条と高宮に至った」と記される。11条や12条との断言は回避されている。平尾、寺前氏の名前や『寝屋川市誌』の出典の記述はないが、讃良郡条里制が10条との説は一応認識されていたのだろうか。大東市のうち、2、3条が南条、4、5条が北条と方位条名に変化したのは、この地域を通つて東高野街道が利用され始める平安後期律令制弛緩後と考えられている。南条、北条の名称が讃良郡条里に関するものかと天坊氏が先に疑問にされたのはこの箇所であった。

なお、東氏は、条里制起源の大化改新以前説擁護者である。本地域の古墳時代において渡来系氏族の多いことに鑑み、「土地開拓に於ても計画的に整然とした地割をつくり出す能力は当時として彼ら以外には考えられない」とし、「既往の事実・慣行となった地割が整理され条里制となったと唱く人も多い」と記されている。条里制は大規模開発による土木工事を伴うものである。したがって、古墳時代に何らかの形で実施されていた区割が古代に条里制区画として利用されたのではないかという考え方である。

以降、讃良郡条里については、昭和61年の『大阪府の地名Ⅱ』河内国・讃良郡の項に10条と記載さ

れる。また、『大阪府史』では服部昌之氏が条里制をまとめられ、本稿研究史のはじめに記したような条里制の年代観に関する問題点を示唆されたが、讀良郡条里制については11条で復原されている（大阪府；1990、第79図）。『四条畷市史』を参考にした意の記述がある。『府史』においても寺前氏の有力指摘が認識されていなかったことが理解できる。

**里の並び** 寝屋川市教育委員会が「寝屋川市文化財分布図」を作成、讀良郡条里の範囲を復原、周知の遺跡とされたのは昭和62年度である。坪界線が引かれ遺存した坪の数詞地名は示されるが、具体的な条里復原を目指したものではなかった（第80図）。しかも、郡界線が近代のもので引かれているため、分布図の秦里は疑問なく讀良郡に含まれることになってしまった。寺前氏の有力指摘は、膝元でも生かされなかつたのである。寝屋川市文化財分布図は、「条里遺跡」の範囲を示すものの意で作成されている。なお、大阪府教育委員会の『大阪府文化財分布図』も寝屋川市教育委員会資料を踏襲されているため、範囲の表示のみに留まっている（大阪府教育委員会；2001）。

以上の寝屋川市教育委員会、また、旧讀良郡内所属各市の市史にみる条里復原の不統一さに拮抗されたのが寝屋川市秦町在の郷土史家小島博子氏である。小島氏は、『寝屋川市史』第8巻民俗編（平成3年刊）で高宮地区調査を担当されたため、讀良郡条里制についても关心をもたれることになった。当時の自治会長であった中野一郎氏（故人）をはじめ地元の協力を得られ、平成10年に成果を発表された（小島；1998）。

小島氏の復原案は、寺前氏の復原案とは10条高宮里の里並びが1坪分東にずれ、秦里が1坪分西へずれる改訂案である（第81図）。しかし、平尾氏、寺前氏の郡界案については再認識を促された形になっている。讀良郡条里の復原は、いよいよ、里並びの検討の段階に入ってきたのである。

#### 讀良郡の条についてのまとめ

平尾、寺前両氏によって讀良郡条里と認識された条里は10条である。また、讀良郡条里の名称は、地域名で呼ぶとされる。本稿に関係する条の地域名をあげておく。

1条…大東市中垣内	2条…大東市寺川（南条）	3条…大東市野崎（南条）
4条…大東市北条（四条）	5条…大東市北条	6条…四条畷市南野
7条…四条畷市中野・藤屋	8条…四条畷市砂・岡山（北野）、寝屋川市堀溝	
9条…寝屋川市高宮・小路	10条…寝屋川市高宮	
(11条：茨田郡条里x条)…寝屋川市秦		(12条：茨田郡条里x-1条)…寝屋川市国松

また、研究史で示した讀良郡条里の条数10~12条の3案を、再度、まとめ直す。

**12条案** 近世以降の讀良郡の範囲を想定したもの。明治29年に北河内郡中にまとめられてしまつた讀良郡の最も北に位置するのは豊野村である。豊野村は、小路・高宮・秦・太秦・国松の旧5大字を含む。秦・太秦の一部、国松は、寝屋川の北に所在する。したがつて、同じく条里制の遺存とされる国松条里を含んで12条と数えたもの。（大越）

**10条案** 条里制が施行された古代の讀良郡の範囲を証明されたもの。東南隅から南北軸に沿つて坪並を数える地域は讀良郡条里、東北隅から千鳥式に数える地域は茨田郡条里と考えられた。秦里より以北と、高宮里の以南とでは明らかに坪並の数え方が違う。倭名類聚抄（和名抄）では茨田郡に「幡多郷」があり、延喜式神名帳でも秦の「細谷神社」が茨田郡に含まれている。坪並呼称調査と歴史史料の連動によって秦里は茨田郡条里に所属する耕作地であったと考えられるため、讀良郡条里は10条と数

えられたもの。(平尾・寺前・東?・平凡社『大阪府の地名』・小島)

**11条案** 現在の寝屋川を讃良郡の北限に捉えられたもの。茨田郡条里が大きな空白を超えて秦里一つを加えることに不自然さを感じ、大川の流路が郡境を区切ると考えられたのではなかろうか。したがって、10条高宮里の北に接続した形になっている秦里を讃良郡に含め、11条と数えられたもの。(山口・服部・寝屋川市教育委員会文化財分布図もこれに繋がる。)

#### 地元での調査・研究動向

『市史』民俗編完成後的小島氏の動きは、高宮を中心とした地元研究者の意識を触発した。平尾氏、寺前氏が提唱された古代史料による讃良郡条里の範囲の推測は、地元では高い評価が得られるようになった。高宮の五藤池は現在上池が埋め立てられ、下池も昔の姿は変わってしまったが、西堤から流出したカワ(中樋川)の水が高宮地区の水田を潤すことになる。西の正方向に流れるこの水路が讃良郡条里10条高宮里の北端にあたり、かつ茨田郡との境である点に重要性が考えられるようになったのである。

字名調査や史料収集など、地元に残る史・資料から讃良郡の条里制に留まらず地域の歴史を把握しようとする努力が、高宮財産管理委員会長白井三千夫氏を中心に続行されている。これらの成果は、平成10・11年に『ふるさと高宮いまむかし』、『同 総資料史編』として刊行された。

## 2. 「讃良形条里」の施工範囲

周辺部の方形区画は、寝屋川市の北にも、南にも続いている。したがって、旧河内郡との境は現大東市と東大阪市の市境にあることに議論はなく、北の限りについては以上のように異なる意見があることがわかった。平尾・寺前両氏の有力案があつても、古代史料の内容を即、現在の地形図に当てはめることが正解かという疑問がやはり存在する。先にも述べたが、川、集落、郡界は動いた可能性があったかもしれないからである。本稿では、平尾・寺前両氏が高宮以南で確認された条里を「讃良形条里」と名付け、一つの施工単位として捉える。また、秦里を仮称「茨田形条里」としてこれも一つの施工単位の一部とする。本項では、以上に認識された平尾・寺前氏の施工単位の再確認を行い、旧讃良郡地域における条里形区画水田の施工単位、あるいは再編単位の抽出例として提示したい。

#### 小字名による坪並からみた讃良形条里の復原修正案の提示

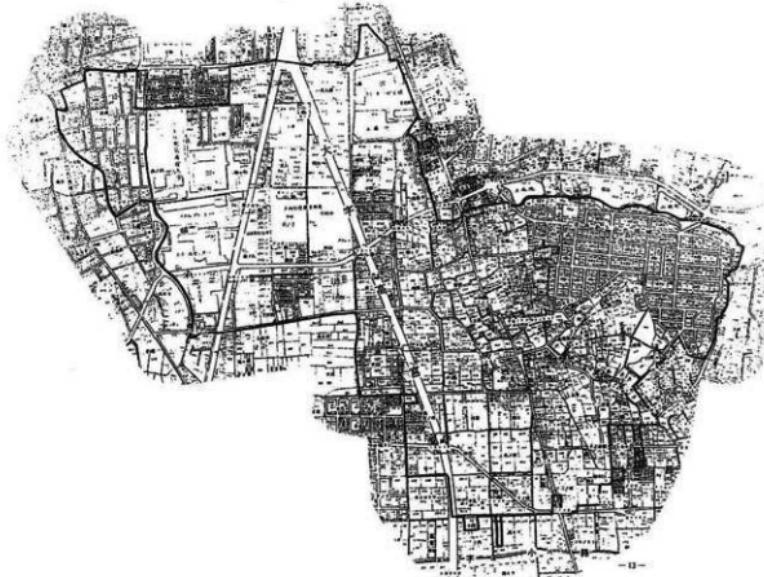
本稿作成にあたり、寝屋川市教育委員会が作成された小字図を確認することが、茨田郡条里=茨田形条里の秦里、また、讃良郡条里=讃良形条里が広がる範囲での里・坪名確定にとってまず重要ではないかと思い至った。すなわち、現在に残る区画と、小字名に反映される坪名称によって、従来の研究者が確定・統一できなかった復原案を整理する次第である。ただし、これが何時の時代に整備されたものかの検討は今後の課題としたい。

これは、先に挙げた地元の刊行書『ふるさと高宮いまむかし』、『同 総資料史編』に掲載された以下の2史・資料が、高宮地区(讃良郡条里9・10条)の字名(=坪名)復原の基本資料であることが確認できたからである。したがって、以下はこの9・10条を中心に秦里を加えた範囲で検討を加えたい。なお、この3里分の復原案を対比しやすくするために略図を作成した(第84図)。

①高宮地区「明和年代村絵図」(高宮地区個人蔵)(第82図)



第82図 明和年代村絵図(高宮地区)



第83図 寝屋川市教育委員会作成大字高宮小字図

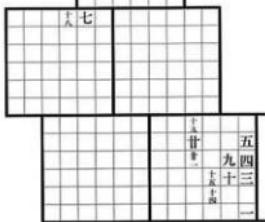


1:天坊幸彦(1947)



八

七



2:寺前治一(1966)

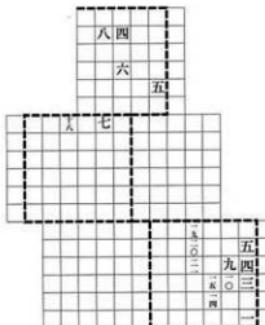


八

七



3:大越勝秋(1967)

茨田郡条里  
泰里△讀良郡条里10条  
高宮里B讀良郡条里9条  
高宮・小路里C

4:寝屋川市文化財分布図(1987)



八

七



5:小島博子(1998)

A

B

C

36	5	8	13	12	1
35	23	27	29	2	
34	27	22	15	10	3
33	28	21	2	29	4
32	29	20	17	8	5
31	30	19	7	6	
32	29	20	17	8	5
33	28	21	16	9	4
34	27	22	15	10	3
35	26	23	14	11	2
36	25	24	13	12	1

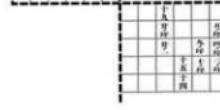
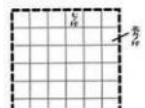
① 1事に八ノ环あつた  
(小島博士著)

漢数字 小字名に遺存した坪名

各執筆者確定里界線

今回付加した推定里界線

31	30	1	15	7	6
32	29	20	17	8	5
33	28	21	16	9	4
34	27	22	15	10	3
35	26	23	14	11	2
36	25	24	13	12	1

6:寝屋川市教育委員会作成小字圖  
(=今朝報原修正案)

7:明和年代村絵図(18世紀後半)

A

B

C

『ふるさと高宮いまむかし－統資料史編－』に紹介された「明和年代（1764～1772）村絵図」は、讀良形条里10条高宮里、9条高宮・小路里の高宮分の小字名、上・中・下田の別、面積を書き上げた坪付絵図となっている。絵図に年号は付されていなかったが、図中の村役名から明和年代かと推定されたものである。なお、9条高宮・小路里のうち讀良川沿いの6坪分は小路村領のため、絵図にはない。

## ②寝屋川市教育委員会作成小字図（大字別）（第83図）

寝屋川市教育委員会は、寝屋川市文化財分布図（昭和62年度）の作成に先立つ昭和50年代に、市域内の旧大字別に小字図を作成している。切り図（工図）を集成し、聞き取り調査も加えて地番を確定した上で全市分の地番図を作成、次に、基本的には明治20年代に作成された旧土地台帳の小字名をこの図に引き写し、小字別に色を塗り分け、小字の範囲図となるように仕上げられた。土地台帳の小字名の他に通称地名などの聞き取り調査も加えられ、このための台帳も作成されたという。当初は市内全図の一枚物で作成されたが、見やすさを考え、平成2年度に大字別に編集し直された。

以上の2史・資料の坪並に関する小字名を単純に抽出した（第84図－6・7：漢数字）。ともに小字名は、ほぼ一致する。さらに、第84図－6に坪並數詞名を付し、これによって里界線を加える。すなわち、出来上がったものが、今回提示する讀良形条里9・10条、及び茨田形条里のうち秦里のみの復原修正案である。

まず、上記2史・資料の小字名を、市教委、小島氏の2図と対比する（第84図－4・5）。9・10条高宮里の小字名は、市教委、小島図とともに、多少の脱落はある。しかし、10条の「北五」はどちらも欠になっている。北五は、9・10条高宮の両里に五ノ坪が存在するために、北、南を区別するための呼称となったのではないか。10条の七ノ坪は、9条ではないためにそのまま呼ばれていたのではないか。秦里の小字名は、北後=25が市教委・小島図とともに理解されていなかったようである。なお、10条高宮里の七の左に十八の坪名が存在するのは寺前・大越・小島図に共通するが、市教委小字図、明和年代村絵図にはない。資料の出所を知りたいものである。

以上からみれば、秦里の坪並呼称が高宮里以南とは反対になることが理解できる。茨田形条里と讀良形条里の区別はやはり有効であることがわかる。また、高宮10条の里界線が市教委=小島氏復原図の1坪分東に寄り、高宮9条の里界線に揃うことわかった。加えて、『四条畷市史』掲載条里復原図（第78図）をみると、寝屋川市から四条畷市まで合わせて5条分の里界軸が揃うことは確実らしいということになった。今回は、四条畷市、大東市域内での検討ができなかったのは残念であるが、一つの大きな単位として（一郡の条里制として）讀良形条里の軸線が揃うのは望ましいものである。これによって、秦里ないし周辺との対比がより明確になることがわかるからである。

今回、現在失われゆく地割と小字名を記録し文化財行政に役立たせる目的で作成された小字図（寝屋川市教育委員会）が非常に役立ったことをさらに強調しておきたい次第である。

## 3. 今後の課題

今回、讀良郡条里の研究史整理を通じて近世の坪付絵図と近代以降の小字図に着目し、寝屋川市域内に限る讀良形条里の施工状況を再確認することになった。また、秦里は茨田形条里に分類できることも

確認できた。ただし、現在、秦・高宮の集落界は、中樋川の1坪分北にある。この点では、集落範囲に変遷があったのか、また、集落とは別に水田は規則的に区画されたのかなどが今後の課題である。また、今回は、淀川・寝屋川流域としての治水関係や、西側低湿地域の新田開発との関係などを把握することができなかった。里並び関係の検討は、新たな問題を提示できる可能性を秘める。

また、条里区画の施工を考えるとき、寝屋川とともに讚良川、清瀧川流域など、河川流域の開発状況は非常に重要である。いずれも、太秦庵寺、高宮庵寺、讚良寺、正法寺、龍尾寺、また、細屋神社、高宮神社、高宮大社御祖神社、津津神社、國中神社といった古代の寺社が立ち並ぶ。郡衙の位置も重要である。これら条坊制など条里区画を規制するものとの関係も検討材料である。

一方、讚良郡条里遺跡範囲内の耕作地の埋蔵文化財調査は進んではない。本地域での条里制の施工年代も明らかにはされていない。第二京阪道路や四条畷市部屋北遺跡の調査など範囲内の遺跡調査に期待したいものである。

以上のように本稿では、条里形区画水田の理解は、郡界の議論とは別に、茨田形、讚良形など、まず、地域内の水田タイプの抽出に務めるのが先決との立場をとった。今後は、広範囲での郡界と集落関係を含めた歴史史料や考古学資料の増加に期待しつつ、これら単位の歴史的意義を探る調査の実施を望みたい。(井藤)

注 1) 大越氏が残された成果・資料・叢書などについては、岸和田市立図書館に「大越文庫」として一括整理、保管されている。目録の出版もある(『大越文庫目録』岸和田市立図書館年報第8号 1985)。今後の条里制研究においては、是非とも実際の目を通していくべき資料である。

2) 天功氏が調査された地名の位置関係は、寝屋川市教育委員会作成小字図と一致しにくい。小字名の置き方は、切り図(工図)に記載された地番の字名を土地台帳で確認していくものであるが、この作業は、昭和36年作製1/3,000地形図に落とし、さらに1/2,500地形図にも落とし直されているのがより好ましい。しかし、これら地形図が作成されるまでは、地図上に位置を正確に落とすことは難しかった。昭和36年以前の調査については、この点で調査の見直しが求められよう。

\* 文中氏名の( )内の肩書きは、すべて、文献発表当時のものを表示した。

#### 《参考史料》

延喜式神名帳 卷九 (A.D.905: 延喜5)

讚良郡六座	大一座 小五座	茨田郡五座 並小
須波麻神社	(大東市中垣内)	堤根神社(門真市磯島)
舞机神社	(御条畷市南御)	津島郡神社(守口市金田町)
高宮神社	(寝屋川市高宮)	細屋神社(寝屋川市太秦)
津津神社	(四条畷市鷺山)	高瀬神社(守口市馬堀町)
高宮大社御祖神社	(寝屋川市高宮)	意賀美神社(枚方市伊加賀)
國中神社	(四条畷市南御)	

後名類聚抄(承平年間:A.D.931~38)元和古活字那波道圖本

河内郡…英多・新居・櫻井(佐久良井)・大宅・豊浦・額田(治加多)・大戸

讚良郡…山家・甲司・枚岡(比良乎加)・高宮・石井

茨田郡…幡多・佐太・三井・池田・茨田・伊香(以加加)・大庭(於保久闇)・高瀬

交野郡…三宅・田宮・園田・岡本・山田・葛葉(久須政)

#### 《参考文献》

井上正雄 1922 「大阪府全志」卷之四

平尾兵吾 1931 (復刻:1973)「北河内史跡史話」山家郷と南隣

天坊幸彦 1935 「大阪府下の條里遺跡(浜・河を主とする)」『中古に於ける郷土の土地制度研究』星野書店

島之夫 1940 「攝河泉の條里制」『史林』第25巻第3号 京都帝国大学文学部

天坊幸彦 1947 「攝河泉に於ける條里遺跡の研究」『上代漁業の歴史地理的研究』大八洲出版株式会社

- 大越勝秋 1952 「河内國の條里制—大阪府下の條里制調査報告 其の二一」  
昭和廿七年度文部省科学研究奨励金による研究『河内國の條里制調査』(孔版)
- 大越勝秋 1952 「河内國の條里制—大阪府下の條里制調査報告 其の二二』(『河内國の條里制調査』) (孔版)
- 大越勝秋 1952 「河内の條里制の諸問題(一)—河内條里研究小史—」(大阪学芸大学地理学会『地理學報』3)
- 大越勝秋 1953 「河内の條里制の諸問題(2)—遺存坪名の問題—」(大阪学芸大学地理学会『地理學報』4)
- 大越勝秋 1953 『河内國條里制關係史料集』條里研究会
- 大越勝秋 1954 「河内の條里制の諸問題(3)」(大阪学芸大学地理学会『地理學報』5)
- 大越勝秋 1954 『河内國條里制關係史料集補遺』條里研究会
- 大越勝秋 1955 「河内の條里制の諸問題(4)—条里呼称の問題統一—」(大阪学芸大学地理学会『地理學報』6)
- 寝屋川市役所 1956 『寝屋川市誌』
- 平尾兵吾 1956 「高宮施寺(寺跡研究)」(寝屋川市役所『寝屋川市誌』)
- 大越勝秋 1957 「河内の條里制の諸問題(5)—条里呼称の問題 統一—」(大阪学芸大学地理学会『地理學報』7)
- 大越勝秋 1958 『河内國條里制關係史料集補遺(続)』條里研究会
- 大越勝秋 1960 『大阪府下(摂・河・泉)の条里制坪名帳』高尾彦四郎書店
- 大越勝秋 1966~1971 「河内國における条里制補遺1~6」(大阪府高等学校社会科研究会『社会科研究』第9~14号)
- 寝屋川市役所 1966 『寝屋川市誌』
- 落合重信 1967 『条里制』日本歴史叢書17 吉川弘文館
- 四条畷市役所 1972 『四条畷市史』
- 大東市教育委員会 1973 『大東市史』
- 京都大学文学部国語学国文学研究室編 1973 『諸本集成倭名類聚抄』本文篇 鹿川書店
- 寺前治一 1975 『寝屋川史話100題』寝屋川市文化財愛護の会(条里制の記述は1970~1973)
- 「角川日本地名大辞典」編纂委員会 1983 『角川日本地名大辞典』角川書店
- 平凡社地方資料センター 1986 『大阪府の地名』II 日本歴史地名体系第28巻(P.774) 平凡社
- 服部昌之 1990 「条里と交通路」(大阪府『大阪府史』第2巻第2章第3節)
- 小島博子 1998 「寝屋川市域の条里制—茨田郡条里と誠良都条里的境界—」(まんだら編集部『まんだら』No.65号)
- 大字高宮財産管理委員会 1998 『ふるさと高宮いまむかし』
- 大字高宮財産管理委員会 1999 『ふるさと高宮いまむかし』統資料史編
- 大阪府教育委員会 2001 『大阪府文化財分布図』

本稿は、以下の方々のご教示、ご協力を得た。記して感謝の意を表したい。(五十音順)

岸和田市立図書館・四条畷市立歴史民俗資料館・寝屋川市教育委員会・小島博子・越 奈央子・桜井 敬夫・佐野喜美・塩山則之・白井三千夫・辻本 武・野島 稔・濱田延充・山上 弘

## 第2節 茄子作（上の山）遺跡の歴史環境

### 位置と環境

茄子作遺跡調査対象地は、生駒山地から派生した交野台地に続く枚方丘陵のうち、天野川中流域の左岸筋に並行し突出する形で形成されている小丘陵の一つを、第二京阪道路が北東－南西の斜め方向に横断する区間である。

小丘陵上には、弘仁7年（816）に僧空海が金剛峰寺を創建した参詣道として整備された東高野街道が本区域ではほぼ南北方向に通じ、かつ、現在の市境になっている。調査地の西（枚方市）は、オガワ、あるいはコガワと呼ばれる小河川が浸食した谷部を挟んで茄子作台地（枚方丘陵のうちの地域的呼称）に接する。茄子作の旧村居住地域は茄子作台地の北半高所に集中し、調査地の西方にあたる台地南半はその耕作地域である。コガワの谷部も茄子作の耕作地域であり、これら茄子作の耕作地は、生駒山に向かって茄子作の分村高田、交野市星田地区の耕作地域に続いている。また、調査地の東（交野市）は、小丘陵及び小丘陵につながる低位地が天野川左岸の堤防に続く。この低位地は、対岸（右岸）北東部に居住域が存する旧私部村の耕作地域となっている。

天野川は、奈良県生駒郡、四条畷市下田原・上田原の山間に源を発し、西北流して交野市域の星田山から市街へ、次に枚方市街を抜けて淀川に出る。流域には京街道、岩舟街道、清滝街道、東高野街道、山根街道、もしくはこれらに先行、あるいは後続する街道があり、摂津、山城、大和、南河内、紀州、大坂に通じている。重要街道の通過地域である。また、古来、星田山一帯は一木もない荒涼とした岩山続きであったといわれる。保水力のない山を通過する河川は、増水期には様相が激変したと推測される。桓武天皇が延暦4年（785）に交野の柏原の野に郊祀壇（郊外で星祭りをする祭壇）を築き天神を祀つて以来（統日本紀）、上流の星田妙見宮の北曜星伝承とも相まって、天野川＝天の川伝承は人々の郷愁を誘っている。近世前期、貝原益軒が「南遊紀行」で「砂川にて水少なく、其川白く広く長くもて恰も天上の銀河の如し」と記したものこの所以である。

### 周辺部の遺跡

流域には旧石器～戦国時代に至る古くから知られた遺跡が多い。枚方市では禁野本町、中宮ドンバ、禁野車塚下層、星丘西、星丘、村野、村野南、岡東、山之上天堂、藤田山、藤田土井山、そして、茄子作遺跡などがある。交野市でもハセデ、都津都御跡、都津渋り、私部城、星田坊領遺跡などがある。

とくに枚方市側にとって、本流域の遺跡は丘陵・台地上にしか立地しないようにいわれていたが、今回調査によって、谷部低位地での遺跡の存在がわかるようになった。各遺跡は、旧石器や弥生時代遺構・遺物が伴出する例が多い。しかし、上記で縄文時代のものが伴うのは、現状では岡東遺跡だけである。弥生時代に関していえば、前期遺跡では星丘西遺跡がある。また、今回調査で確認された中期前葉（第II様式）の遺構・遺物の検出は、星丘西、岡東、坊領遺跡に次ぐものである。流域から少し離れるが、交野市の森遺跡でも同時期の遺物検出が指摘されている（西田・荒木；2000）。

## 河内湖と天野川を結ぶ地域一帯の渡来系氏族

弥生時代後期に始まる星丘遺跡、中宮ドンバ遺跡では、鉄製品の遺存が良く、注目されている（枚方市教育委員会；1980、1988）。また、茄子作台地上には、昭和49年に北河内地方ではじめて方形周溝墓が確認された茄子作遺跡がある。同遺跡では、昭和52年にも古墳時代中期住居跡から韓式系土器、および伽耶系陶質土器が検出され、朝鮮半島南部からの渡来系氏族の存在が話題になった。

北・中河内には、かつて岬文海進で生駒山麓まで海が押し寄せたが、海退に伴い形成された河内湖があった。この河内湖周辺地域で最近調査された古墳時代中期を中心とする遺跡では、韓式系土器、初期須恵器をはじめとして機織りや牧場関係遺物が数多く出土している（枚方市出屋敷遺跡、寝屋川市楠遺跡・長保寺遺跡、四条畷市奈良井遺跡・蓮屋北遺跡・中野遺跡、大東市寺川遺跡など）。先述の森遺跡でも、同時期の鍛冶遺構が検出された。すなわち、生駒山麓沿いの河内湖東部から天野川に抜け淀川に至る寝屋川、枚方、交野各市にかけての地域は、朝鮮半島渡来系氏族・技術との関係を示す遺跡が集中するようである。

周辺は、渡来系氏族の関係した史料や遺跡が多い。たとえば、6～7世紀に仏教伝来に関して活躍した伝・秦河勝の墓が寝屋川市川勝町にある。7世紀天武朝期に「漢人庄員之後也」とされる交野忌寸の名があり（新撰姓氏録）、また、下流の枚方市中宮には百濟王氏が住まいし8世紀中葉に百濟寺が建立されている。弥生時代後期から古墳時代中期にかけての状況は、これら渡来系氏族が拠点とする遠因を示すかのようである。以上から、周辺部の遺跡に対する歴史観見直しが進行中である。

## 交野屯倉から石清水八幡宮寺領三宅山へ

片山長三氏は、周辺部に残る三宅山、私部などの性格や、八幡宮領との関係をかつて次のように推測された。交野、枚方の天野川流域から生駒山麓部にかけて（現在の郡津・私部・寺・森・私市・星田・茄子作周辺）は、敏達天皇6年（577）に流域を司る交野連から豈御食炊屋姫尊に寄進され皇后領（私部）となった。592年に同妃が推古天皇として即位すると、天皇領としての税の徵収に関わる交野屯倉（三宅）が設置された。屯倉は大化の改新（645）を契機に廃止され、交野郡司の管轄となった。郡衙の所在地は、現在の郡津集落の南部、倉山と称する標高25mの洪積台地西端の一帯と考えられている。しかしながら、三宅山の称は残り、のち、天暦3年（949）の少し前に交野郡司が石清水八幡宮寺領として寄進した三宅山莊園になった（石清水文書）ということである（交野町役場；1963）。

倭名類聚抄（承平年間：931～38）では交野郡に三宅・田原・園田・岡本・山田・葛葉の地名がある。交野市教育委員会による森遺跡の平成12年度調査では、10～13世紀に所属する倉庫群など多数の平安時代遺構が検出されたことから、三宅山莊園との関係が話題になった（交野市教育委員会；2001）。

天野川右岸、流水範囲を示す字名（長淵・河原・長砂・川辺・川原など）の連なる東側に、古代の交野郡条里の遺存と考えられている方形区画の水田が続く。水田は、天野川に平行する方向に条軸をとるのが特徴である。本遺跡が所在する左岸地域は、はじめに述べたように丘陵が並行し、したがって、牧としての開発地に適していたのであろう。光仁天皇、桓武天皇の行幸をはじめとして、とくに平安時代には都の公家達が台地丘陵面の交野原一帯で遊獣することが多くなかった。淀川流域や河内湖縁辺部には

馬を飼育する牧が設けられ、交野には朝廷の交野御廻所が置かれた。星田牧（莊）は、久寿2年（1155）に官省符莊（勅免莊）になっている。

### 東高野街道沿いの遺跡

今回調査地の中心に通じる東高野街道を主体に当地の歴史をみる。

**中世、波多野氏の館跡** 茄子作集落北側の藤田土井山遺跡では濠や井戸、水汲み場といった13～14世紀を中心とする遺構や遺物が検出されている。この地は、茄子作に居住する一統のかつての城・砦跡（南北朝期、南朝方の郷土波多野帶刀の居城）との伝承がある。現在の集落景観調査で確認できる茄子作の旧村部分は、防衛を主体とする台地上の塊村といった趣の集落形態をとっている。北東区域には行基創建伝承のある釈尊寺（現在、浄土宗）が隣接する。現在の茄子作集落は、中世に遡る可能性を秘める。また、藤田土井山遺跡の北2kmに山之上天堂遺跡、茄子作台地南半の高田を含む地域に茄子作下浦遺跡が所在する。山之上天堂遺跡は14世紀を中心とする比較的短期間の遺跡であり、多数の柱穴・井戸・溝・溜池状遺構などが検出された。天堂という旧地名が残ることから堂宇など宗教施設があったかと推測されている。茄子作下浦遺跡も14世紀を中心とし、15世紀を含む中世の掘立柱建物・土坑・溝などが検出されている。

**融通念仏宗再興伝承の地** さらに、調査地周辺には、鎌倉時代の新仏教、14世紀に本地方での布教が広まった融通念仏宗関係の伝承が集中している。調査地の街道沿い北すぐの小字「一本木」には、元亨元年（1321）に融通念仏宗を中興した法明上人が山城国石清水八幡宮神使と遭遇、天得如来画像その他の宝物を得て喜びのあまり傍らの松の木に画像を掛け念仏踊りをしたという伝承地「本尊掛松遺跡」がある。法明上人に関しては、藤田土井山遺跡近くに「乾甚兵衛屋敷跡」伝承地もあり、宝物を得た上人が宿泊されたところとされている。融通念仏宗は、本尊仏が遊行することで知られる宗派である。本宗の中興が石清水八幡宮と関係する伝承がこの地に残ることは、さらに後の天正12年（1584）、秀吉によって安堵され時代を超えて幕末まで続くことになった「八幡宮御供料所」との関係があるのだろうか。

いずれにしても、天野川左岸のこの地域に中世の遺跡が点在するということは、具体的には東高野街道が通過するように、古街道筋の他地域の遺跡群の特徴とも一致する。

今回調査では、旧石器～縄文時代、弥生時代、奈良～平安時代、中世の遺構・遺物が検出されている。調査地は当初「茄子作遺跡」としてあげられた。しかし、本調査地で確認された遺構は、茄子作遺跡が所在する小丘陵とは別になった小丘陵を中心に展開するようである。しかも、今回確認された遺構は、本遺跡の重要性を物語る片鱗が見えだしている。すなわち、本遺跡は、茄子作遺跡とは所属が異なる早い時期から特色が見いだされる遺跡の可能性があり、範囲が小丘陵上と小丘陵の東西両縁辺部に及ぶことから、交野市側の地域の小字「上の山」に名称をとることになった。上記に述べた地域の歴史とどのように絡むのか、今後の成果が期待される遺跡である。

（井藤）

#### 《参考文献》

- 端野惟吉 1877 『茄子作村史』（端野伝兵衛家所蔵）
- 交野町役場 1963 『交野町史』改訂増補一
- 枚方市役所 1967 『枚方市史』第1巻

## 第2節 茄子作《上の山》遺跡の歴史環境

- 交野市役所 1981 『交野市史』民俗編  
枚方市文化財研究調査会 1980 『枚方市文化財年報Ⅰ』  
交野市 1981 『交野市史』交野町略史復刻編  
枚方市役所 1986 『枚方市史』第12巻  
平凡社地方資料センター 1996 『大阪府の地名』Ⅱ 日本歴史地名大系第28巻 平凡社  
枚方市教育委員会・(財)枚方市文化財研究調査会 1996  
『旧川越村(村野・茄子作・山之上・田宮)』枚方市民俗文化財調査報告4  
枚方市文化財研究調査会 1988 『枚方市文化財年報IX』  
西田敏秀・荒木幸治 2000 『淀川左岸地域における弥生集落の動向』『みずほ』第32号 表1 (P.42)  
交野市教育委員会 2000 『古代交野と鉄Ⅱ』交野市埋蔵文化財調査報告1999-Ⅱ  
交野市教育委員会 2001 『森遺跡Ⅲ』交野市埋蔵文化財調査報告2000-Ⅱ

## 第3節 讚良郡条里遺跡 自然科学分析

### 1. はじめに

讃良郡条里遺跡においては、花粉化石・珪藻化石・火山灰について土壤分析を実施している。

分析は株式会社 バレオ・ラボに委託し、花粉化石は鈴木茂、珪藻化石は藤根久、火山灰は黒澤一男が分析を行った。以下、分析結果の概要を紹介する。分析方法、考察等の詳細については、次年度の報告書に掲載する。

### 2. 讚良郡条里遺跡の花粉化石

試料は、2000年度に調査を行った00-⑧調査区より28層を1点（第1節 第5図参照）、2001年度の01-④調査区より7点（第19図）、01-⑥調査区より20点（第20図）の計28点を採取した。

検鏡の結果、樹木花粉35・草本花粉22・シダ植物胞子3・藻類1の総計61の花粉・胞子化石が検出された。これら花粉・胞子化石の一覧は表1、それらの分布は図21～23に示されている。なお、分布図に示されていない試料（01-④調査区の試料14～23、01-⑥調査区の試料4、7、8、12～15、18、19）は花粉化石の検出数が少なかったためであり、これは試料に砂が卓越することから、シルト～粘土サイズの花粉の多くが流出しているか、あるいは堆積速度が速く、結果として花粉の密度が非常に低くなっている可能性が推測される。

花粉分布図から、00-⑧調査区の試料1、01-④調査区の試料8～12、01-⑥調査区の試料1～17に示すように、照葉樹林要素のコナラ属アカガシ亜属やシノキ属が多く、遺跡周辺では照葉樹林が優勢であった。また、落葉広葉樹のコナラ属コナラ亜属も多く検出されており、これを主体とした落葉広葉樹林も分布しており、温帯針葉樹のコウヤマキ属やスギも一部に林分を広げていたことが推測される。また、こうした森林が成立する以前は01-⑥調査区の最下部試料20に示されているコナラ亜属を主体とした落葉広葉樹林が優勢であった。草木類では01-⑥調査区の最上部試料1でイネ科が多産しており、水田雑草を含む分類群のオモダカ属やキカシグサ属なども検出されており、これらは水田稻作が行われていたことを示唆していると考えられる。

（鈴木 茂）

### 3. 堆積物中の珪藻化石群集

試料は花粉化石分析と同試料であり、総計28点を採取した。検出された珪藻化石は表2（01-④調査区・No.1～7、01-⑥調査区・No.8～27、00-⑧調査区・No.28）に示すとおり、海水～汽水種が7分類群7属6種、淡水種が30分類群19属21種であり、海水～汽水種が2環境指標種群、淡水種3環境指標種群に分類された。全体的に珪藻化石が少ない試料が多く、このうちの10資料からは1個体も検出されていない。01-⑥調査区の試料16（No.23）で45個体、試料20（No.37）で138個体が検出されている。試料16は淡水種が多く、珪藻殻数が少ないものの海水泥質干潟指標種群や内湾指標種群などが検出された。また、試料20では泥沢湿地付着生指標種群や陸域指標種群などが検出され、全体として淡水種が多いとの分析結果を得ている。

[検出された珪藻化石の環境指標種群]

- 珪藻化石の環境指標種群は、小杉（1988）、安藤（1990）が設定した環境指標種群に基づいている。
- ・内湾指標種群（B）…塩分濃度が26~35パーミルの内湾水中に浮遊生活する種群である。
  - ・海水泥質干潟指標種群（E 1）…塩分濃度が12~30パーミルの水城の泥底に付着生活する種群である。この生育場所にはイボウミニナ主体の貝類層やカニなどの甲殻類層が見られる。
  - ・湖沼浮遊生指標種群（M）：水深が約1.5m以上で、水生植物は岸で見られるが、水底には生育していない湖沼に出現する種群である。
  - ・沼沢湿地付着生指標種群（O）…水深1m内外で、一面に植物が繁殖しているところ及び湿地で、付着の状態で優勢な出現が見られる種群である。
  - ・陸域指標種群（Q）…陸域を生息地として生活している種群である。

（藤根 久）

#### 4. 讀良郡条里遺跡における火山灰分析

試料は00-⑤調査区の28層より採取された（第1節 第3図参照）。火山灰はT.P.+3.0m前後で確認しており、層厚は最大で約15cmを測っている。この火山灰層は、調査時において黒色粘土層に挟まれたプライマリーに近い状態で検出され、水平方向の堆積構造が認められることから、水深の浅い地点での水成堆積物と考えられた。分析ではテフラ組成分析、屈折率測定より火山ガラスの同定を行っている。

##### （1）テフラ組成分析

試料は、軽鉱物の割合が99.6%と非常に高い値を示し、その97.9%は火山ガラスからなる。火山ガラスの形態区分は、平板状のバブル型（b 1）が多く、63.0%を占めている。

##### （2）屈折率測定

平板状バブル型火山ガラスの屈折率は範囲1.4999~1.5018、平均1.5008を示す。

##### （3）結果

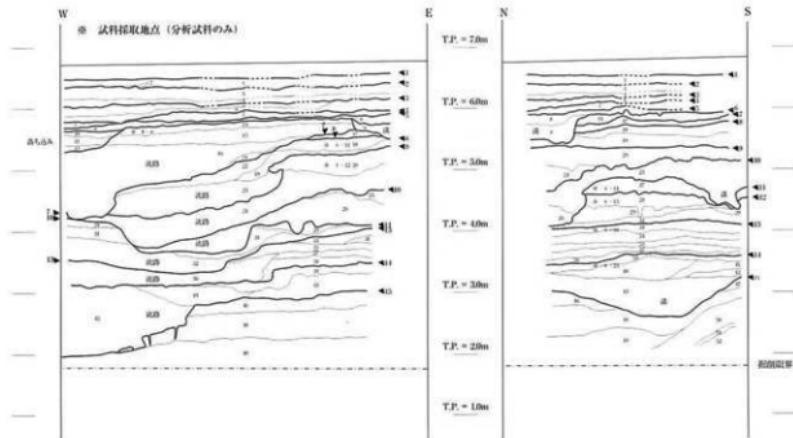
上記の分析結果より火山ガラスは“姶良Th火山灰（Aira-Th Ash : AT）”に同定・対比された。

姶良Th火山灰の特徴は、細粒で細砂鉱物のうち火山ガラスが90%以上を占め、その形態は鋭い端をもつ無色透明なガラスで、気泡の側壁、あるいは泡と泡の縫目のかけらからなる。屈折率は範囲1.499~1.502を示す。南九州の鹿児島湾北部の姶良カルデラを噴出源とし、九州地方から東北地方まで広く分布している。その噴出年代は上下の堆積物の14C年代測定から2.1~2.2万年前と推定されており、近年では、タンデトロン加速器質量分析法（AMS法）により2.4~2.5万年前のまとまった値が得られている（町田・新井1976、村山ほか1993、池田ほか1995）。

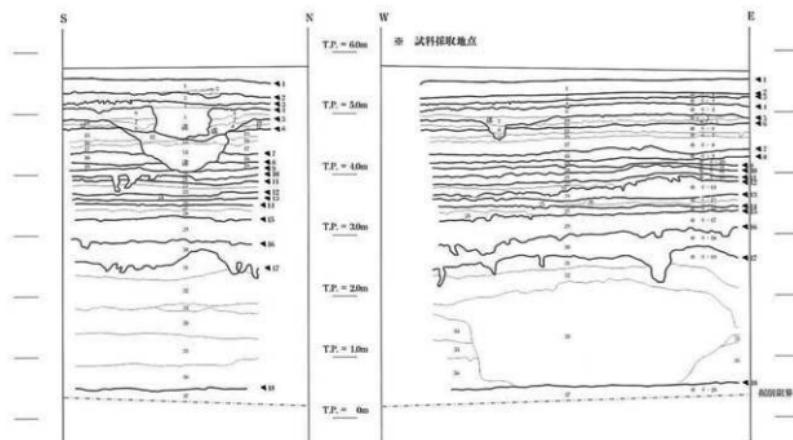
（黒沢一男）

#### 《引用文献》

- 安藤一男 1990年 「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用」 『東北地理』42  
池田晃子・奥野光・中村俊夫・専井正明・小林哲夫 1995年 「南九州 姶良カルデラ起源の大噴火下鉄石と入戸火砕流中の炭化樹木の加速器質量分析法による14C年代」 『第四紀研究』34  
小杉正人 1988年 「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用」 『第四紀研究』27  
町田洋・新井房夫 1976年 「広域に分布する火山灰-姶良Th火山灰発見とその意義」 『科学』46  
町田洋・新井房夫 1992年 「火山灰アトラス」 東京大学出版会  
村山雅史・松本英二・中村俊夫・岡村真・安田尚登・平朝彦 1993年 「四国沖ビストンコア試料を用いたAT火山灰噴出年代の再検討-タンデトロン加速器質量分析計による浮遊性有孔虫の14C年代-」 『地質学雑誌』99  
横山卓雄・植原徹・山下透 1986年 「温度変化型屈折率測定装置による火山ガラスの屈折率測定」 『第四紀研究』25



第85図 講良郡条里遺跡01-④調査区 試料採取地点図

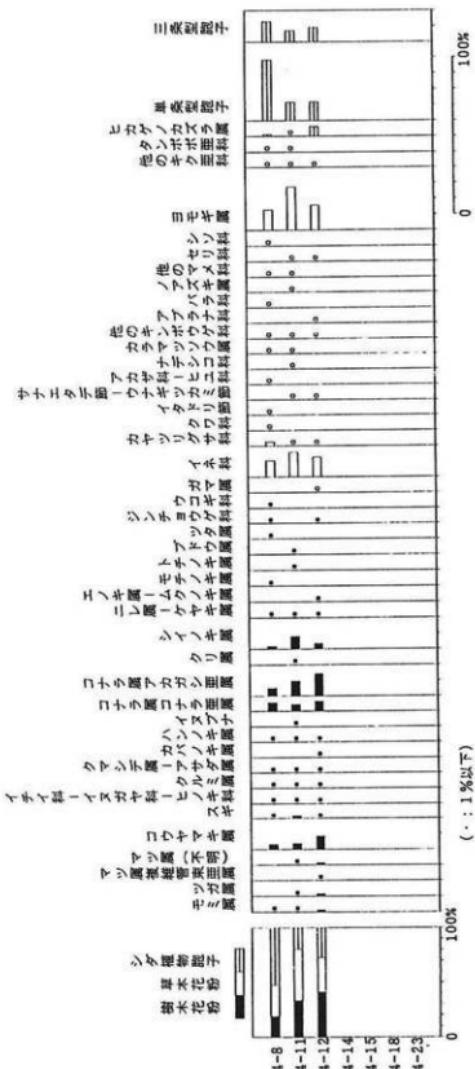


第86図 講良郡条里遺跡01-⑥調査区 試料採取地点図

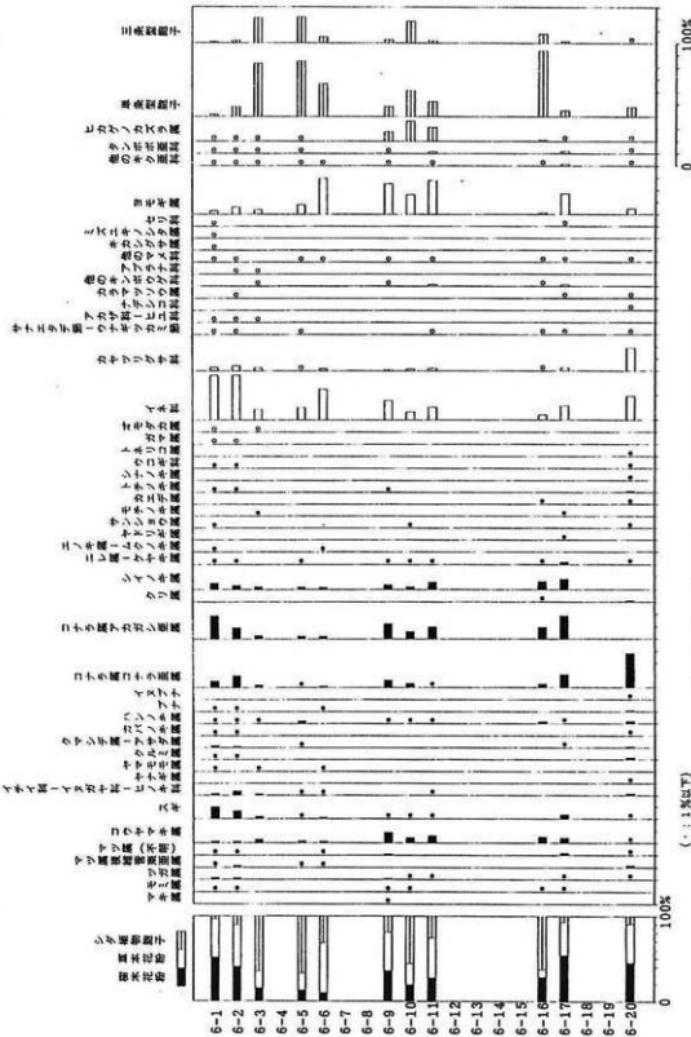
目次	0-1	1-2	2-3	3-4	4-5	5-6	6-7	7-8	8-9	9-10	10-11	11-12	12-13	13-14	14-15	15-16	16-17	17-18	18-19	19-20	20-21	21-22	22-23	23-24	24-25	25-26	26-27	27-28	28-29	29-30	30-31	31-32	32-33	33-34	34-35	35-36	36-37	37-38	38-39	39-40									
總計	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1							
花粉種類	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1							
被子植物	28	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12						
木本灌木	4	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	
草本	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
禾本科	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
莎草科	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
蘆屬	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
蕨類	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
裸子植物	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
苔類	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
藻類	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
孢子	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
孢子植物	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
浮游植物	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
其他	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

表4 開良都条里遺跡検出花粉化石一覧表

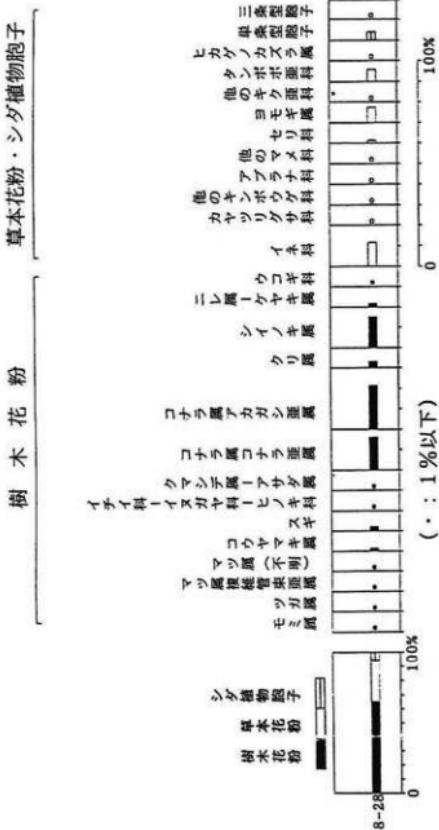
## 草本花粉・シダ植物孢子



第87図 鹿児島県東郷町01-04調査区の花粉化石分布  
(出現率は全花粉・孢子总数を基準として百分率で算出した)



第388図 諸良郡条里遺跡0-6調査区の花粉化石分布図  
(出現率は全花粉・孢子總数を基準として百分率で算出した)



第89図 調査地別種別割合(⑥調査区の花粉化石分布図  
(出現率は全花粉・胞子總数を基準として百分率で算出した)

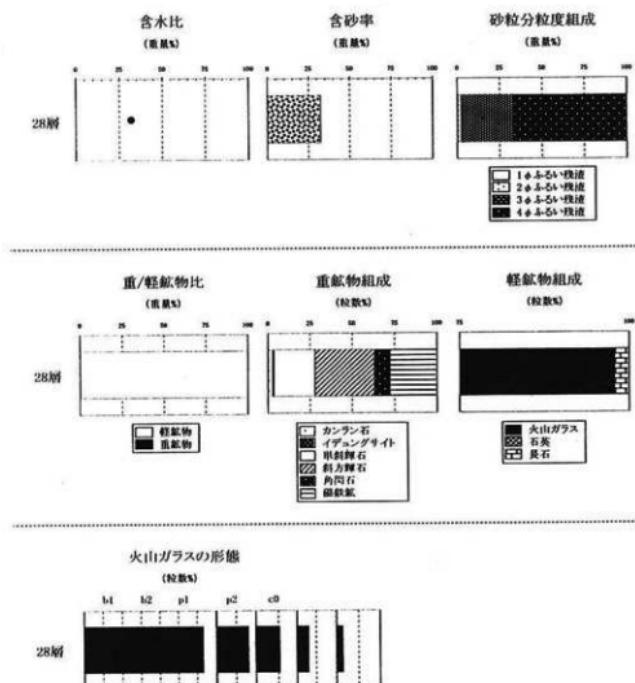
分類群	種群	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26
Ctenoides spp.		+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Ostracoda var. var.		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Mytilus suricula		3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Mytilus edulis/fermis		-	21	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Cardium edule		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Alcyonium digitatum		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Bivalvia pectiniferae		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Ampulla vulgaris		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Culicoides laeta		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Oscillatoria planulata		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Chondria squamaria		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Styela spp.		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Rhizomes spp.		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Botryza tristis		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Z. spp.		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Rhizocladia lateritia		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Zostera marina		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Ulva intestinalis		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Ulva lactuca		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Molinella iridis		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Alizania spp.		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Thalassia testudinum		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Zostera capricorni		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Mazzaella splendens		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Virgularia marinum		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Rhynchospora effusa		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Zostrodes pectiniferae		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Sargassum spp.		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Dillwynia spp.		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Littorina sitkana		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<b>海藻類</b>	<b>(B)</b>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
海藻不定、不明類	(D)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
海藻不定、不明類	(Q)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
海藻不定、不明類	(W)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<b>海藻類</b>	<b>(C)</b>	6	5	1	2	1	1	2	1	0	0	0	0	1	1	2	1	0	1	1	2	1	0	0	0	0	2

表5 創良都条里遺跡出土化石一覽表

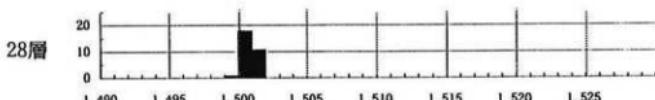
試料番号	含水率 (重量%)	含砂率 (重量%)	砂粒分の粒度組成 (重量%)				重・軽鉱物組成 (重量%)	
			1φ	2φ	3φ	4φ	重鉱物	軽鉱物
28層	31.8	32.2	0.2	2.1	31.0	66.6	0.4	99.6

試料番号	軽鉱物組成(粒数)			火山ガラス形態分類(粒数)				
	石英	長石	火山ガラス	平板状	Y字状	織維状	スポンジ状	破碎型
28層	-	4	188	121	31	20	11	5

表6 調良都条里遺跡00-⑤調査区28層中の鉱物分析結果一覧表



第90図 00-⑤調査区28層中の鉱物組成図



第91図 調良都条里遺跡火山ガラス屈折率図



## 第4節 高宮・小路から讚良郡条里の沖積堆積状況

生駒西麓には断層があり、北方延長には南北性の枚方とう曲がある。道路用地はそれを跨ぎ、大阪層群上部は西南西へ傾斜する。その影響を受けて、高宮庵寺がのる台地上から西方に30°程度、もしくはそれ以上に地層は傾斜する。そのため、高宮から小路にかけて急激に大阪層群上部が下降し、段丘堆積層と沖積層が堆積する境目となり、小路及び、讚良郡条里の大坂外環状線付近までの区間は扇状地となる。

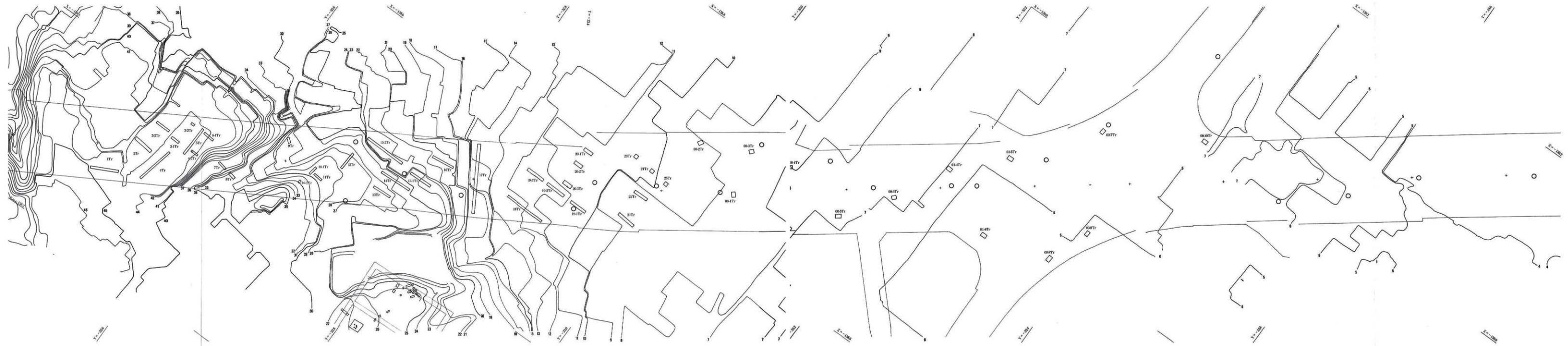
今回の調査地は上記のような複雑な地形と直交していることから、高地から低地へと変化に富んだ人間の足どりを追う必要もある。

その調査成果からは、東側、小路地区の17トレンドで西にむけた段丘堆積層と沖積層が検出でき、この地点が現地表における枚方とう曲との境目となっている。この付近では旧石器、縄文時代から現代に至るまで、くまなく遺構を確認することができ、特に古代、中世の掘立柱建物が特筆できる。さらにそれより西は基本的に、ゆるやかに下る洪積台地の上へ、一時は現地表面より高く縄文時代中期の砂層堆積物が大阪外環状線付近まで覆い、さらに西南では離水した砂が三角州平野状に突き出ていたことが分かる。それ以降、特にその西側周囲は門真市南部まで弥生時代水田層が発達する。これで、北河内低地部においては一通りの大きな沖積作用を終了し、古墳時代以降は基本的に形成されたこれら微地形の高所を削り、わずかに残る鞍部は流水堆積で埋没した後、盛土、整地することによって地形が改変され、河川は天井川化して今日に至る。こうした景観変化の一端を、ここではうかがい知ることができる。

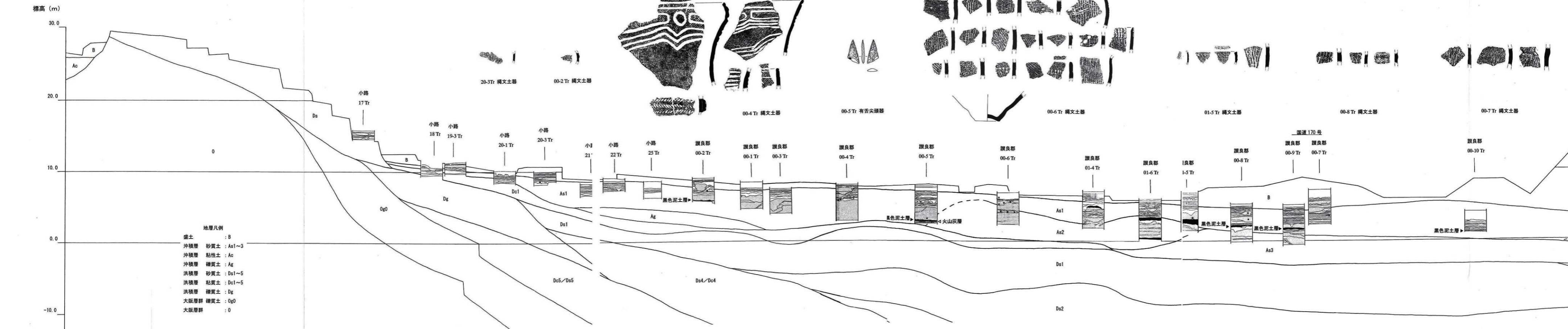
今少し、枚方とう曲から大阪外環状線付近にかけて詳述すると、第5調査区で現耕土から4mの深さ、T.P.2.8m前後で、上下を泥土層ではさみ、安定したA.T.火山灰層が島状に残ったような状況で検出している。このことから、この高さで後期旧石器時代に泥湿地が広がっていたことが分かる。おそらく、これは枚方とう曲で形成された崖下にそって南北できた窪み状の淵に堆積したものではなかろうか。この地点ではこの直上から縄文時代中期の砂層が2mの厚さで堆積する。また、最も西側の第8調査区T.P.2.0m付近においては、流水堆積の流路底盤や上で、アカホヤ火山灰層のブロック土が押し流されたような状況を検出している。以上から当調査地の讚良郡条里側は、A.T.火山灰層及びアカホヤ火山灰層はおおむね縄文時代中期に流され、多くはこの間の堆積の手がかりを失っていることが分かる。この時期以降は面的に及ぶような大きな流水堆積は認められない。

その後は、全体にわたって古墳～中世の流路、溝、中に一部、条里区画にかかわる可能性がある古代の溝も確認できる。また、西側では円筒埴輪、須恵器が出土することから、削平を受けた古墳の存在もまた考えられる。このことからすれば、やはり微高地は縄文時代中期より1mほどは削られていたものと想定できる。

(一瀬)



第92図 小路道跡・鉢 確認調査トレンチ位置図



第93図 縦断方向地盤想定図 H=1/1000 V=1/200

第93図 縦断方向地盤想定図 H=1/1000 V=1/200